
あみものべいびー ばんがいへん

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あみものべいびー ばんがいへん

【Nコード】

N7686S

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

編み物BABYの小話です。未来編、過去編、小話。未来編では、既にくっ付いているカップル達がいるので、知りたくない方は回避してくださいね。

女子会（前書き）

未来編のため、全員がカップリングしています。唯と亨、桜と秀人は勿論、美奈が誰と付き合っているか知りたくない方は、回避してくださいね。

女子会

「さー、ぱーっと女子会といきますか！」

ビールが並々と注がれたグラスを片手に声を張り上げたのは、昨今のモデル業界で次々と新人が出てくる中、並み居る若手や中堅達をその実力と美貌とで封殺している桐生美奈。至って本人の性格は竹を割ったようなさっぱりとした性格をしている。その人気と美貌を鼻にかけない性格も相まって、日本だけではなく、アジア圏に絶大な人気を誇っている。

美奈の父は、世界的ブランド『Dupont』の元看板デザイナーであり、現在は自身のブランドを立ち上げ、その中でも日本限定レベル『カサブランカ』で圧倒的支持を得た、世界有数のデザイナーである桐生総一郎だ。また実兄である桐生秀人も、父と同じくデザイナーの道を選んだ。兄もまた新進気鋭の若手デザイナーとして、国内外から熱い期待を持って見られている。

3

「かんぱーい！…ぶっはー！！くーう、んまああいつ！！」

一杯目のビールを一気に半分まで減らした彼女は、葛城桜。

桐生家のアイドルであり、絶対的庇護対象である義理の娘のアルバイト先の『アクア手芸店』の店長である。

彼女と桐生家の義理の娘との出会いは、数年前に遡る。当時桐生家に入ったばかりだった小さな彼女は、よく似た母親に連れられて桜の父が店主を勤める店に来店した。子供好きだった桜は、その子とあつという間に仲良くなり、母親が来店しない時でもちよくちよく

遊びに来るようになった。

そんな中、桜が高校生の頃に彼女と一緒に店で遊んでいると、溺愛する義妹を迎えに来た兄が放った一言に桜の堪忍袋がぶっちんと音を立てて切れた。以来、兄とは犬猿の仲だった。

にも関わらず、あれよあれよと言う間に、気が付けば彼氏彼女の仲になっていた。桜にしては、未だに騙された風にしか思えないが、あの男はいけしゃあしゃあとこう言った。

「僕以外にお前に我慢出来る男なんて、絶っつ対にいないから。」

自信たつぷりに言った男にムカついて、その綺麗すぎる顔をグーで殴ったのは間違っていたはずだと信じている。

「いただきまーす。あ、これ美味しいなあ。」

いたくのんびりとした口調で、美奈や桜がグビグビとビールを煽る中、ぱくぱくと料理に舌鼓をうつ彼女。グラスの中身はウーロン茶である。酒が飲めない？いやいや、彼女はまだ未成年なので飲めないのだ。母親は酒豪だったらしく、父や義父を酒のボトルの中に沈めたと後に語られた。故に、潜在的に酒豪の血を引いているのではないかと家族内では囁かれているが、未成年の為に未だ予想の域は出ないままである。

神崎唯。戸籍上は義父の姓である桐生なのだが、本人の希望と義父の力添えによつて、学校内では実父である神崎の姓で通っている。自他共に認める義理の家族全員からの溺愛っぷり、そして本人は無自覚なままのロリ系の可愛さは校内でも人気が高いのだが、生来の

ものなのか鈍感なので、告白をされてもそれを告白と思わないままに、今までの学生生活を過ごしてきた。本人曰わく、平凡らしいが、それを周囲は無言で否定しているのを彼女は知らない。

「女子会って言ってもさ、美奈さん、彼氏と喧嘩したって聞いたけど。その愚痴を言いたいんじゃないの？」

けらけらと笑い、桜が一杯目のビールを飲み干した。早々にピッチャーでビールを頼むと、美奈はそれを見ながらシーザーサラダに手を付けた。

「いやあ、喧嘩っていつかー…」

「お姉ちゃん、喧嘩したの？」

「らしいよ。秀人が嬉々として喋ってたから。なんかね、最後の辺りには関節技かけて落として帰ったって言ってた。」

「…お姉ちゃん…。」

愛する義妹の可愛らしいくりくりした目が悲哀に染まったのを見るや否や、必死に否定し始めた美奈は、それまでの経緯を事細かく話し出した。

「仕事でキスシーンの撮影があったから、それを言わないでいて、

いざそれが発売された雑誌で見たときに、一言あっても良かったんじゃないの？って言われたからー…。」

「で、喧嘩したの？そりゃあ美奈さんが悪いでしょー。」

反論出来ないのかむっつりと黙りこくった美奈を尻目に、唯はもぐもぐと食べ物を口に放り込む。現在は軟骨のから揚げを食べ、残り二つ三つしか無くなっている。

「なんか、想像付かない。怒ってるよ。」

「あたしはよく会ったことないからわかんないけど、どんな感じの人なの？」

「うーん……いつも笑ってる感じ？あんまり怒る事ってないんですよね。」

「美奈さんってさ、前カレもそんな感じだったんでしょ？そーいうのがタイプなの？」

「いや、唯は騙されてる！あいつはスツゴイヤな奴なのよ？イジワルばーっか！毎回あたしの方が泣かされてる！」

唯は美奈の彼氏を思い浮かべる。

イジワルと言っても、思い浮かばない。とは言え、美奈がこうまで言うのだから間違いではないのだろう。あの泣きボクロのある目はずっと優しいものだと思っていたが、これからは少し見方を変えた

方がいいのかもしれない。

「あたしの事はいいわよ、桜はー？どうよ、お兄ちゃん。あたしが見たところによると、お兄ちゃんって相当桜にのめり込んでると思うんだけど。」

「あ、それ私も思ってた。」

姉妹合わせてうんうんと頷き合っているのを見て盛大に顔をしかめた桜は、美奈と二人で飲んだピッチャーのビールが残り少なくなっているのに気付き、次はウーロンハイを頼んだ。美奈は甘めのカシスオレンジだ。ついでに唯の飲み終わったウーロン茶をオレンジジュースに変えて、いくらか食べ物も追加で注文して、詳細を聞きたくてうずうずしている仲の良い姉妹に向き合った。

「言っちゃ悪いけど、あの男は、まー、俺様！！あたしの意見なんて聞こうともしないわ！！」

「お兄ちゃんが？」

「唯ちゃんさ、本当にあの男が義理の兄で嫌な事されてない？あたしからすれば、一事が万事ムカついてしょうがないんだけど！」

「あははははっ！！桜ってお兄ちゃんに振り回されてんの？」

「振り回されてるっていうか、あいつは俺様だからね。ていうか、亭主関白？ねえ、美奈さん。秀人ってイタリア育ちよね？あれ、ど

つかの血入ってるんだっけ？イタリア人って女の人に優しいんじゃないの？」

「あ、あたし達フランスの血が入ってる。うーん、イタリア男はねー、女を愛でるのよねー。ラテンの男は情熱的よお。イタリア、スペイン、ポルトガル辺りは本当にいい男揃い。ま、その分女も情熱的だけどね。」

例の如く、焼きそばを頬張っている唯に構わずに女二人の熱いトクは進んでいく。

「大体さ、お兄ちゃんって恋愛音痴なのよねー。」

「どづいう事？」

「今まで好きになった女っていないんじゃない？ねえ、唯。」

「む（頬張りながら頷く）」

「マジで？」

「今までに付き合ってきたのだって、セックス目当てみたいなもんよっ。」

「……………サイテー……………」

ぼそりと低い声で自らの彼氏を罵った桜の目が座っているのに気付

いた唯が、あわあわと必死にフォローする。

「でっ！でもね！！お兄ちゃんの彼女のポジションは桜さんが初めてだよ！」

「ああ、そうそう。お兄ちゃんって、絶対に特定の彼女作らなかったの。イタリアに居たときからそうだったわよ。」

「それに、日本に来た高校時代の頃の事を高橋さんに聞いたけど、そう変わらない異性関係だったって教えてくれたし！大体、お兄ちゃんって恋愛音痴だから、恋愛関係に持ち込むのって無かったと思う！だから、桜さんがお兄ちゃんの初めての彼女！！ね、良かったね、桜さん！！」

「…なんか微妙だけど…まあいいや…。」

ぐいっとウーロンハイを飲み干した桜は、芋焼酎を注文し、それに乗じて美奈は日本酒を頼んだ。
唯はコーラを頼み、今度はお新香の盛り合わせをせつせと食べている。

それを見て桜はふつと笑んだ。

「唯ちゃん、よく食べるねえ。」

「本当羨ましい…唯、体重何キロ？45キロとか無いでしょ？」

「えー…？………うん……だった、だけど身長無いからね！！」

「かーっ！細っ！！」

「ねー！？細いよね、細いよね桜！にも関わらず、胸はあるのよ、
どういう事？」

美奈にぐいっつと唯の後ろに回り、そのあまりの素早さに驚いている矢先、胸が揉まれた。声にならない悲鳴を上げている唯をよそに、美奈の手は容赦なく揉みしだいて、桜はそれを感嘆の目で見ている。一応個室の為に人の目に触れる事は無かったが、生憎店員が注文の品を持って来たところとかち合ってしまった。それが女の店員だったのであればまだ救いがあったものの、運悪く男の定員だったもので、胸揉み現場に遭遇した店員は顔を真っ赤にさせて狼狽えてしまっている。挙句酒を零し、それを見た桜はゲラゲラ笑い、遂には唯の機嫌はみるみるうちに降下していった。とは言っても、真っ赤な顔で涙目のまま睨みつけてくる義妹の可愛さに悶絶している美奈には通用しない。桜は酔った頭で、唯の彼氏の事を考えた。

「美奈さんさあ、あんまり唯ちゃんにイタズラすると、唯ちゃんの彼氏に怒られ「あんな男が唯の彼氏だなんて、あたしはずえつつつたいに認めない！！！！！！」

料理の空いた皿が浮き上がる程の強さでテーブルを叩いた美奈の目は、最早完全に座っている。

「あの男が…あんな男が唯の彼氏…何かの間違いに決まってる…」

「み…美奈さん？」

『あんな腐れ (プー)の野郎… (プー)して
プー)のまま、×××(プー)してやる…』

「美奈さん、イタリア語で罵らないでー！ー！」

「何で唯はあんな男がいいのよおおお！ー！ー！ー！」

決して泣き上戸ではない美奈が、義妹の彼氏に対して大絶叫をした拳句、号泣している。

おいおい泣いて、愛する唯に抱きついたままの美奈は、忌まわしき男の声が聞こえるなりその涙が引っ込んでいた。

「美奈、どけ。唯に触るな。」

「先生、あれ？なんで？」

「迎えに来た。帰るぞ。」

『変態野郎、唯を渡すわけないだろーが！』

『はっ！悔しいだろうが、今日は連れて帰るからな。』

にやりと笑った唯の彼氏をイタリア語で罵った美奈は、あえなくスペイン語で返された。ギリギリと睨み合っている中、唯の身体に回っていた美奈の腕が外された。見ると兄、秀人がそこに立っていた。

「あれ、お兄ちゃん。」

「唯、酔っ払いの世話も大変だな。」

「んー、美味しいもの食べられたからいいや。あ、でも今最後のスイーツが…あ。来た来たー！」

「お前、まだ食うのか…。早く食べよ。…ほら、スプーン寄越せ。」

最後のスイーツであるトライフルを食べようとした唯からスプーンを取り上げた亨は、せっせと口に運び始めた。それを見た秀人と美奈の機嫌は損なわれ、確実にこの個室の空気が氷点下まで下がったのを感じていたのは、桜だけ。芋焼酎を飲みながら、こわー…と思っている、秀人からその酒を取り上げられた。

「ちよつとー！」

「帰るぞ、桜。お前、飲みすぎだ。」

「やだー！！まだ飲み足りない！ていうか、なんでここに唯ちゃんの彼氏さんだとか、あんたとかいるの？今日は女子会のはずなんだけど。」

「どうせこうなる事がわかってたからな。飲み潰れる前に迎えに来てやったんだぞ、有難く思え。」

「うつせー！！あたしはもっと飲みたいー！！グラス返せー！！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ兄とその彼女の動向を見守りつつ、相変わらず美奈の視線は、愛する義妹を盗んだ憎き男を睨んでいる。そんな義姉の視線に気付いているものの、亨が次から次へとトライフルを放り込むので、口を動かすことしか出来ない。亨は亨で、気にする風体もなくスプーンを彼女の口に運んでいる。

「むかつく…。」

「美奈、お前悠生と喧嘩したんだろ。あいつに連絡取ってやれよ。」

「なんであなたにそんな事言われなきゃいけないのよ…。ていうか、唯に触るなー！汚れるー！！」

「失礼だな。つーか、悠生外にいるけどな。行ってやれよ。な、唯。」

うんうんと頷く唯の頭を撫でて、美奈を見る。日本酒をぐいっと煽った美奈は、相変わらず座った目で亨を睨んだ。

「あたしが悪いの！？だって仕事なんだからしょうがないじゃない！ねえ、お兄ちゃん！！」

「は？僕？」

「お兄ちゃんだって、昔仕事だって称してキスシーンあったじゃない！！！」

「…美奈さん、それマジ？」

「マジよ、マジ。お兄ちゃんのレーベルのカタログに載ってたワンショットの…むぐうっ！！！」

「美奈、お前は喋るな！！いてっ！桜、殴るなよ！！！」

「聞いてないぞ！！このバカ秀人！！！」

随分と賑やかになった個室内。そろそろお店の迷惑になるのではないかと思いついた時、亨が唯を促して店を出た。外で待っていた悠生に中に入れと言って、唯と一緒にさっさとその場を後にした。

後日、亨が悠生から聞いた話では、愛しの義妹が消えた事に激昂した秀人と美奈が大暴れし、イタリア語で暴言が飛び交ったらしい。そして、各カップルのパートナーに連れられて帰った後、正座をして説教されたとの事だった。

【唯&亨】

「女子会って結局、みんなの彼氏の愚痴り場？」

「…違うと思うが、お前はもう行くなよ。悪い大人の見本だからな。」

「えー、美味しいご飯タダで食べれるのにー。」

「……………」

可愛く、むうーと口を尖らせた唯を見て、亨は遠い目をした。

【桜&秀人】

「それで？」

「だから仕事だって言っただろう。大体、唇に触れてないし。」

「今度美奈さんに聞くからいいや。」

「桜、悪いが店出禁になったらしいぞ…。」

「それはあんたと美奈さんのせいでしょうがっ！！こんのシスコン男！！」

「なんだとー！？」

そしていつもの如く、ケンカップルらしい怒号が飛び交った。

【美奈&悠生】

「仕事って言ってもさ、俺に一言あってもよかったよね。それに、美奈さんと秀人さんのせいで、店が出入り禁止になったんだよ。それわかってる？」

「…わかってるわよう…」

「いや、美奈さんは全っ然わかってない！あの店にいた俺と、秀人さんの彼女も出禁になったんだよ。あの店に顔出せるのって、神崎ちゃんと亨さんだけじゃん！！」

「あのロリコン男が唯を人目のある場所に連れて行くわけないじゃない！！それに、仕事だって言っても、あたしは何の感情も入ってなかったんだから、お咎め無しでしょー！！」

「…ふうん…反省無しか…。美奈さん、明日仕事は？」

「ゆ…悠くん？顔が怖いよ…？」

「休み？」

「や…休みだけど…。何か薄ら寒い気がするのよは気のせいよね？」

「反省の言葉が聞けるまで、お仕置き。明日が休みで良かったね。」

にっこりと笑った悠生の目がメタルフレームの中で、全く笑っていなかった事に身震いした美奈だった。

女子会（後書き）

美奈の彼氏は早乙女先生でした。

本編でまだ知り合ってもいないのに、二人が何故付き合っことになったのかはもう少し待って下さいね。

S t a g p a r t y (前 書 き)

パーティーっぽくないですけど。

Stag party

「スタッグパーティー？」

「そ。この前、美奈が発案して女子会なるものやったろう？だったら、今度は僕達が男子会ならぬ、スタッグパーティーをやるうかと思つて。」

「Bachelor partyみたいなものですか？」

「バチエラーパーティーは独身お別れだろ。ま、スタッグパーティーも似たようなもんだけど、意味的には違うからな。それに、好き好んでストリップパーなんか呼ばないし。ま、言つなれば単なる普通の飲み会だよ。」

「だったら、普通に飲み会と言えよと思つた亨だったが、一応は言わないでおいた。腐つても大学時代に世話になつた先輩であると同時に、自分の可愛い彼女の兄だ。義理と言えど、敵は身近に作るものではないと理解しているからこそ何も言わない。」

「隣にいた悠生に声をかけてやると、少しびびっていたものの、了解の返事を貰い店と時間を聞いて電話を切つた。」

「秀人さん、何て言つてたんですか？」

「スタッグパーティーって名前は付けたが、結局は単なる飲みだ。この前桐生さんと美奈が暴れた店は出禁になつたから、今度は違う店らしいぞ。」

「……………」

「あの後、大変だったんだろ？お疲れさん。」

涼しい顔で授業の資料を捲っている亨を軽く恨めしげに睨んだ悠生は、先日的一件を思い出した。

美奈と喧嘩をしたものの、結局は彼女に会いたくて女子会が行われるという店の前まで来たのだが、どうしても店に入る一步が踏み出せなくて躊躇していると、後から到着した亨と秀人が自分をからかった直後に店に入るのを見ていた。少しして亨と唯が出てきたのだが、亨から自分たちは帰るからと言って、自分の彼女が飲み食いした分の金を余分に払い、さっさと唯を連れて帰った。帰り際に唯が可愛くバイバイとしてくれたのにほわっとしつつ（隣の亨は物凄い目で睨んでいたが）、覚悟を決めて二の足を踏んでいた店の中に入ると、そこはすでに居酒屋の個室ではなくなっていた。

完全なる魔界…。

今でも思い出したくない。

可愛い可愛い義妹がいないと叫ぶ秀人に、あの野郎…と酔った勢いそのままに切れた美奈。二人とも兄妹仲良くイタリア語で亨を罵倒し尽くし、挙句の果てには唯、唯と泣きだす始末。いい加減にしろと言っては見るものの、その勢いは留まるところを知らず、しようがなく秀人の彼女に助けを求めると、彼女は彼女で全く役に立たなかった。いつの間に関頼んだのか、一升瓶を抱え（ボトルキープにしたが、結局は出禁になったので廃棄だろう）ゲラゲラと桐生兄妹の怒声と笑い飛ばしている桜。

よくあの店を叩き出されなかつたと思う。まあ、出禁という沙汰が下ってしまったが、とりあえずは美奈と仲直り出来たので良しとする。

「今度は大丈夫ですよね。」

「平気だろ。」

悠生は一抹の不安を拭いされないまま、亨の元を後にした。

日が暮れて予約しているという店に着いた亨と悠生は、既に一杯引っ掛けている秀人と合流。早速二人はビールを頼み、本日のスタッグパーティーと言う名の飲み会は始まった。

と言っても、秀人と悠生の位置関係は正直微妙なところである。悠生が美奈と付き合った理由を唯の口から聞いた秀人が大激怒。悠生を一発殴った後、その光景を見た美奈の手により兄である秀人はマットの上ならぬフローリングの上に沈められた。

それ以降少し苦手意識を持っているのか、悠生は秀人に近づこうとしない。くだらないと思いつつも、結局は二人の知り合いだという事で間に入らざるを得ない亨は、このスタッグパーティーもどきで関係改善の足がかりとなればいいだがとひっそりと思っている。

日本人ならではの『とりあえずビール』が来たところで、一応乾杯となったのだが、やはり会話の内容は先日の事だった。

「この前は悪かったな。」

「本当ですよ……。俺を含め、店に残った全員が出禁になりましたから。亨さんと神崎ちゃんは上手く逃げましたよね。」

「そりゃあな。あいつは一応未成年なわけだし。」

各自つまみを摘みながらぐいぐいと飲み進めて行く。ちなみに、この中で一番酒が強いのは秀人だが、亨もそんなに弱いわけではない。悠生が普通だと考えると、やはり二人は強い。

早くもビールを飲み干し、次のビールを頼んだ悠生のピッチを目で確認しながら、二人も新しい一杯を頼んだ。

「亨、お前、僕と美奈が『じゃあね』って送り出すまで唯を帰すなよ。」

「嫌ですよ。面倒くさい。大体、それやったら桐生さん、唯にキスするでしょう。」

「え。」

「マジだぞ、悠生。ここの家族全員そうだからな。唇じゃないのが唯一の救いだかな。」

「愛情表現じゃないか！！僕の可愛い唯に「僕のじゃないです。俺のです」……っ！何で、唯はこんな奴と……。」

くう！といった苦悶の表情を浮かべた秀人を呆然とした目で見てみると、その隙を見た亨がすかさず日本酒を頼んだので、悠生もチューハイを頼んだ。

「今更何を言いだすかと思えば…可愛い唯にお願いされたんでしょう？」お兄ちゃん、反対しちゃうや』って。」

「くっ…！だって、あんな可愛い顔で、しかもおまけに涙目まで浮かべて訴えられたら許さないわけにいかないだろう！？」

「…やりますね、神崎ちゃん…。」

「あいつ、のほほんとしているように見えて、桐生さんを手玉に取る方法を知ってるからな。」

詳しく桐生家の内情を知らない悠生は、一体唯はどんな教育方法で育てられたのかと不思議に思ったが、亨がその言葉を引き継いだ。

「ハグ、キスは当たり前、美奈は泊まって行ったら同じベッド、オヤジに桐生さんは、あいつに自分の食べないデザートを口に運んでやるのも当たり前。すげえぞ。」

「……うわー…なんか引くんですけど…。」

完全にドン引きした悠生を鼻で笑いながら、亨はくいつと日本酒を

ひっかける。

チラリと秀人を見ると、綺麗な顔が歪んでいた。それでもその持ち前の美貌が損なわれないのは凄いなと思う。

「なんだとお！！悠生、お前美奈と付き合ってるからっていい気になるなよ！」

「なつてませんって！！だいたい、秀人さん、俺と美奈さんが付き合うの了承してくれたんじゃないんですか？」

「美奈が怖いんだろ。」

しれつと亨に本音を暴露された秀人は、一気に焼酎を飲み干し次の一杯を頼んだ。

美奈が怖い。それは語弊ではあるものの、あながち間違いではない。大事な実妹である美奈は勇ましいと言うか何と言うか…。

高校に上がる前に来日した時、たまたまTVで見たホイス・グレイシーの試合を美奈の何の琴線に触れたのかはわからないが、すぐさま父に頼みこんで高校に入学するなりグレイシー柔術を習いに道場の門を叩いた。それこそモデルの仕事も始めたばかりだと言うのに、みるみるうちに腕前を上げて行き、自分がイタリアに三年間修行をしに行っている間に並み居る男共を押しつけて、道場一強くなっていた。

今でも忘れない。イタリアから帰ってきたばかりで美奈の力なんか…と高を括って甘く見ていた瞬間、落とされた悪夢を。そして、何をヒートアップしたのか父まで巻きこまれ、最期には祥子さんが助

けてくれた事を。お陰でストッパーの役割をしてくれた祥子さんを、神を仰ぐようになった。

そんな美奈は、最近ではモデルの仕事もあるのでナリを潜めてはいるが、先日自分が悠生を殴った際、腕ひしぎ十字固めで本気で腕を折られるかと思った。兄である自分の腕を本気で折ろうとする辺り、悠生に対しては相当な思いがあるのだろうと思った秀人は、渋々ではあるが交際を認めていたのである。

「お前…、美奈と喧嘩してたんじゃないのか。」

「あ…、その節はお騒がせしました。もう大丈夫です。」

にっこりと笑ったメガネの奥の目を盗み見た亨は、先日の唯の言葉を思い出していた。

「なんかね、お姉ちゃんは早乙女先生にイジメられてるって言うってた。」

「イジメ？」

「コトバゼメとー、コウソクとー、メカクシプレイ。あ、あとホウチプレイって。ねえ、先生どういう意味？私、さっぱり意味わからないんだけど、桜さんが真っ赤になってね。」

「忘れる。お前は何も聞いてない。何も美奈から聞いてない。わかったか？」

それこそ洗脳のように忘れろと唯に言いきかせた亨は、悠生の事を内心『ヘタレのくせに鬼畜なメガネ』といつしかそう呼んでいる。美奈も美奈だ。唯は純真であるべきだと思っっているはずなのに、何故そんな事を教えるんだと半ば八つ当たりのような感情で日本酒を煽った。

「悠生、お前美奈と変なプレイするなよ。美奈から唯に行くんだぞ。」

「それ、桜も言ってたな…。お前、真性のDSだろ。」

「…ご想像にお任せしますけど、俺、どちらかって言えば攻めっただけですけどね。秀人さんと亨さんはどうなんですか…って、亨さん、神崎ちゃんに手出したんですか？」

「……………ノーアンサーで。」

「……………亨、お前ヤツたのか…。」

さあねと言った亨をギリギリと睨んだ秀人は、さすがにこの前の二の舞になりたくないと思っただけで焦った悠生によって話題を摺りかえられた。つまりは桜の事である。

「美奈さんが言っていましたよ。『お兄ちゃんの初力ノだ』って。俺、嘘くせーって思ったんですけど、違うんですか？」

「どうなんですか、桐生さん。そう言えば、大学時代もどこで遊んでたんですか？俺も相当遊びましたけど、桐生さんと女被った事ないですよ。」

「…僕の事はほっとけ。」

そうやって口を濁した秀人だったが、それには理由がある。しかし、それはまた別の話である。

幾分腹も膨れ、じゃあ違う店に行こうかと言い出した秀人だったが、その次の店と言うのがビリヤード台のあるバーだった。

「ビリヤードですか。久しぶりだなー。」

「悠生、お前やった事あるのか？」

「大学の時にちよいちよい。よく遊んでたんですけど、そんなに上手くないですよ。亨さんは？」

「三台ほど家にあるからな。ガキの頃からやってる。」

そう言えば、遠藤邸にはビリヤード台の他にプールもあれば、小川も滝もあるらしい。なんてデカイ家なんだと言ってみれば、桐生さんの住んでいたイタリアの家はもっとだと言われて仰天する。

後で美奈から写真を見せて貰った時の衝撃と言ったら無い。如何にも海外の豪邸と言った趣だった。ブーゲンビアの咲き誇る庭と、白亜の壁に豪華な調度品。

リゾート地の別荘のようなその家は、秀人と美奈から言わせれば冷たい家だったらしいが、まあそれも二人の育った環境を鑑みればそ
うなのかもしれないと思った。

「じゃあ、ナインボールでいいよね。先行は？」

「バンキングで決めましょうか。」

「あ、最初は俺見学してます。少し酔った気もしてるんで、酔い覚
ました。」

「そう、じゃあ、亨。」

はいはいと返事をしてバンキングをすると、似たり寄ったりの距離
だったが亨の方が若干近いので、先行は亨からになった。カカんと
ボール同士が弾き合う音が辺りに響いた。

そのセットは辛うじて亨が勝ったが、悠生が次に入ると、またセッ
トの様相は一変する。悠生が思いのほか、上手い。

「お前…、上手すぎないか…。」

「えへ、すみません、実は学生の時に大会で優勝してて…。」

「そう言う事は最初っから言えよ！！腹立つー、亨、お前も本気出
せよー！」

「俺より翼の方が得意なんですけど…翼、呼びますか？」

「え。翼って…亨さんの双子のお兄さんですよ？うわー、俺見てみたい！！んでもって、二人並んでるところ写メ撮りたいです！！」

「止めとけ。翼は呼ぶな。」

「わかりました。」

結局ほとんどのセットが悠生の一人勝ち状態になり、諦めて一杯飲もうとカウンターに移動した時に見知らぬ女三人から声をかけられた。

三人とも美人だが、伊達に遊んで来た秀人と亨ではない。あっさり彼女達の本性を見抜き、無視したが、元来人がいい悠生がそれを断りきれずに、一杯だけならと誘いに乗ってしまったのである。

「おい…悠生、お前…。」

「す…すいません…。」

「ヘタレめ…。こんなところ美奈に見られたら、またお前達喧嘩だぞ。」

二人で悠生を責めるが、彼女達はそれがお気に召さなかったらしい。豊富な胸を腕に押し付けられて、正直面倒くさい以外の何者でもないのだが、女だと思つと乱暴な事も出来ずに、ただ厄介な事になつたなと思っただけだった。

「ねーねー、何内緒話してるのー？」

「あのー、今夜三人とも暇なんですか？」

「ていうか、桐生秀人以外のお二人ともすっごいかっこいいですよ
ねー。お二人とも俳優さんとかですか？」

さすがに秀人は営業用ののキラースマイルを振りまいて対応しているが、不機嫌極まりない亨はさっさと帰ろうかなと思いついた。
未成年の唯はともかく、あの顔の広い美奈經由で桜の耳に入る事もあり得る。まさに触らぬ神に祟り無しである。

「すみません、桐生さん、俺帰ります。」

「えー！？帰っちゃうのー！？」

「まだ全然話してないじゃないですか。まだ夜は長いですよ！」

「悪けど、俺彼女いるから。この二人もだぞ。」

金を払い、さっさと二人を残して店を出る。丁度、タクシーに乗り込む際、見知った女が店に入ったのを見て『危ねー…』と嘆息し、タクシーで家路に着いた。

二人を残してきたことに少しばかり良心が痛んだので、秀人の携帯に連絡を入れたものの、どうやら遅かったらしい。胸の内で合掌をして、やはりどうなったのか後日聞いてみなければと思っただけ

をついた。

二日後。

「あのねー、またお兄ちゃんとお姉ちゃん達喧嘩してるんだよー。」

「…へえ…」

「お姉ちゃんと桜さんはピリピリしてるし、お兄ちゃんは気まずそうな顔してるし…。先生何があったのか知ってる？」

「……………」

「早乙女先生に聞いても言葉濁してばかりなんだよー。ねー、先生、何も聞いてない？」

実は秀人と悠生から聞いている。

タクシーに乗り込む際に見た女：美奈が友達と店に入った際、カウンターではしゃぐ女達と、それに囲まれている兄と彼氏を発見。

美奈の凄まじいまでの眼力で睨みつけられた男二人は、美奈の隣にいた友人共々竦みあがったらしい。その後、カウンターに陣取った美奈によって、あの三人の女は一蹴。当の美奈とえば、女三人に囲まれた秀人と悠生を写メで撮り、桜に送信。無言のまま笑顔で帰って行ったらしい。

それ以降唯一被害を免れた亨は、桜に着信拒否された秀人の泣き言を聞かされ、更には悠生のヘタレっぷりに迷惑を被^{おっつけ}っている。

とんだスタッグパーティーだったと嘆息しつつ、唯の頭を撫で、その
旬な話題から彼女の考えを逸らした。

Stag party (後書き)

悠生は鬼畜メガネ属性。

亨は逃げ上手。父親の危険察知能力を受け継いだのでしょうか。

父の日と言ひ名の、争奪戦。(前書き)

YoYo様よりリクエストいただきました！ありがとうございます

ー！！

お題は『嫉妬する言』。

ではどうぞ。

父の日と言ひ名の、争奪戦。

いつもと変わらぬ、六月のサタデーナイト。

金曜日の放課後から唯は亨のマンションにお泊まりしている。

世はジューンプライドだと躍起になって結婚式を挙げる月である一方、その影でひっそりと祭り上げられている父の日。まったく、母の日とはえらい違いだ。

唯と亨はそんな内容のテレビを見るともなしに見、夕食後のお茶を飲みながらまつたりくつろいでいた。

「明日は父の日だねー。先生は蒼偉パパに何かあげるの？」

「あー……。この年になって父の日っていうのもな。昔はそれなりにネクタイとか贈ってたけど、今は普通に電話して終わると思う。お前は？何も無いってわけではないだろ？」

「私？私はいつも通りのやつでいいかなーって。」

「いつも通り？」

「うん。パパに一日中べったりくっついてるの。」

ビシツと凍った亨。思わず湯飲みを持つ手に力が入り、固いソレを握り壊す寸前で止まった。

しかしそれを尻目に、唯はいつものように至って呑気に調子っぱずれの鼻歌を歌っていた。

そして父の日当日。

唯は、宣言通り実家に帰るなり総一郎にべったりと張り付き、甲斐甲斐しくコーヒを淹れ、机の上を片付けたりとまるで若奥様のような振る舞いをしていた。しかも、秀人や美奈を外出させるという徹底振り。さすがの息子達も今日ばかりは仕方が無いと知っているので、何も文句は言わない。それが父の日のプレゼントだ。

今日ばかりは唯を独占出来るので、いたくご満悦な総一郎なのだが約一名邪魔な男がいる。

「おい、バンビ。何でお前がここにいる。」

「いえ、別に気にしないで下さい。俺はただ貴方が、唯に過剰なほど接触しようとするのを防ぐ役割ですから。」

「はつ。器のちっちえ奴だな、お前。唯、本当にこんなバンビでいいのか？なんだったらもつと良い奴紹介してやる「ふざけんな、オヤジ！」オヤジって何だ、オヤジって！！こない男掴まえて、オヤジだなんていい度胸だな、バンビ！」

「還暦間際の十分オヤジじゃねーか！…っ！おい、唯！そんなにオヤジにくつつくな！！」

見れば総一郎の腰にべったりと両腕を回して引っ付いている唯。それを見た亨は青筋をたて、総一郎は勝ち誇ったドヤ顔をした。

「喧嘩は良くない！二人ともなんでそんなにカリカリしてるのよー。カルシウムが足りないんじゃないの？あ、小魚炒ってきてあげようか！うん、それいいかもー！」

二人の喧嘩の原因を全く見当違いの答えを見つけ、小魚小魚ーと言いながら、それに釣られたナイトを引き連れてリビングを出て行った唯を見送った総一郎と亨は、むっつりと顔をつき合わせた。

初対面時、唯に手を出したら墮とすとまで言われたものなのだが、結局唯の大絶叫でそれは叶わなかった。その影響か、暫くは義父にも彼氏にもどちらにも寄り付かなくなり、更には翼に雅、はたまた蒼偉にまで唯の大絶叫した経緯を知られ、三人に呼び出されて滔々（とうとう）と説教をされた。特に雅は興奮のしすぎで手が付けられなかった。

そして総一郎も秀人、美奈の両名に厳しく説教された。もちろん例外なく亨も含まれているのだが。

「随分と狭量だな、バンビ。」

「自分の女が父親とは言え、他の男にくっ付いているのを許容するだけの度量がないもんで。」

「はっ！」

「鼻で笑わないでくれませんか？本気で腹立ちます。」

「てめえのその似非敬語の方が腹立つんだよ。この俺に、その表面だけの偽善面が通用すると思うなよ。」

「へー…、じゃあ早速。オヤジの分際で、俺と唯が過ごす休日を潰してんじゃねえよ。」

「あ？今日は父の日だ。父の日の特権だつていうのがわかんねえんだったら、さっさと帰って一人寝しやがれ。バンビが！」

ギリギリと睨み合う事数分。キッチンから香ばしい匂いがしてきたのに気付いているのだが、二人とも小魚なんて食っている場合ではない。むしろ、小魚如きではこのイライラは収まらない。

「バンビ、バンビ、いちいちうるせえオヤジだな！」

「てめーはバンビで十分だ！唯を大人しくやると思ったら大間違いだからな！」

「十分今でもうるせえだろうが！！」

いい加減止めなければ。そう思っていると、タイミングよく唯が香ばしい匂いを漂わせた小魚を持って、その修羅場と化していたリビングに戻って来た。なにやら部屋は妙な雰囲気がしているのだが、それは完全にスルーする。

さっきからキッチンにまで怒号が聞こえて来ていたのだが、それを困ったなーと思いながらも仲裁する事は無かった。むしろ喧嘩するほど仲がいいと言うし、自分達は気付いていないだろうが、ああや

って喧嘩しているのは傍から見ればじゃれているようにしか見えな
い。

「もー、喧嘩しないのー。はい、小魚炒って来たよ。美味しいよ。」

「……………」

「要らないの？味付けちゃったからナイトに食べさせられないんだ
けど。私一人で食べるには量が多いし。」

「…バンビ、一時休戦だ。」

「ああ、賛成だ。」

一時休戦の宣言がされたのも束の間、またしても亨の火山が噴火寸
前に。

「はい、パパ。あーん。美味しい？」

「ああ、美味しい。本当に唯は料理が上手だな。千歳とは大違いだ。
あいつは食えるもの作ったためしなかった。」

「本当？よかったー。お父さんって味オンチだったんでしょ？お母
さんが昔言ってたよ。」

「ああ。あいつに味付けを任せるとんでもないものになったんだ。
塩と砂糖を間違えるなんて可愛いものじゃなかった。和菓子屋の息

子なのに、味オンチってありえないだろ。」

「そうだったんだー！ってあれ？先生どうかした？小魚美味しくない？」

「……………」

「えー、先生小魚嫌いだったっけ？あ、味が口に合わない？」

「おい、バンビ。折角唯が作ったんだ。食べ。」

「『食べ』じゃねーよ！！なんで唯を膝に乗せて食わせて貰ってたー！！」

きよとんとした唯を膝に乗せた総一郎。その光景はまさに新婚夫婦のよう。いや、若い恋人にでもするような熱々っぷり。さすがにそれには亨の堪忍袋も緒が切れかかった。

「おい、唯！こっち来い！！」

「えー？なんで怒ってるの、先生。小魚食べて食べて！」

「唯、気にすんな。ほら、おかわりくれ。」

「ん？はい、パパ、あーん。」

ブチッと何かが切れた音がしたのは聞き間違いではないだろう。そ

の証拠に、亨の目が完全に据わっている。

ひっ！と脅えた唯が抱き付いた先は、やはり総一郎。それを見た亨は、酷薄に笑った。これは完全に怒っている。またしても火に油を注ぐ結果になってしまったのだと気付いたのだが、如何せん遅かった。

「おい、オヤジ…俺がいるのをわかっててワザとやってるだろ…」

「当たり前じゃねーか。はっ！悔しいんだったら、俺の位置まで来てみるよ。」

「あゝあゝ！？だれがためーの位置まで行きてえなんぞ思うか！！父親ポジションだなんて絶対にごめんだ！！」

「あ！？恋愛出来るのはバンビだけじゃねえぞ！」

「唯がためーに恋愛感情なんて持つてるわけないだろうが！！唯が惚れてるのはこの俺なんだよ！！」

「てめえで言つてりゃ世話ねえんだよ、このクソガキが！！」

またしても喧嘩してしまった二人を見ながら、炒った小魚を黙々と食べている唯はあくまでも中立を貫く。どちらに味方しても後がややこしくなるからだ。何度か経験済みなので、それは了承している。

折角の父の日なのに怒声が聞こえるなんて嫌だなーと思いながら、大量に炒ったはずの小魚があと少ししか無いのに気付いてため息を付いた。これではカルシウムを摂取したのは自分だけになってしま

う。栄養の偏らない夕飯のメニューを考えながら、二人が殴り合いの喧嘩にならないように見守る唯であった。

父の日と言つ名の、争奪戦。(後書き)

いかがでしたでしょうか。ちゃんと先生はジエラってましたか？
笑)

喧嘩するほど仲がいい、総一郎と亨。それを見守る唯でした。
、
(

父の日その後（前書き）

前話、父の日でのその後。

総一郎と大喧嘩した挙句、怒り心頭のまま亨は帰ってきました。それから話は始まります。

後半、少しイチャイチャ。

父の日その後

その日、亨はすこぶる機嫌が悪かった。

何故なら、愛しい彼女が魅力的というので鳴らしている義父の元に行くと言言していたからだ。しかし、さすがにそこには機嫌が悪くなる要素が含まれていない。そのはずだった。

彼女である唯の一言を聞くまでは。

「パパに一日中べったりくっ付いてるの。」

その言葉を聞かぬやいなや激震と共に、頭に血が昇るのがわかった。

落ち着け。落ち着け、俺。所詮義父じゃねーか。幸いにも、唯は美形に鈍感に育ったし、あれだけ魅力的な家族に囲まれていてもびくともしない。好きなタイプは中山さんに君とまですぐさま言いきったこいつのことだ、滅多な事があるわけがない。しかし…しかし心情としては複雑極まりない。

何故なら、義父である桐生総一郎は男でもくらりとするほどのいい男。老若男女、人種を問わずその圧倒的な魅力にひれ伏せとばかりの帝王つぷりを発揮する桐生総一郎、自分のような三十路前の男が敵う相手でもないのは重々承知だ。

それでも、彼にとつての大事な義理の娘である唯は自分を選んだ。それに自分も、苦勞してようやく手に入れた唯を簡単に手放すつもりは毛頭無い。密かに闘志を燃やしながら、父の日である次の日にこいつを送って行き、そのまま様子を見ていようと決意した。

その断固たる決意も、愛しい彼女が桐生総一郎にべったりとくっつき、あまつさえその状況を血反吐を吐く気持ちで注視していたのに、唯を膝に乗せて小魚を食べさせて貰っているのを見て電気ケトル並に怒りのボルテージが沸騰した。

オヤジと大喧嘩になり、怒りのままにそのままマンションまで帰った。暫くその怒りが収まらなかったが、さすがに少し頭を冷やそうと思って冷たいシャワーを浴びた。六月とは言え、既に暑い。昼前に帰って来たので、さすがに腹も減っている。何か作ろうかなと思つたものの、面倒だなと安直な考えにあっさり飛び付き、そのままシャワーブースを後にした。

ポタポタと滴る水をタオルで拭いていると、ふと目に付いたのは唯が使っている櫛やらなにやら。それを見ながら、はーっと深いため息を付いた。

さすがにさっきの態度は大人げなかったと自覚しているし、反省もしている。

だがしかし。いくら義父と言えども、男は男。嫉妬しない方がおかしい。それを知ってか知らずか（十中八九後者だ）唯も全く見当違いの事を口走り、更に自分の怒りを増幅させた。無自覚なのは知っているし、天然だというのもわかっている。だが、少し位は自分が出している事で彼氏を嫉妬させているのをわかって欲しいと思うのは欲張りなのだろうか。そうは思わないが…。

年の差もここまで行くと、いつそ腹立たしい。とは言え、実際の年齢差は変えられないし、あいつが離れて行く事は許さない。こんなにも唯に執着している自分に驚く一方、それでもいいかと思う自分がある。

そんなのも案外、悪くない。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、ペットボトルのそれを一気に半分まで飲み干した。さて、何をしようか。そろそろ期末テストの事も考えなければいけないが、さすがに今日は仕事をする気にはなれない。リビングへ行き、とりあえずテレビを点けようとしたところでインターフォンが鳴った。

このマンションのセキュリティは完璧で、滅多な人は中に入ってこれない仕様になっている。特に最上階であるペントハウスのこの一室は最も厳しいものが設置されてある。そのセキュリティシステムも付いているエレベーターに乗ってきてここまで来たと言う事は誰か知っている人物だろう。そう考えてカメラも見ずに、そのままドアを開けた。

「先生、お昼食べよ！持ってきたの！！」

「お前…ここで何してんだ…」

「だって先生帰っちゃうんだもん。折角お昼はパパの手料理だったのに…だから持ってきたの。まだご飯食べてない？」

「ああ…だけどお前、」

「良かったー！あのね、パパが作ったの。イタリアンなんだけどね、パパが作るイタリアン美味しいんだよ。パパは滅多に作らないから先生ラッキーだね！あ、パスタは流石にこっちで茹でなさいって言われたからパスタソースを持ってきた！ペペロンチーノなんだけど、先生ニンニク大丈夫だったよね。無臭ニンニクだから大丈夫だと思うけど。」

すたすたと亨の脇をすり抜けてキッチンへと向かう唯を追いかけて、その後を追う。

何故唯がここにいるのだろう。確かに今日は父の日なのだから、どうせなら実家に泊まってる一言言っておいたはずなのに。

そんな亨の気持ちを知ってから知らずか、唯と言えば持つてきた料理を次々とテーブルの上に並べて行く。まだ湯気が立ちのぼっているのを見ると、ほとんど出来たとも言っていていいものばかりだ。鍋にお湯をたっぷり酌んで火にかける。その様子をずっと突っ立って見ていた亨は、気になっていた事を訪ねた。

「お前、オヤジの相手は？」

「んー？だつて先生急に帰っちゃうんだもん。何かあったのかと思つて心配したんだからね。携帯にかけても通じないし……。」

「いや、それは悪かった。つて、違うくて。父の日だからべつたり一日中張り付いてるんじゃないかなかったのか？」

「……………」

お湯が沸騰したようで、パスタを二人分ザツと入れる。質問に答える気があるのかなのか、むっつりと黙り込み、一向にこつちを見ない唯に痺れを切らした亨はキッチンに置いてあった飲みかけのミネラルウォーターを取ってリビングへと向かった。

何かあったのだろうか。と言つても、しっかりと昼食を作つて持たせて来たのを見れば、あのオヤジに何かがあったのかというのは考え難い。とは言え、むっつりと何も話さない唯が何も言わない限り

はどうしようもないし、誰かに聞く事も出来ない。仕方なく電源を落としてあった携帯を復活させてメールの問い合わせを見ると、唯からのメールが三通届いており、どれも心配しているような内容だった。

何も言わずに怒りに任せて、いきなり帰って来たのはさすがにマズかったか。さて、どうしたものかと考えていると、一件の新着メールが入った。差出人は『帝王』：オヤジか。

『お前がいきなり帰ったから唯がテンション下がったじゃねーか。責任とれ、このバンビ。仕方ねーから今日はお前に唯譲ってやるよ。感謝しな』

読んで一瞬固まり、次の瞬間ぶはっと吹いた。やってくれる、あのオヤジ。

こっちの気持ちも、あいつの気持ちも酌むなんて芸当さすがは年の功だ。俺だったら、記念日を譲るなんて事は出来ない。いやはや、やっぱりあの人にはまだまだ到底敵わない。

「唯。」

呼ぶとキッチンの中から窺うようにして、リビングを見ている目とかち合う。黒目がちの大きい瞳と、その瞳に相応しい童顔な顔。今はその顔が茹でたパスタのせいで暑いのか、若干赤い。しかも心無しか表情も曇っている。

ああ、ヤバイ。そんな表情すら、愛おしいと思う。

手招きしてこちらに呼ぶと、パタパタとルームシューズを鳴らせてこちらに歩いてくる。ソファアに座っている俺の目の前に立つ唯の手を自分の方へグイッと引っ張ると、「わっ」と言う声と共に飛び込んでくる柔らかい感触。ぎゅっと抱き締めてやると、しがみ付くようにして抱き付いてくるのが堪らなく可愛い。

「いきなり帰って悪かったな。」

「…うん。」

「心配した？」

「うん。」

「ごめんな。」

「……………うん。」

一瞬間が空いたのを考えると多分まだ機嫌は直ってないのかもしれないが、それでも腕の力を緩めようとしなるところを見るとそんなに怒り心頭だということでもないだろう。ま、その機嫌の悪さもそう持続しないのも経験上わかっているが。少し腕を緩めてやると、唯が顔を上げてこっちを見ている。うるうるとした涙目で俺を見ている。

…誘っなよ…。

無自覚だから怖い、こいつは。

一応パスタが茹で上がったところだろうから、それを食ったらその誘いに乗る事にして。軽くちゅうつとキスして、それからキッチンへと移動した。

合えるだけのパスタソースでペロンチーノを手早く作って、テーブルの上に並べると立派なランチが出来上がった。味も美味い。あのオヤジはデザイナーだけでなく、シェフでも食っていけるのではないだろうか。それくらい美味しい。

食事中唯から聞いた話だと、滅多な事で作らないが記念日とかになれば作る。のだそうだ。それを聞いて、今日は少し悪い事をしたのかもかもしれないと思ったが、夏休みの予定を聞いてその神妙な気持ちは微塵も無くなった。

「エーゲ海でクルージングするんだって。パパね、あつちに島持つてて、夏休みはそこで二週間過ごすみたい。お兄ちゃんとお姉ちゃんも一緒なんだって。あ、そこ無人島だから船じゃないと行けないの。」

あんの、クソオヤジ…やけに大人しく引き下がったと思ったら、こ
う来たか…っ！！

そして夏休みまでの期間、必死に総一郎への説得と秀人への懐柔工作、悠生を巻きこんでの美奈への取り崩しを亨は頑張るハメになる。

父の日その後（後書き）

カリブ海にしようかと悩んだんですけど……。エーゲ海ってヨーロッパだからいろいろありそうぞ。

朝から身体がだるいと思って早々に仕事を切り上げて帰って来たものの、見事に発熱している。しかも38 という結構な熱。お陰で関節が痛いし、目の前もふらふらと覚束ない。インフルエンザの類ではないと思うものの、とりあえず安静にしていなければいけないと思ったので早々にベッドに入った。

幸いにして水などの摂取品目は買いおきしておいたもので間に合うし、もしも何か足りない物があったら下のコンシエルジュか、実家に電話して渡瀬に頼めばいいと思い、そのまま目を閉じた。

それから暫くすると、ピンポンとインターホンが鳴る音が聞こえた。

ここまで入って来るのは限られている。もしかしたら翼も熱を出したのかもしれない。それで母辺りが訪ねて来たのだろうか。あいつも自分と同じタイミングでよく熱を出していた。それも大人になるにつれて自然となくなっていたが、それでもどこかで繋がっているのだとわかるのはさすがだなと思うほかない。

重い身体を無理矢理起こすと、全身汗だくで着替えてシーツも取り替えないければいけないと思ったのだが、正直しんどくてそれどころではない。本格的に渡瀬を呼んだ方がいいのかもしれない。

それでもなんとか玄関まで辿り付き、ドアを開けると、小さな人影が心配そうに自分を見上げていた視線とかち合った。

「先生、大丈夫？わ、すっごい汗、着替えないと…」

「何でお前…」

「早乙女先生から聞いたの。先生が熱あるみたいだから早く帰ったつて。あのね、すぐ帰るつて約束するから、少しだけいてもいい？」

「…すぐ帰るんだな…？」

「うん。約束する。」

そう言うなり亨を寝室まで連れ戻った唯は、手際よくシーツを替えて着替えを出してくれたりしたので、気兼ねなくそれに甘える事にした。洗濯をするために濡れた物を持って行ったがうちには乾燥機もあるので、帰るまでには乾くだろう。

さらりとした感触に一新したベッドと着替えて幾分気持ち悪さからは解放されたものの、熱を計ってみるとまだ熱は引いていないようだ。心配そうに体温計を見ていた唯が慌てたように水で塗らしたタオルを亨の額にあてた。

「まだ熱が引いてないみたいだから、寝てたほうがいいよ。私、先生が起きた時に食べられるように消化のいい物作ってるね。何かあったら呼んでくれればいいから。」

「ん。」

水で冷えた指がひやりとした感触を持って頬に触れているのが気持ち

ちいい。そのまま目を閉じると、あつさりと眠りの中へと引きこまれた。

次に目を覚ましたのは辺りが暗くなった頃だった。時計を見るとすでに夜になっていて、なるほど、それで暗いのかと思ひ部屋の明かりを絞つて点けた。

薄暗い枕元には既にぬるくなったタオルが落ちていて、それに熱を奪われた自分の体温はというと、それなりに下がったように感じる。念のため体温計で計ると37.3度。微熱にまで下がったようだ。

幸い明日から連休で、急ぎの仕事もない。連休中にゆっくり休めば、休み明けに無事に学校に行けるだろう。

とりあえずベタつく身体をなんとかしたい。シャワーでも浴びて汗を流そうかと思つて、ふと動きを止めた。そういえば唯が来ていた事を今更ながらに思い出したのだ。

しかし既に時間は夜、さつきもすぐ帰ると言っていたし、もう帰つただろうと思つて寢室のドアを開けてリビングに入ると、ソファ―に横になって眠っている唯が目に入つて来た。

帰つていなかったのかと呆れたが、それでも嬉しいと思つのはきつと心身ともに弱っているからなのだろう。キッチンを見ると鍋に入っている野菜スープらしき物も見受けられる。美味そうだが、一先ずこの汗を洗い落としてから食いたくて、寝ている唯を起こさないように静かにバスルームへと移動した。

さて、あいつをどうすればいいだろう。

未だ熱の引かない身体では運転もままならないし、かと言って一人で帰らせるという選択肢もない。となると、桐生家の誰かに迎えに来てもらえばいいのかと思つたのだが、彼等全員が今こちらにいないと言つたのを昨日唯から聞いていたのを思い出した。

「どうすっかな…」

正直言えば泊めてあげたい。しかし、この部屋に泊まる事で自分の風邪もどきをうつすのは可哀想だし、いくら空気清浄機をかけているとは言えそれも万能ではない。うつる可能性は無きにしても非ずなわけだ。

まあ、タクシーでも呼んでやればいいかと思ってシャワーを浴び終えリビングに戻ると、唯はまだ眠ったままだった。

気持ちよく寝ているのに起こすのは可哀想だが、起きて貰わなければ困る。華奢な肩を揺すつてやると、むにゃむにゃと寝言を言いながら目を開けた。

「ん……………あれ…?」

「あれ?じゃない。もう夜の十時過ぎてるぞ。」

「え!?!?本当!?!?」

唯がすぐさま携帯を確認すると、亨の言ったとおりの時間だ。開け放たれたカーテンの向こうは、夜景がキラキラと煌いている。…綺麗だ。

「タクシー呼ぶから帰れよ。風邪じゃないみたいだけどうつすのは嫌だからな。」

「……うん…」

「そんな目しても無駄だからな。」

上目遣いで自分を見上げてくる唯を、牽制の意味も込めてそう付き放す。どうも桐生家の三人から甘やかされて、愛情たっぷり育てられたこいつはおねだりが上手い。と言うか、上目遣いをするタイミング、角度、涙目具合。それらが複合的になった唯のおねだりに勝てた事がない。

だからこそ厳しい態度で接しなければ。万が一うつつたりしたら、気の毒すぎる。

未だにソファーから自分の背中に注がれている視線を感じながらキツチンに移動し、作ってあったスープを温めようとすると、背中にどんと衝撃が走った。

原因は見なくてもわかる。

「…いちゃ、駄目？」

「駄目。帰れ。」

「…どうしても…？」

「どっついても。うつつたら嫌だろ？」

「…いいもん…」

きゆううつと抱き締めている手に力が入って腰が締まる。まあ微々たる力だが、いつまでもこうしているわけにも行かない。腕で解いて振り向くと、その破壊力満点な視線と目が合ってしまった。

「だめ？」

「……………かえ」

「とおる、だめ？」

卑怯すぎる。

こんな時に名前を呼ぶなんて反則技だ。誰が教えたんだ、こんな技。ぐっと言葉に詰まった亨は、自分が結局は泊めてしまっただろうな…と下がったはずの熱が再び上がるような錯覚を受けた。

三日後。

結局、休み全部を亨の部屋に入り浸って、亨の世話を焼き続けた唯が風邪で学校を休むはめになった。

「だから言ったのに」

「……………ごめんな……………さい……………」

「大人しく寝てろ」

亨は思った。

連戦連敗の唯のおねだり攻撃にそろそろ勝てるようにならないと…と。

「とおゝる…おみずのみたい…」

無理か。

下らなくも譲れない主張（前書き）

くだらない話ですが…。

下らなくも譲れない主張

「ちがうもん！！先生のばかー！！わからずやー！！」

「つまらない事でぐちゃぐちゃ言うなよ。」

「つまらなくないし！」

ぎゃーぎゃーと喚き散らしている義妹カップル。

いつも仲がいい、と言うよりもらぶらぶらすぎてウザい位のバカップルが喧嘩をしている。一体全体どうしたものと義妹のマンションを訪れた兄と姉は眉を顰めた。

「ど、どうしたの？珍しく唯ちゃんが駄々こねてるけど…」

「神崎ちゃんが駄々こねるの珍しいの？」

兄カノ桜、姉カレ悠生も驚いているが、秀人と美奈はもつとびっくりしている。

元々遠慮がちな性格をしている唯がこんなにも自我を押し通すなんて言う事は、亨と付き合う時に揉めて以来だ。結局は自分達が唯の可愛いお強請りに負けて許してしまったのだが、あんなにも頑固な唯も珍しかった。父、総一郎曰く「あの頑固さは実父の千歳譲りらしい。」

そんな唯が一体どうしたのか。

リビングに入って様子を伺ってみると、床に座りこんでナイトに抱きついてしている唯と、それを呆れたようにソファーに座って見ている亨がいた。

「どうしたんだ、お前達。」

「唯、何かあった？バカ遠藤が何か言ったの？もし嫌な事あったらすぐに戻って来ていいのよ！」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん！うわーん！！」

うわーんと言いながらも、全然涙は出ていない唯が突っ込んで来たのを受け止めた秀人は、原因を作ったらしい亨を睨んだ。また、美奈も同様にその綺麗な顔で亨を睨み付けた。

美しすぎる美貌の兄弟がギリギリと睨み付ける中、その威力に引きつったままの桜と悠生を尻目に亨は悠然とテーブルの上を指差した。

そこにあつたのは、駄菓子。

一本十円の棒のあれ。

しかし、それは大人買いされたもので、一まとまりになったものがいくつもある。良く見ると、全部の袋の色が違っていて、全部の味がそこにあるのではないかと思われた。

「唯が自分はサラダ味しか認めないって言うから、味なら沢山あるだろって言うて、言い合いになったんです。それから融通の利かない唯が騒いでいたんですよ。」

「融通きくもん！私はチーズ味とかもあるけど、基本はサラダだよねって言っただけなの。ね、お兄ちゃん。お兄ちゃんもあれなら食べるでしょ。基本はサラダだよね！？」

……………。

くだらねえ事で喧嘩してるなと思った桜と悠生だったが、桐生兄妹は違うらしい。

苦悶の表情を浮かべているところを見ると、愛しい義妹の質問にどう答えるかかなり葛藤しているようだ。

二人とも彼等の好きな味は把握している。秀人はサラミ味が好きで、美奈はコーンポタージュ味が一番好きだ。ここは自分の好きな味を押し通すか、可愛い唯の要望どおりにサラダだと言うのか。非常にくだらない事ながらも、桜たちは固唾を飲んで見守った。

「ぼ…僕は…」

「あたし…」

答え難そうな二人を見て、亨がふうつと息を吐いた。

「ほらな。サラダが基本じゃないんだって。基本はチーズだろ。」

「サラダ！絶対サラダ！！もー、埒があかない！ね、桜さんは！？」

「あ、あたし！？あたしはチョコかなー。」

「チョコ！？そんな数年前から出てきた新人味なんか基本にすらならないよー！」

「…唯ちゃん、性格変わってない？」

違うもん、違うもんと言いながら桜の意見を真っ向から否定した唯は悠生にその矛先を向けた。

「早乙女先生は！？」

「俺！？俺はー……………納豆かなー。」

「……………納豆！？……………」

全員の声が揃った。

その驚愕の目を向けられている悠生は平然と納豆味の棒をもさもさ食べている。

「あれ、納豆味知らない？ちゃんと粘るんだよ。」

「納豆なんて信じられない！あれが基本なわけない！！ね、先生、ないよね！？」

「納豆はないだろー…。ほら、他の三人も同意見みたいだぞ。」

「悠生、特殊嗜好だな…。いいのか、美奈。」

「納豆…。ごめん悠君、あたし納豆駄目なの。あの粘りが嫌。」

「納豆…。微妙だね…。」

全員から納豆を否定された悠生は、酷く頂垂れた。

ちなみに。

「たこやき味。」

「…パパ…」

「あの固い感じがいい。」

結局、唯のサラダ味主張は総一郎のたこ焼き味発言で白紙に戻った。

下らなくも譲れない主張（後書き）

ちなみに私は唯の言う通り、サラダ味が一番好きです。食べやすいから！

逆に余り好きじゃないのはテリヤキとかとんかつソース。味濃すぎて…。

皆さんは何味が好きですか？

まったり七夕（前書き）

七夕企画。

あまり練れなかったために短め。しかも内容はまったくありません。

まったり七夕

「七夕って本来なら旧暦に見たものだから、昔は晴れてたんでしょ？」

「そう。太陰暦が普通だった時代は今で言う、八月ぐらいか。だから昔は梅雨が明けてからだから見れてたらしいぞ、天の川。」

そう、今年も七夕は雨なのだ。

と言っても、遠藤邸には関係ナツシング。何故なら、邸宅内にそれなりの大きさのプラネタリウムがあるから。

今年も七夕は雨か…と嘆く唯を見かねた亨は、いつもなら星座鑑賞が趣味な父と母のイチヤイチャカップルシートと化している家のプラネタリウムを貸してくれと申し出て、だったらついでに。と言うので、気分を盛り上げる小物として浴衣着用である。

あいにくプラネタリウム内はクーラーも常備されているので適温に保たれているのだが、そこはそこ。気分を盛り上げるための小道具…なのだ。

「星座って私あんまり詳しくないんだよね…知ってるのって夏の大型三角形くらいかな。」

「まあいろんな星座にしても、実際はそんな形に見えないしな。ほとんども無理矢理にしか見えない。」

「ねー。」

と星が大好きな蒼偉と雅に聞かれれば延々と話を聞かされそうな事を、あくまでものほほんと話している二人は七夕の話に話題を移す。

「織姫と彦星も一年に一度しか会えないなんて、神様もいけずだよね。」

「その分、溜まっていたイロイロがありそうだけどな。織姫も大変だな…。次の日には足腰立たないぞ、きつと。」

「イロイロ？」

「ま、イロイロだ。ほら、天の川だぞ。」

無理矢理会話の内容を逸らした亨は、膝に座っている唯を抱えなおす。

そう、二人は一つの座席にべったりくっついて座っているのである。とは言え、自宅のプラネタリウムなのでその分椅子…というか一人がけのソファ―も広くて大きい。なので二人掛けても大丈夫。

ちなみに、この椅子も遠藤グループで手がけた自信作。お値段据え置きになっています。

「ねー、この浴衣って…」

「ああ、母さんが作ったって言うてた。相変わらず暇な人だな…」

「そんな事言つと雅ちゃん怒つちゃうよ。でもでも、私のやつまで作ってくれなくてもいいのになあ。パパが作ったのあるんだよ」

「へえ、珍しいな。オヤジが浴衣と言うか和服なんて。」

「お母さんとお揃いな。あ、でもお姉ちゃんも…」

実は姉、美奈だけではなく家族全員がお揃いだったりする。特に全員が揃つて外出したりする機会はなかったものの、暑い日や祭りの日などは浴衣で過ごしていた唯は、今も浴衣であることに違和感を感じない。美奈にやつてもらったように、髪をアップにし、それが無意識に白いうなじを亨に見せ付けていることに気付かない。唯を見下ろしてため息を一つ。

「ん？どうかした？」

「…彦星の気持ちかわかる気がする。」

「なんで？」

「一年は長いよなー…」

はてなマークが頭に並ぶ唯を尻目に、星空を見上げた亨は腕にある感触を再びぎゅっと抱きしめた。

納涼会（前書き）

毎日暑いですが、今回はそんな話。

納涼会

巷では節電節電と言っているが、如何せん暑いものは暑いもので。ではその暑さから目を逸らしては？って言うので、飲み会のお知らせが唯から皆の携帯に向けて一斉送信された。そうして数分も経たないうちに全員から「OK」の返事が貰えた事で、唯はにっこりと微笑んだ。

今日は珍しく亨のマンションに全員集合している。

本来であれば唯のマンションで…と思ったのだが、生憎部屋のクーラーが故障してしまった。言いだしっぺの唯が困つてのを助けたのが、もちろん唯を溺愛中の亨である。幸いにして亨の住んでいる部屋はかなり広いため、六人はおろかその倍以上でもなんて事は無いのだが、それはそれ、これはこれ。そもそも人を部屋に招く性格ではないのを考えると、今回に限っては特別らしい。鶴の一声ならぬ、唯の一声はかなり強力なのである。

ともあれ、唯以外は亨のマンションを訪ねるのは初めてで、なまじ高級マンションのペン트ハウスである。明らかにビビっている一般人桜と悠生を引き連れて玄関までやってきた桐生兄妹。この二人は育ちが育ちなので、この程度の規模ではびくともしない。一通りきよろつとすると、面白そうに秀人が、次いで美奈がぶすくれた声で感想を述べた。

「さすが遠藤グループのお坊ちゃん。」

「いけすかない。」

などと勝手気ままに感想を述べてエレベーターに全員で乗り込んで目的地である最上階に着くと、一つしかない玄関が開いて可愛い妹が顔を出した。

「いらっしやーい！って言っても先生のおうちなんだけどね。」

「ああ、来たか。入ってください。外暑いでしょう。」

「部屋の中、設定気温26 だけど…節電？」

「…気持ち節電。」

などと言いながら部屋に入っていく唯と亨を追いかけて部屋に入った面々（主に桜と悠生）は驚愕に目を見開いた。

広い。

広すぎる。

なんだ、この部屋。

一応ここ玄関だよな。広すぎね？

一体何部屋あるんだ、この部屋。

うわ、眺めいいな、この部屋。

などと庶民の桜と悠生が内心思っていると、お互いのパートナーが訝しげな顔をしてこちらを見ていた。

「何してるの？」

「二人とも早く入れよ。冷気が逃げるだろ。」

きよとんとしている二人を尻目に、桜と悠生はこそこそと話す。

『「う…ここ、かなり広いですよね…」』

『…広いよね…一体家賃いくらなんだろう。怖くて聞けないわ…。あれ？ここって分譲だけで即売したっていうマンションだったわけ？』

『わかんないです…。ていうか、美奈さんも秀人さんもけるっと思ってますよ。』

『…もともと金持ちだからね、あそこの父親…』

『ああ、桐生総一郎…桜さん、昔美奈さん達がイタリアで住んだ家見た事あります？俺、マジでビビりましたもん。』

『見た見た！十何世紀かのイタリア貴族が作った別荘だか別宅だかを買取ったって言う、もんのすごい豪邸でしょ！？あんなところで過ごしてたんだよ、あたしだったら絶対無理！！』

『ですよー！』

などところこそ話しをしていると二人で仲良く話していたのが気に入らなかったのか、お互いのパートナーに引きずられるようにリビングへと運ばれた。

リビングもやはり広く、一般人の桜と悠生は終始ひきつり笑顔だ。そんな彼等に気付いた唯が苦笑交じりでその心に賛同する。

「確かに広すぎますよねー。こんな部屋に一人暮らしなんて贅沢だと思いませんか？」

「煩いな。お前も人の事言えないだろ。」

「む、むう…。」

そう、唯の住んでいるマンションも相当広いのだ。

勿論義父である桐生総一郎が手配した物件だったが、そこもワンフロアに二軒しかなく、そのうちの二軒が桐生家の…唯が一人暮らしで住んでいる部屋である。間取りは3LDK。もちろん、システムキッチンやらオール電化などが完備され、管理も一括管理で一階のフロントにはコンシェルジュまで常設されている。防犯システムは生体認識機能が採用されているため、万が一鍵が無くなった等の心配はない。

全て唯を愛してやまない総一郎の親心である。

「あんだ、唯に何かあったらどうするのよ!」

「そうだぞ。もしセキュリティが甘くて唯が変態なんかに襲われた

らどつするんだ！泥棒と鉢合わせするかもしれないぞ！！あ
あ、心配になってきた…ねえ、唯、実家に帰って来ない？」

「や。」

「唯…」

「や。」

ふいっとそっぽを向いてしまった妹に哀愁漂う視線を送りながら、
テーブルに置かれてあったビールを煽る。

くそ、冷えていて美味い。

しかも生ビール。泡が美味すぎる。

「業務用のビールサーバー貰ってきたんで、好きなだけどうぞ。」

さらっと凄い事を言った亨に未成年である唯以外の視線が集中した。
ちなみに唯は雰囲気だけでジンジャーエールを飲んでいる。

「うちの会社の作ってるビールですけど。」

「え！？遠藤グループって酒造部門あったっけ！？」

と桜が驚いて聞くと、妙に気難しそうな顔で亨が答えた。

「祖父が一年前に創設したんですよね。ほとんど道楽みたいなもので、お陰でしこたま飲まされましたよ。流石に翼も『もうビールはいい』って言うてましたし。」

「じゃあ、もしかしてビール以外も…?」

「フランスでブドウを仕込んでるって父親が言ってたような気がする。あー、でもウイスキーの樽もどうとかって…ま、市場に回る量までは造ってないだろうけど、それでも多分相当量はあると思う。」

「…さすが坊ちゃん…」「」

「やっぱりいけすかないわ!!」

そんな大人の絶句している姿を見ながら、唯はもっさもっさと食事をしている。ほとんど自分が作ったものなのだが、皆は酒ばかりで食べる気がないようだし、おつまみは皿に並べたチーズやピスタチオでいいだろう。

もくもくと食べている唯を尻目に、大人たちは何杯目かのビールを空けて、次はワインだチューハイだなんだと飲んでいる。一人未成年で飲めない唯はそんな大人達に飽きてきたので、一旦リビングを後にしおつまみを補充するためにキッチンへと向かった。その光景を見ていた桜が亨に声をかける。

「そつえばー、遠藤さんっていくつでしたっけ?」

「29。」

「29かあ。唯ちゃんと一回りも違うんですね。何話すんです？共通の話題とかってあるんですか？」

「俺も学校で他の子達と話してると、全然言葉通じないときとか普通にありますもんね。ジェネレーションギャップって凄いですよ、美奈さん。」

と悠生が美奈に向かって言うと、中高生世代にもファンがいる美奈も心得ているのか、うんうんと頷く。

「そうなのよね。今の子達って私が高校生してた頃とは全然違うしね。…でもさ、唯って全然今時の高校生ギャルじゃないし、ましてやなんとなくだけど、唯ってさ、…基本ズレてるでしょう。」

「……………否定は、しない。」

「好きなタイプは『中山さんに君』だからな。あの父さんを持つてしても、きんに君の方がかつこいいって言ってたから。」

「きんに君が筋肉留学するっていう時は絶叫してたわね。」

「…それってどうなんですか…まさか亨さんも神崎ちゃんの好みから外れてるんですか…？」

悠生の疑問からふう…と切ないため息を吐き視線を逸らした亨を、

さすがの美奈も不憫に感じてしまった。

きんに君が誰よりもタイプと真ん中と豪語してやまない神崎…いや桐生唯。

それはフェロモン帝王である義父桐生総一郎と、そのフェロモンを受け継いだ秀人・美奈を持ってしても覆ることはなく、ましてや女達からの秋波を送られまくってきた亨、翼の美貌をもろもしない屈強さ。なまじ鈍感だと周囲から思われているが、実際は美形音痴どころか結構好みがズレているのだ。

その美形音痴に助けられたことは一度や二度ではないが、それは自分が関わったところでない箇所で発揮して欲しいと切に願う亨だ。

別に唯自身の審美眼がおかしいわけではない。ちゃんと亨達の事は美形揃いだと思っっている。しかし、基本的にそうだった普通以上の顔形に興味がないのを見ると、やはり好みの問題である。本気できんに君にベタ惚れなのが微妙なところだと、そこにいた全員が口には出さないものの内心でははつきりと悟った。

「あれ、何の話してるの？」

おつまみと軽いデザートを持って戻って来た唯に、皆が可哀想な視線を投げかけるが、本人はきよんとした反応を示すだけだ。ため息を付いた亨が自分の隣の席に来いと手招きすると、えへーっと笑いながら喜んでその席に腰掛けた。

途中デザートを唯の口に運んでやる亨を見て大いに本人を睨みつけた秀人と美奈は、それぞれのパートナーに同じ事をされ（桜は嫌々しかも秀人が嫌いな甘い甘いマンゴー）、一人は満足そうに、一人はかえって機嫌が悪くなるという出来事があったものの、結局その

まま楽しい時間は過ぎた。

「あれ、もうこんな時間か。桜、そろそろ帰るか。」

「ああ、よかつたら泊まって行って下さい。ゲストルームは二部屋ありますし、一部屋にシャワー付いてるし、メインバスルームは各々自由に使ってもいいですから。ベッドもダブル以上なんじゃないはずですけど。」

「「ええ!?!」」

驚く桜と悠生を尻目に、秀人と美奈は「じゃあお言葉に甘えて」と言い、すっかり泊まる方向へと動いた。

ちなみに亨の寝室は二階にある。そう、この部屋はメインベッドルームが二階にあるメゾネットタイプなのだ。

「じゃあ、おやすみ。」

と言うと、亨は唯の手を引いて二階に上がって行くこととする。それを当然見咎めたのは美奈である。

「ちよつとお!!なんであんだと唯が一緒の部屋なの!!」

「…なんでって。」

「唯、お姉ちゃんと一緒に寝よう？こんな男と一緒にだなんて絶対駄目よー!!」

「え、美奈さん。俺は？」

「その男と寝れば？」

冷たい美奈の言葉にショックを受け頂垂れるへタレ悠生に対し、あくまでも亨はスルー。

「おい悠生、連れていけ。」

「ゆーいー!!おいでー!!」

「美奈さん、行こう。ね？」

「あたし唯と一緒にいい!!」

「み、美奈さん、ほら行くよー!!って、秀人さんどっちの部屋がいいですか？」

と秀人を見ると同じくギリギリと亨を睨んでいる。それを窺っているのは言うまでも無く桜である。

「あんだ、まさか唯ちゃんと一緒に寝るとか言い出さないわよね。」

「え、駄目？」

「駄目？じゃないわよ！！馬っ鹿じゃないの、このシスコン！！」

「なんだと！？妹と一緒に寝て何が悪いんだ！！」

悪いだろ。

思わず0.1秒で突っ込んだ悠生は、この凄惨な状況を鎮める唯一の手段である唯に助けを求めた。しかし当の本人はすでにかなりおねむのようで、目をしばしばさせて亨の腕にすがり付いている。既に限界点まで行っているようだ。

そんな唯を見た亨は、唯を抱き上げてさっさと二階にあるベッドへと運ぶ。

「先に寝てるか？」

「…うん…寝てる…」

「ちよつとおお！！バカ遠藤待ちやがれ！！」

「煩いな、唯が起きるだろ。」

「だったら、あんたが唯をあたと一緒に寝るベッドに運びなさいよ……」

キーンと怒る美奈だったが、唯の一言で涙に濡れた。

「わたし、とおるといつしょになる。」

そう言うなり、限界だったのか目を閉じてしまった唯。そんな彼女を運んでいる亨は、崩れ落ちた美奈を尻目にさっさと自分のベッドルームのドアを閉めた。

残されてさめざめと泣く美奈を宥めるようにして部屋に連れて行った悠生と、お互い喧嘩しながらも結局のところは仲がいい秀人と桜カップルは大人しく夜を明かした。

しかしながら彼等…特に男二人には女子には内緒で亨から厳しい通達が出されていた。それは…

「一応全部屋、防音になってます。」

「「へー…」」

「あと、シャワーも完備、もしくは近くにありませんので自由に使ってください。」

「「……へー…」」

「『万が一』そういうコトをするのなら。一応ここは俺の部屋だと言っ事を忘れないで下さい。」

「「……」」

「あ、あと。部屋のシーツを洗濯するのは唯ですから。ま、二人だ

納涼会（後書き）

基本全員が唯に甘いのに対し、基本唯は全員に厳しめ。わかっているからこそその対応です。

揚げ物三昧（前書き）

考えるだけでもたれます。

揚げ物三昧

長く楽しかった夏休みも、もう残すところラスト一週間。

そんな大事なラスト一週間で、唯はマンションではなく実家で過ごすと言言した。

それを聞いた桐生家の面々は、何が何でも貴重な一週間に出張を入れないように必死に各々の秘書やマネージャーを説得。いろいろと問題があつたものの、結果、なんと忙しい三人は全員揃つて一週間出張も撮影もなく、意気揚々と真つ直ぐ愛しい唯の待つ家に定時通りに帰れる事になったのである。

勿論、九月からはそのツケが一気に回ってくるのを覚悟した上だ。

「唯の作る朝ご飯も久しぶりよねえ。明日のご飯が楽しみだわ。」

「本当だよな。…ここ最近ずっと亨のマンションに通ってたから…」

「秀人、声が低くなってるぞ。」

そんな事を言いながら、久しぶりに味わうことになる唯の作った朝食へ期待に胸躍らせ、三人は柔らかな寝具に自らの身体を沈めた。

翌朝。

その異変に一早く気付いたのは総一郎だった。

「……この匂い……まさか……」

驚愕の表情を浮かべている父に遅れる事、数十分。次に異変に気付いたのは秀人だった。

「……これは……嘘だろ……」

二人に遅れる事、更に数十分。最後に気付いたのは、いつもは低血圧で目覚めが大変よろしくない美奈である。そんな美奈ですらバツチリ目を覚ました。

「……これって……冗談でしょ……」

各々ベッドから飛び起き、着る物・羽織る物を取りあえず程度に身につけると、キッチンへと駆け込んだ。

キラキラと眩しい朝日が燦々と降り注ぐ中、その光景に息を飲んだ三人は、朝日に負けず劣らず眩しいほどの唯の笑顔になすすべなく崩れ落ちた。

*

同日、早朝。

これまた眩しい朝日が燦々と降り注ぐ中、亨は優雅にブラックコーヒーを飲みながら朝刊を読んでいた。ちなみに、昨今ではエコだと言われてタブレット端末などで新聞を購読している友人が大勢を占めて来たものの、亨は紙派だ。

新聞が持つ独特の香りが、なんとも言えない朝特有の雰囲気醸し出して一人暮らしをし出してから二紙取っている。一紙は実家でも取っていたものを、もう一紙は英字新聞である。

いろいろ大小事件はあるものの、今日も日本は平和だな…とのんびり考えながら熱いコーヒーを飲み干し、空いたカップをキッチンへと持って行こうとした所で、自らの携帯が鳴っているのに気が付いた。

こんな朝早くから誰だと訝しげながら、その携帯の画面を見るとそこに表示されていたのは『桐生秀人』。

正直今は出たくない理由があつたのだが、先輩の手前それを無視するわけにも行かず渋々電話を取った。

その瞬間。

『おい、亨！！お前、唯を怒らせるような事しただろ！！！！』

開口一番怒鳴られた。

しかしまあ、朝っぱらからよくこんな声張れるな…と関心しながらも、その内容にため息を付いた。

それもそのはず。

実は唯と亨は現在、ケンカ中であつたりする。

原因は本当に些細なことだった。

と言つのも、唯の破滅的な鼻歌をからかいはしないが、それに近い事を亨が言つて唯が切れたのだ。

『鼻歌でも音程取れて無いぞ、お前。』

『お、音程つて……！いいじゃん、誰が聴いてるわけじゃないんだし！！それにリズムは間違つてないもん！！』

『リズムとかそう言う問題じゃないし。それに、誰が聴いて無くても俺が聴いてるだろ。お前のお陰で、頭の中からその歪いびつなメロディーが離れない。』

『い……いび……いびつ……っ！！酷いよ、先生っ！私、これでも多少は気にしてるのに……！』

『多少じゃなく、本格的に気にしろ。お前、音痴な』先生の、バカ
—————っ！！！！！！！！！！』

そう絶叫し、亨の顔面にクッションを命中させた唯は、猛スピードでマンションを出て行った。

ぶつけられたクッションをよけきれなかった事への屈辱感を少しだけ感じていると、一通のメールが届いた。

『実家に帰らせていただきます。先生のばーーーーーか!!!
(、 皿) 』

あつちの子供、こっちは大人であるはずなのだが、大人気なくメールの内容にカチンと来た亨も、唯に返事も送らずにそのままにしておいた。

喧嘩勃発。

とは言え、夏休みもあと一週間しかないし、これから自分の溜まった仕事もしていかなければならないと思っていた矢先だったので、逆に唯がない方が捗る。学校が始まった頃にもでもご機嫌伺いでもしてみればいい。

そう思つて、仲直りの『な』の字も無いまま一日が過ぎていたのだが、早速唯に関してはストーリーカー並の桐生家長男からの直電にため息を付いた。

こうして桐生家全員を敵に回しては、謝るにも謝れない可能性の方が高い。むしろ美奈などは積極的に追い払おうとするはずだ。

いや、する。

とは言え、今回のケンカの原因は俺ではなくあつちにも責任はあると思う。クッションを投げつけられた自分にも謝罪を受ける必要があると思う。それなのに、自分だけが加害者のような扱いをされるのは理不尽だ。

そう思つて口を開くよりも早く、秀人が電話口で亨が話すのを促した。

「あの、ケンカはしましたけど、別に全面的に俺が悪いわけじゃ
今日の朝食、カツ丼だったんだ。』……は？カツ丼、ですか…？」

重い。

朝っぱらからカツ丼。胃がもたれて仕事どころではないだろうに…。

『弁当も持たされたんだ。唯に。中身なんだと思う？』

「さあ？」

『から揚げ弁当！！おかずはから揚げだけ！！野菜の緑も卵焼きの
黄色も何にも入って無くて、彩りは茶色一色！！』

「……朝・昼と随分へビーな食生活送ってますね、桐生さん…」

『それだけじゃないんだ！今日の晩御飯！天ぷらだって言うんだよ
！…？』

「………一日中、胃が休まる時がないですね…」

『「ないですね。」じゃない！ないんだ！！しかも、これがいつま
で続くかわからないから、お前に電話してるんじゃないか！！放っ
ておいたら一週間は続くんだからな！？僕達の胃が油まみれになる
前に唯と仲直りしてくれ！』

…

正直意味が全くわからない。

何故ケンカして実家に帰ったあいつが作った食事如きで、俺がつべこべ言われなければいけないんだ？

しかも揚げ物だけと言うのが、またまた意味がわからない。

「あの、順を追って説明してもらえます？」

『うん？だから、唯が僕達にお前とケンカした八つ当たりをしてるのはわかるんだけど、むしろ八つ当たりですらして欲しいんだけど！だけど、食事は別。毎日毎日揚げ物が続くなんて、地獄だよ！？この暑い日が続くのになんてことだ！！』

「…なんで揚げ物…」

『祥子さんだ。』

「祥子さん？」

『祥子さんが昔、父さんとケンカした時に同じ事をしたんだ。その時は二週間も続いた揚げ物三昧の毎日…。まあ…あの頃は僕も美奈も若かったし、父さんも意地になってた感があったんだけどね。ただ、唯はそれを、祥子さんからこうしてケンカをした時の八つ当たりをすればいいんだって勘違いしてるんだ。』

…。

頭が痛い。

八つ当たりにしては子供じみているように見えて、実は卑怯。食生活
を盾にとった八つ当たりなんて卑怯の一言しかない。
しかも俺ではなく、家族に八つ当たり…。

あいつ…、いつの間にそんな卑怯な女になった…っ！

『いいか？ちゃんと明日には仲直りしろよ！？』

「いや、あの……」

と言うより前に切られた。

ため息を付くより早く、まさかの美奈からのメールに気付く。亨を
嫌っている美奈からの連絡なんて、真夏であるはずなのに、雪でも
降るんじゃないかっていうほど珍しいものだ。そんな彼女からのメ
ールの内容も、先程の兄・秀人の電話の内容とそう代わり映えのな
いものだった。

『九月から撮影があるのに太ったらどうすんのよ！！不本意だけど、
さっさと唯と仲直りしなさいよね！！』

美奈からも来たか。

と言う事は、あのオヤジからもこないわけがない。

と、身構えて待っていたものの何の音沙汰もないまま、不気味なほ

ど静かな四日間が過ぎた。

結局、未だに唯と仲直りはしていない。

連日の様に秀人と美奈からは連絡が来ているものの、桐生総一郎からの文句は来ていないのを見ると、やはりあの人は大人だと思ってしまう。

とは言え、さすがに桐生家の人達を揚げ物三昧にするのは気が引ける。そう思って携帯を取り出して唯に連絡しようとするものの、なかなか通話ボタンを押すことが出来ない。

はてさて、どうしたもんかな…。と嘆息していると、見知らぬ番号から着信が入ったので反射的に電話を受けた。

「はい。」

『あ、その声は遠藤さん？あの、あたし葛城です。』

「…葛城…ああ、桐生さんの。俺に電話だなんて、桐生さんに何かあったか？」

『初めに言っておきますね。あたしこれからちょっと大声出すんで、耳から電話離してもらえます？』

「は…？」

『いいですか？』

わからないまま言われた通りに携帯を耳から離れた。

瞬間。

『馬鹿秀人ー！ー！ー！っ！！！！！よりによって食べたい手料理何って聞いて、答えが』とこてん』っておかしいだろー！ー！ー！ー！ー！ー！』

『天草から作れっか！？あたしが海まで行けばいいのか？潜って取ればいいのか！？あの野郎っ！！』

と、数分に渡って秀人の悪口を延々と電話口で叫び続けた桜は、言いたい事が言い終わつたのか先程とは打って変わって、穏やかな声で亨に話しかけた。

『って事で。遠藤さん、お願いだから唯ちゃんと仲直りしてくれませんか？秀人の体臭が油臭くなるのを黙って見過ごすわけにはいかないんで。』

「油って…まさかまだ揚げ物生活してるのか？」

『らしいですよ。あー、美奈さんも毎日メール来てるますけど、相当キツイみたいですね。吹き出物が出そうだから、胃もたれが取れないとか言ってますから。』

「……………」

『そのうちゆっきーからも連絡くるんじゃないですか？その前に仲直りしてくださいね！ー！じゃー！』

そう言っただけで切られた電話を呆然と眺めながら、桜の言うゆっきー…
と言う事は悠生からも連絡が来る可能性があると言うことで、なん
となくブルリと身震いを一つ。

父譲りの危険察知能力を遺憾なく発揮して身構えていると、やはり
悠生から電話が着た。

「…なんだ…」

『ちよつと亨さん！まだ神崎ちゃんと仲直りしてないんですか！？
やはくしてくださいよ！！美奈さんが、俺の美奈さんがー！ーっ

！……！』

「っ……おま……うるっせー……」

『仕方ないじゃないですか！！美奈さんと飯行こうと思っても、「
家で食べる」ってつれない返事するくせに、会う度にげっそりして
いく美奈さんなんか見たくない！！だから早く仲直りしてください
よおおー！……！』

「……………」

『もー！』『ごめん』の一言も言えないなんて、亨さんのヘタレ……！』

……！

こいつにだけは言われたくない。

美奈に面と向かって言えないくせに、裏では美奈の悶え泣く姿に興

奮している、鬼畜メガネなこいつにだけは。

「お前に『ヘタレ』って言われる筋合いはねえ。」

『だったら早く!! 今日メンチカツだって言ってたんですよ!? ちなみ昨日はパイコー麺だったらしいです。』

「……………」

『明日も同じ状態だったら、亨さんの事ヘタレって呼びますからね!?! いいですか!?! いいんで』

ぶちつと終話ボタンを押して、強制終了した。

これ以上悠生と話していると、逆に仲直りなんてする気が失せる。

仕方がない。謝るにしても、面と向かって謝る方がいいだろう。

そう思つて、唯の実家まで車を出そうと思つた。丁度時刻は昼前で、今から行けば丁度昼食を取っているかもしれない。とりあえず何かを差し入れてでもしようと思つたが、それを考えたのでやめた。

何気に揚げ物食つてないかもしれないし。と言うか、そうならば唯だけは揚げ物三昧な毎日を送っていないのかもしれない。

と、言う考えも玄関口に立った瞬間、撤回した。

「…匂いが…」

油くさい。

ここまで油臭。こつ油臭くては帰って来ても心休まるどころではないだろうに……。

意を決してチャイムを鳴らす。

『はい。』

「俺。」

『俺才レ詐欺はお断りです。』

「……いいから開ける。」

『……えー……』

数秒渋られたものの、流石に炎天下に外に放置するのは気が引けたのだろう。ガチャッと玄関のドアが開いたと同時に、ぶわりと油臭い空気が漏れた。

「油くせっ!」

「失礼な!! あ、でもカニクリームコロッケ作ってたの。先生食べる?」

思わずそう言つと、唯が心外だとも言うように抗議の声を上げた。

ふと横を見ると、リビングから顔を覗かせたナイトがこちらをじー
ーと見ていた。
「気のせいかな、黒い瞳からは『ようやく来たか…』と心の呟きが聞こ
えるような…。」

「…コロッケ…」

「お中元にカニ缶貰ったんだけど、パパが使っても構わないって言
ってたからね。だからカニクリームコロッケ作ったの。んふー、お
昼からプチ贅沢〜」

「どうやらもりもり揚げ物を食べているらしい。こんなことでは夏バ
テなんてしないだろう。そう言えば、この夏休みは普通に飯を食っ
ていた。母が夏バテをしていると翼から聞いていたが、こいつに限
ってはそんな事がなかった。
いつも不思議に思っているが、普通の女よりこいつは食う。高校生
という若さ故なのかもしれないが、それでも食う。あれだけ食って、
この体型。摂取した栄養は、全部胸に行っているのではないのかと
時々思う。」

「…もう揚げ物は止める。」

「えー、なんで？美味しいんだもん。あと一週間は余裕で揚げ物食
べられるよ？」

「一週間…おい、唯、ちょっと来い。」

ぐいっと腕を引いて、自分の懐へと招き入れた。力を入れずに抱き締めると、喧嘩する前と寸分違わぬ体型そのままの感触がして、心底驚愕した。

「お前、毎日毎日揚げ物食って太らないって、どういう身体の仕組みしてんだ。」

「え？普通。て言うか、先生何しに来たの？歪な音程の私に何の用ですかー？」

ぷうっとな膨らました頬を手で潰して。

ぷすっと言う空気の漏れる音がして、それに対してむすっとしている唯にようやく謝罪した。

「それに関しては俺が悪かった。だから機嫌直せ。」

「むー……。……。私も、ごめんなさい。クッション投げて……。痛く無かった？」

「痛かった。」

「っーご、ごめんなさいー！ー！ー！あの、あの、あの……お詫びに、コロッケ食べる……？」

「コロッケより、こっち。」

にやりと笑うと、そのまま唇を重ねた。

玄関口でイチヤついている飼い主とその恋人を見ながら、ナイトは「はー、やれやれ…」と言った風にリビングへと戻って行った。

その日の夕食、食卓に並んだのは揚げ物とはかけ離れた麻婆豆腐・ほうれん草の胡麻和え・きゅうりの酢の物などだった。

ようやく揚げ物から解放された桐生家は大層喜んだものの、揚げ物三昧を送る羽目になった元凶である二人がべったべった、イチヤイチヤするのを、胃もたれよりも重苦しい思いで見える事になるのであるが、それはまた別の話。

ある会話…男子編

悠生「お二人とも、裸エプロンってどう思います？」

秀人「……………何いきなり……………」

亨「……………ついに脳みそに蛆うじでも湧いたか。」

悠生「…ひつ！！…ちよつ、そ、そんなすっげー怖い顔で睨にらまないでくださいよ！！」

亨「あゝ？」

秀人「お前さ、二人の兄であるこの僕に喧嘩売ってんの？この前っから…調子のるなよ？」

悠生「ち、違います！誤解ですって！！お願いですから俺の話聞いてください…」

零「まあ、早い話がこいつが美奈ちゃんに借りたマンガの中であつたんだと。『裸エプロンで彼氏とラブラブ（はあと）』。つっても、秀人は嫌いだもんな。裸エプロン。」

秀人「…全く、何の本読んでるんだ、美奈は…。」

亨「美奈の性癖はともかく。俺は嫌いです。裸エプロン。」

悠生「え？亨さんも？」

秀人「僕も嫌い。あれって何の意味があってやるわけ？大体さ、エプロンの使い方を間違ってると思わないのかな。エプロンはあくまでも『エプロン』なわけであって、決してセックスの材料じゃないと思うんだけど。」

零「性欲と食欲を兼ねてるんだろう。『私を食べて』って感じ？」

秀人「何それ。まあ百歩譲って零の言う通りだとしても、それはそれ、これはこれ。って別個に出来ないもんかね。ま、僕はこういう理由なんだけど、亨は？」

亨「学生時代に部屋帰ったらいたんですよ。裸エプロンした家政婦やらメイドが。実家専属じゃないの雇ったのが間違ってた。」

悠生「……………うわっ…（滝汗）」

零「おー、すっげーな。まさに「亨お坊ちゃんに捧げます」って感じだったわけ？」

亨「断られるのは頭に入って無かったみたいで、何故か逆ギレされたんですよ。あまりの凶々しさに腹立ったんで、何もせずに服を着せて帰らせた後、すぐさま会社変えましたけどね。それが何回か続いたんで、結局実家専属の古参のメイドに任せるようになったんですけど、そうなると実家に情報が筒抜けになるんで嫌だったんですけど、背に腹は変えられないって事で。」

秀人「大変だな。あー、でも同じようなこと僕もあったな。高校生
の時に、部屋の掃除を頼んだ家政婦が同じようなことして、ベッド
で寝そべってたことあった。全裸で。」

零「ああ、そついやあつたな！」

悠生「な…なんで零さん知って…」

秀人「零が遊びに来てた時だったから。」

零「いやー、あん時はビビったね！秀人以外の人間がいるって言うので悲鳴上げられるし、秀人はキレるし。俺あの時が唯一かもしれない。こいつが女相手に怒鳴ったの。この綺麗な顔が無表情になって怒鳴るんだぜ、こえーったら無い！」

秀人「あれは仕方ないし。僕は悪くないと思うんだけど。逆に被害者だよ。」

亨「勝手に部屋に入った以上、粗方想像は付きますけど実際やられると興奮しませんよね。逆に萎える。」

秀人「だよな。押しかけ女房とかってありえない。」

亨「わかります。」

悠生「あ、あの…俺美奈さんに聞いたんですけど…桐生総一郎…お父さんつてもつと凄い事あったって…本当ですか…？」

秀人&零「ああ、らしいな。」

悠生「ま…真面目に…！？」

総一郎「『Dupont』のトップやった頃は、オフィスに全裸のモデルがいたり、女性秘書が目の前で突然服脱ぎ出したり、飛行

機に乗ってた時には下着付けてないC Aが俺の膝に乗ってきたりな。ホテルの部屋に潜りこんだ女もいたな。流石につまみ出したが、そんなのは日常茶飯事だったぞ。」

全員「……………（啞然）」

総一郎「祥子と再婚した後でも同じような事ばかりだったな。だから俺は金輪際女を秘書に付けないことにした。仕事とセックスは全く別モンだていうのに、全く。」

秀人「…父さん…それでよく祥子さん怒らなかった…ってまさかあの揚げ物地獄ってそれが原因!？」

総一郎「ああ。一応フォーはしたんだがな。」

悠生「…凄いですね……………」

零「で？悠生は美奈ちゃんの裸エプロン見たわけ？」

悠生「はい!……………って、すいませんすいませんすいません!!!!!!
(土下座)」

零「遠藤は？唯ちゃ」

亨「…世の中、知らない事の方がいい事もあるんですよ、零先輩。」

零「おお、上手く逃げるね、お前。つーか笑いながら睨むな。顔が整ってる分、こえーんだつつの。秀人、お前は？」

秀人「だから嫌いだって言ってるのに、桜にやらせるわけないじゃ

ないか。」

総一郎「秀人、美奈がお前の彼女連れてランジェリーショップ行くのー！ってのはしゃいでたが、何故か手にはエプロンのプレゼント持ってたぞ。」

秀人「はあ！？あんの、馬鹿！！！！連れ戻さないと！！！」

悠生「…あ、秀人さ…行っちゃいましたね。」

亨「さて、俺も帰るか。」

総一郎「待ちやがれ、バンビ。今日唯は家に帰らせるんだよな？」

亨「はっ、まさか。」

悠生「（は…鼻で笑った…）」

総一郎「ほおう…てめえ、バンビこの野郎！！俺が唯に何日会ってないと思っただが…！！！」

亨「知るか、クソオヤジ！てめえもいい加減、娘離れしやがれ！！！」

零「しゃ、社長！！落ち着いてください！遠藤、お前も落ち着けよ！！！！」

総一郎「うるせえ、高橋！！！」

亨「零先輩には関係ないでしょう！！！！」

零「……悠生……こいつら放って置いて、二人で飲みにも行くか……」

悠生「……そうですね……」

総一郎「唯の裸エプロンだ！？そんなもん見せられて、勃たないてめえが気色悪すぎるだろ！！さてはお前、EDか！？」

亨「っ！こんの、クソオヤジ！！誰が勃たないつつた！！」

総一郎「ああん！？つつー事は、てめえ唯に手え出したのか！！この犯罪者が！！」

亨「はあ！？何だと、このクソオヤジが！！だったら何て言や気がすむんだ！！」

こうして秋の夜長は更けていく。

ある会話…男子編(後書き)

翼「あれ、僕の出番はなし？」

亨「…気にすんな」

翼「僕は好きだよ、裸エプロン」

亨「誰も聞いてねえよ」

そんなことなかったり。

ある冬の朝の会話（前書き）

ただひたすら甘ったるい話。寒気注意！

ある冬の朝の会話

最近めつきり寒くなって来た。

いくら関東と言えど、あんまり寒かったら雪が降るし。降ったら降ったで、電車は止まるし渋滞はすごいし。

雪は好きだけど、寒いのは嫌い。

肩口が寒い…。

半分眠りながら、もそもそと肩口にかかっていたいなかった布団を手繰り寄せ、枕に顔を埋めて私は再び超軽量・ふわっふわの高級羽毛布団に包まれながら眠りの世界へ誘われようとしていた。

どうせ今日は日曜日。ナイトもないことだし、もう少しだけ寝ても文句は言われないはず。

だって、隣の人も起きる気配ないし。

「…寒いかな？」

「んーん、もうあったかい。」

布団ほとんど私の方に持って来ちゃってるしね。

って、あれ…先生、起きてたんだ。

ギシツと隣で寝ていた先生が寝返りをうつのがわかった。
ごめんね、先生。寒いでしょ。と言う前に、がっちり背後から抱きつかれた。あー…背中があったかい…。

「冷えてるな。」

「今日寒いよね…。雪降ってたりして。」

「雪が降るまでは寒くないだろ。だけど、お前寒いのが苦手だよな。冬になつたらすげえ寒いシカゴにいたくせに寒いのが苦手って…」

シカゴ育ちでも寒いのが苦手なんですー。それにシカゴに居た期間ってほとんど覚えてないくらい小さかったし。ほぼ日本育ちだって言っても過言じゃないの、よくわかってるくせに。
それより、耳元で喋るのをやめてよ。くすぐりたいし、何か嫌な予感が…。

私の嫌な予感が当たったのか、先生が私の首筋に顔を埋めながら囁いた。

「あつためてやろうか。俺が。」

「ケッコウデス。」

「遠慮すんなよ。」

「してないー！ー！や、やだ、ちょっと…！やっ…ひゅっ！…さ、

寒い！バカバカ！！」

なんで私の所だけ布団剥ぐのー！

エアコン付けてない室内は寒いんだよ？雪国と違って建物の防寒対策が違うから、北国より寒かったりするんだよ！？

むー！と威嚇するように先生に剥がれた布団に突進する。もふつと顔から突っ込むことになったけど、そこは超高級品。突っ込んだ先からあつたかい。

何かついでに先生に抱き付いてる形になってるけど、布団挟んでるからセーフ？

私の体内時計で十秒ぐらい。そしたら先生が布団を再び剥いで、自分が仰向けになってるのに私が覆いかぶさるような形になるように私を移動させると、剥いだ布団を背後に掛けてくれたので安心してべたつと先生にくっ付いた。

ああ、あつたかいー…。

朝から布団に突っ込んだりしているせいで乱れた髪をちよいちよいつと直しつつ、先生に撫でられる。それが気持ちよくて、目を閉じた。

再び訪れようとしている眠気を感じつつ、先生が言う言葉を聞いていた。

「今度温泉でも行くか？」

「おんせん…？どこの？」

「うちがよく使ってる温泉旅館。その露天風呂が有名でな、飯も
うまいんだ。」

「…ごはん…いいなあ。たべたい。」

「露天風呂より飯かよ。」

先生にくくつと笑われたけれど、だって旅のメインは美味しいご
飯が基本でしょう？

お刺身とか。地元で採れた美味しい野菜とか。鍋とか。地元牛のス
テーキとかね？

むくつと顔を上げると、私を見ている優しい茶色い目とぼつちりと
視線が合った。

「私、船盛りって食べてみたいなーってずっと思ってたの。でも
ね？お兄ちゃん達があまり生魚得意じゃないから、ずっと我慢して
て。」

「ああ、確かに桐生さんも美奈も生モノあまり食わないもんな。」

「お寿司は大丈夫なんだけどね。お造りが駄目らしいの。だから、
皆で温泉旅行に行っても、お造り余っちゃって…。そんなんじゃ船
盛り頼めないでしょ？」

「船盛りねえ…。結構量あるぞ、あれって。もしも食えなくて余っ
たらどうする…って心配するだけ無駄か…」

「…なんか含みある言い方…。まあいいけどさ。」

ぶーっと頬を膨らませて顔を下げる。

寒い寒いと思っただけでも、やっぱり先生はあったかい。ビバ人間毛布。

またしてもくつついた私に対して、何も言わずに黙って髪を梳いている感触を感じながら私は再び眼を閉じた。

身体全体に伝わってくるぬくぬくとした温かさが、一番安心する。ああ、護られてるなーって実感する。

私が一番無防備になれるのは、亨の側だけ。

エロだけど。

年上だけど。

口うるさいけど。

大好きなのは、亨。

ふふつと笑いながら私は身体力を抜いた。

すっかり眠ってしまった唯を見ながら微笑んだ亨は、彼女の唇に軽く己のそれを重ねた後に遠藤家御用達の温泉旅館の事を思い浮かべ

た。

「有名なのは、離れの客室露天風呂なんだが……まあ……いいか」

ぼそつと呟いた亨が唯の身体を抱き締めながら眠りに付いたのは、
愛しい彼女が眠ったのとそう時間は離れていなかった。

ある冬の朝の会話（後書き）

本当はもっと甘ったるくする予定が…。甘味が少し足りなかったか
…！！

桐生家のバレンタイン（前書き）

本編から移動してきました。内容は同じです。

桐生家のバレンタイン

「唯、今日は何の日？」

お兄ちゃんから朝一番にそう言われた。

はいはい、わかってますよ。今日はバレンタインだね、お兄ちゃん。でも、おはようも言わずに、チョコ要求するなんてどうなの？

「おはよう、お兄ちゃん。わかってるよ、バレンタインでしょ？チョコ作ってるの知ってるくせに、確認しなくても大丈夫だよ。でもまだあげないからね、朝一で甘い物食べないで下さいー。」

「えー…。」

「えーじゃないの。あ、パパおはよう。」

「おはよう、唯、秀人。朝っぱらから賑やかだな。」

と言いつつも、朝の挨拶がてらぎゅーっとハグされるのも何時もの風景。

まだお姉ちゃんが起きてこない…。低血圧だからね。

「パパ、バレンタインのチョコどうすればいい？今日仕事休みでしょ？」

「あー、そうか、今日はバレンタインか…。俺は午前中は駄目だな。祥子の墓参りに行ってくる。」

「お母さんの？」

「そう。バレンタインは男が愛する女に捧げる日だからな。ま、日本じゃチョコをあげる風習になったが、海外出れば逆だ。なあ、秀人。」

「そうなんだよねえ。僕が日本に来て初めてのバレンタインで、何でこんなにチョコを貰うのか不思議だったし。美奈は逆に驚いてたよ。何で女の子がチョコあげなきゃいけないのって。」

「そう言えばそうだった。日本だけなんだよね、チョコあげるの。だったら、パパ達にもあげなきゃいいのかなと思って、何年前に忘れたフリをしてあげないでいたら、次の日切々と言い聞かせられた。チョコレートちょうだいと…。」

以来、欠かさず手作りしているのだが…

「パパもお兄ちゃんも甘い物嫌いじゃない。」

「唯が作ったのは別。」

…はい。

答えが分かってて聞いた私がバカでしたよ。

「じゃあ夜に渡すね。あ、お兄ちゃん、今日高橋さんに会ったりする？日曜日だから無理？」

「零？いや、アイツの家行けば会えるけど…はっ！唯、零になんかチヨコあげなくていいんだよ！？」

「そんなわけにはいかないでしょ。いつもお兄ちゃんが迷惑かけてますっってお詫びも込めたチヨコなんだから。」

「迷惑って…！」

「どつしよつかなあ…。高橋さんと奥さんの分もあるのに…。」

ちらつとお兄ちゃんを見て、お兄ちゃんお願い？と首を傾げてみた。おっ、どつやら効果はあったらしい。渋々ながら、あとから高橋さんの家に行ってくれるらしい。

「…おはよー…」

「おはよう、お姉ちゃん。今日は仕事？」

「うー…そつなのお…。今日帰って来れなあい…。唯、戸締まりちゃんとして寝るのよ…？」

「まだ朝だよ。シャワー浴びてきたら？あとでチヨコあげるからね。」

「ちよこお…？あ、今日はバレンタインだもんねえ。ありがとう、唯い…。」

ぎゅーっと抱き締められたのだが、そのまま動かなくなったお姉ちゃん。

パパが軽く笑い、「寝てるぞ、こいつ」と言っ、お兄ちゃんが起こしてくれたおかげで、フラフラとシャワーを浴びたお姉ちゃんを見送った。

今日帰って来ないお姉ちゃんにあげるために、チョコを用意した。因みに、お姉ちゃんには生チョコ。

シャワーから上がったお姉ちゃんにあげると、大袈裟すぎるほど喜んでくれた。これも毎年の事だから、慣れっこだ。

午前中に三人ながら出て行ってから、お父さんの遺影の前にもバレンタインチョコを供えた。

パパとお母さんが言うには、お父さんは甘い物が好きだったらしいので、ガトーショコラを作った。小さいけど、ホールで。

お母さんの遺影の前には、そのガトーショコラを一つ切って供えた。

今頃、二人で食べてるかなー。

あ、パパがお墓参りに行ってから、お邪魔虫が居なくなってからゆっくり食べてね。

仏間を後にして、ナイトのバレンタインチョコを用意する。

と言っても、犬にチョコはあげられないので、板チョコ型のおもち

やで気のゆくまで遊んであげるのだ。まあ、もちろんおやつもあげるけど。

結局、パパとお兄ちゃんが帰ってきたのは午後も大分過ぎてからで、夕方って言った方が早い時間だった。

二人にチョコを渡すと、何でかわからないけど、逆に二人からプレゼントを山ほど貰ってしまった。

…パパとお兄ちゃんが食べる予定のチョコって、唐辛子入りのやつなんだけど…
ま、いつか。

「なにこれ、辛っ!」

「俺のも辛いぞ。」

「甘い物嫌いだけど、これも結構来るよね…。」

「そんな事言ったら、来年貰えなくなるぞ。」

「…そうだね…。しかし、辛いな。…うわ…父さん、これハバネロだよ。」

「…だろうな…。見るからに真っ赤だしな…」

「「我慢だな」だよな」

次の日、「唯ちゃんの作ったチョコ美味かった」と聞いたパパとお兄ちゃんが、高橋さんに、鬼のような仕事の割振りをしたのは知る由も無いことで…

「何ですか、この量。」

「「黙ってやれ。」」

「二人揃って、パワハラですか。」

「唯のチョコ食ったんだろ？」

「美味かったんだよね？」

「「だったら黙って仕事しろ。」」

「…はい…。」

…唯ちゃん、この二人に一体何作っただの…。
高橋さんのその嘆きを私が知ることは無かった。

遠藤家のバレンタイン（前書き）

本編から移動しました。内容はおなじです。

遠藤家のバレンタイン

『亨、チョコあげるから帰ってらっしゃい。』

それだけ言っただけで電話を切った母。

日曜の朝、しかもまだ4時だぞ、あのババア……。携帯をサイドボードにぞんざいに投げつけた時にゴトンと携帯が落ちた音がしたものの、そのまま眠りに落ちた。

「やべえ、寝過ぎた……。」

再び目を覚ますと既に日は高く、時計を見ると10時を回るところだった。

何か朝方に電話が着てたような…。と思い出し、携帯を探すと、ベッド脇に落ちていて何故か電源が切れていた。

バッテリーでも切れたかと思い、充電器に繋いでもうんともすんともしない。

「最悪…。壊れた…。」

壊れた物は仕方ない。

修理に出すのも時間がかかるし、そろそろ機種変でもしようとした矢先だったので、都合がいいと思い、出掛ける用意をして、近くの携帯ショップへと足を運んだ。

日曜なだけあって人が多い。

人混みがあまり得意でない俺は、さっさと新しいのを買って帰ろうとした所で、見知らぬ女二人に声をかけられた。

「あの一、お一人ですかあ？」

「良かったら、私達とご飯食べませんか？」

うっぜえ、逆ナンかよ。

そう思ったが、極力顔に出さないで、努めて冷静に断った。だがこの女達は食い下がる。

「えー？いいじゃないですかあ。ほら、今日ちょうどバレンタインだしー！」

「そうそうー！チョコレート使ってイイコトしましょうよー。」

「やあだ、何言ってるのよおー！恥ずかしー！ー！」

キヤーキヤーとはしゃぐコイツらは、馬鹿なのかと本気で思った。

日中、しかも道のご真ん中で恥ずかしげもなく大声で話す彼女達はつきり言つて、かなり目立っている。

顔や体を一瞥したが、別に大した事はない。何せ、高校・大学時代に嫌と言つほど遊んだし、現在進行形でそのスタイルは続いている。まあ規模は大分縮小したが。

その中で付き合つてきた女達から比べたら、今目の前にいる彼女達はある種、未知との遭遇だ。何せ、こんな開けっぴろげなのとは付き合つて来なかつたし。

頭の中で思案しているのを、いい反応だと受け取つたのかどうかは知らないが、片方の女が腕にへばり付いてきた。わざと胸を当てるようにしているのだろが、残念だが何も感じなかつたりするんだよな。こういうあからさまなのは。

「離してくれない？俺もヒマじゃないんだけど。」

「えー！？じゃあケータイの番号だけでも教えて下さいよお。」

「今、手元に携帯無いんだ、悪いな。」

「ウソー！絶対あるでしょー！？」

しつこい…。

俺のイライラが、凄い勢いで山を駆け上がつてる。

その頂点に達する前に、聞き慣れた声が後ろからかかったので、反射的にその方を向いた。

「ちょっと、その子を放してもらえないかしら、お嬢ちゃん達。私その子に用があるの。」

後ろにロールスロイスを従え、どんつと立っている着物美人を目の当たりにしたナンパ女達は、そのあまりの迫力にそそくさと退散したものの、なおも物欲しそうに俺を見ていたが、あえて無視した。まるでその筋の女のように、乗りなさいと言われ大人しくロールスロイスに乗ると、隣に座った着物美人…母、雅から説教を食らった。

「朝に電話したでしょう、今日帰ってらっしゃって!!なのに、無視して女の子にナンパされてるなんて…もーお母さん恥ずかしい…!!」

「携帯が壊れたから買いに来たんだ。ナンパは偶然。しつこかったから助かったけどな。」

「朝には通じたじゃない。」

「あれで壊したんだよ…って、朝の基準が違うくないか?どうしたら朝方の4時にかけてくるんだよ!」

「だって、お父さんが今ロンドンに出張中なのよ。だから電話してたのー。今日バレンタインだから。」

「ロンドンにいるなら、あっちじゃバレンタインは明日だろ。」

「あら、お父さんはいつも日本時間でかけてくるわよ?」

「…あつそう…。で、俺が呼ばれたのもバレンタイン？」

「勿論よ！…家に帰ったらチョコレートあげますからね！あ、お義母さんもあるって言うってたわよ。」

「…おばあ様の…。」

「翼は食べてたわよ。」

…ドンマイ、翼…。

日曜なのに可哀想に…。

彼女と過ごす時間までには回復出来ればいいんだが…。

実家に着くと、待ちかねたかのように祖母が出迎えてくれた。
勿論、チョコレートを持って。

「はい、亨。バレンタインのチョコレートよ。」

「…ありがとうございます…。マンションに帰ってから食べますよ。」

「今食べなさい。今！」

「今ですか…？」

ひくつと口が引きつった。

遠く目の端に写ったのは、ソファアに撃沈している翼と祖父。隣には悲しそうな顔をした渡瀬も立っている。

見た目は普通の抹茶チョコのようだが…。

如何せん、デカイ。手のひらサイズだ。デカ過ぎる。

…食うしかないのか。

今この場で…。

目の前には、キラキラした目で俺を見ている祖母と、わかっているくせに面白そうな顔をした母、口元を覆って顔を背けているメイド達が…。

仕方がない。腹くるるか…。

「ほら、亨。食べなさい。」

「…いつ…いただきます…ふーっ…」

ぱくっ

ブッ…!

「きゃあ、亨、どうしたの!？」

「…………このチョコレ…………」

「え？今年は何張って、練乳と蜂蜜とメイプルシロップとキビ砂糖を煮詰めて固めた後、ベルギーから取り寄せた99%カカオに浸して、さらに抹茶チョコレートとホワイトチョコレートでコーティングしたのよ？美味しいでしょう？」

…。

みなまで言うな。

わかってるから…。

そう言っている祖父の目と、我慢だ。我慢。という双子の兄、翼の空気。

バレンタインは毎年繰り返される遠藤家の悲劇だ。

結局、次の日まで続いた胸焼けと、原因不明の腹痛に悩まされた俺（と翼、祖父、渡瀬以下使用人）はもう二度と祖母の作ったチョコ

レートは食べたくないと言ったのである。

父さん、わざとロンドンに出張したな。絶対…。

零の氷点(前書き)

視点は零で。

零の氷点

「ゆい、およめさんになりたいのー!」

何があつたんだ、唯ちゃん。

やめてくれ、俺はまだ被弾したくはないんだ。

たまたま遊びに来ていた桐生家。

珍しく今日は全員揃っているようで、リビングに一同顔を揃えているのだが、今は祥子さんが席を外しているらしくいつもの定位置である一家の主たる帝王の隣は空いているが、帝王は存在感たつぷりにどんとソファーに鎮座している。しかし、その顔は険しい。

その理由は言わずもがな、先程の発言をした大事な愛し子の唯である。

「唯、なんでいきなりそんな事言うんだ?」

「あのねあのね、ゆい、おかーさんのどれすみなの。すっごいきれいだったからね、ゆいもきたいの。だけど、およめさんじゃないときれないっておかーさんがいうから、ゆいおよめさんになりたいのー!」

「お嫁って…。唯、まだ五歳じゃないか…。」

ぎゅーっとクマのぬいぐるみを抱き締めている義妹を膝に乗せて、

グリグリと頭を撫でているのは一応俺の親友の秀人である。父親が再婚してからしばらくは義妹に対して嫉妬したものの、行方不明事件をきっかけに二人にあったわだかまりを解消したのはいいのだが、その義兄は完全なる義妹至上主義へと舵を切った。何事にも柔軟な対応をしている友人だが、方向転換が極端過ぎるのが玉に傷だと思う。

まあ、ギスギスしているよりだったら全然いいと思っているので、そのまま傍観しているのだが。

「お嫁…そんな…あたしの唯が…。」

「美奈、唯は本当に嫁にいくわけじゃないのに、なんで涙ぐんでいるんだ。」

「だって…あたしの可愛い可愛いプリンセスが…。」

うるうると涙目で訴えるのは、桐生家の美姫である美奈。この子も大概、唯上主義者である。

会った時からこの二人にはわだかまりと言つものはなかったらしい。というか、美奈のお姫様主義のご真ん中にいたのが義妹である唯だったわけなのだが。

「まあまあ。でも、唯ちゃん、旦那さんの当てはあるの?」

「あて?」

「うん。誰が旦那さんだったらいい？」

「うーーーーーんとね。。。ぱぱー！ー！」

その言葉に満面の笑みを浮かべた帝王。息子から愛し子を奪還して、頬にちゅーとキスをして嬉しさを表現した。

「そうかー、唯は俺と結婚したいのか。そうかそうか。」

「唯、駄目だよー！！」

「そうよ！パパと年の差いくつだと思ってるの！？」

勢いこんで子供達が大反対する中、救いの主が現われる。

「あらあら、唯はパパがいいのー？」

「おかーさん、ぱぱだめなの？」

「駄目ってわけじゃないわよ。ただね、パパはお母さんの旦那さんだから、唯と結婚するとパパは重婚で捕まっちゃうのよ。それは嫌でしょう？」

「じゅうじゅん？」

「祥子、そんな事教えなくてもいい。唯、俺は祥子のモノだからな。」

残念だが、俺じゃない奴だ。誰がいい？」

重婚という言葉が飛び出してリビングは一瞬静かになったが、そこは帝王が必死にかわす。しかしながら、愛妻へのフォローは忘れな
い。

「むうー…じゃあ、おにーちゃん！」

「本当にー！？唯おいでー！！！」

「嬉しそうだな、秀人…。」

「当たり前だよ！」

またしても頬にちゅーつとされた唯は相変わらず、身を振ってくすぐったさから逃げようとしている。

「あらー、それもいいけど。唯、義兄妹となるとね、手続きがいろいろと面倒なのよ？それに、軽く禁断チックよ？」

「てつづきい？」

「そうよー。色々と面倒なのよ。」

「祥子さん、それいいですから…。」

がつくりと頂垂れた秀人である。

そんな二人の男を排除された唯は、リビングをきよときよとを見回して、あっ！！と明るい声をあげた。

「ぜろくんがいいー！！おかーさん、ぜろくんにもじゅうこんとか、てつづきとかあるのー？」

「あらー、高橋君だったらいいわねえ。高橋君、唯どつ？まだ小さけれど、一回りの年の差なんてザラにいるわよー。」

「え、俺ですか！？」

「ぜろくん、ゆいのだんなさんー ぜろくんー！！」

「ははっ、光栄だな。唯ちや……………っ！！」

悲鳴を上げなかったのを誉めてもらいたい。確実に桐生家の面子全員の目が痛い。刺さっている。むしろ貫通している。大量出血で矢血死しそうだ、俺。

そんな中、祥子はお腹がすいたと言う唯を連れてキッチンへと消えた。

この雰囲気の中残された俺は、桐生家の美貌を三人も目の当たりにしていた。

綺麗な顔は怒ると……

すんげえ怖い。

「高橋：てめえいい度胸してんな…。」

「零…お前、唯に選ばれたからって良い気になるなよ…。」

「零君、唯が欲しいんだったらあたしが相手になるわよ。ボコボコにしてやる…。」

キンキンに冷えたりビングの体感温度は絶対零度。

あまりの冷たさに気を失いたいと思ったものの、もう二度と唯に『花嫁』とか『旦那』などのキーワードは禁止だと心に書き留めた。

いたいのいたいのとんでけー

「子供がいるなんて聞いて無い!!」

パンといい音が鳴った、ある日の午後の昼下がり。

叩いた女は顔を真っ赤にさせて憤り、叩かれた男は特に痛がるわけでもなく、かと言って文句を言うわけでもなく。ただ白けた目で目の前の女の顔を見ていた。

桐生秀人、二十歳。

今を盛りとばかりに色気がだだ漏れのイタリア育ちのラテン男。と言っても、本人は日本とフランスの血を引いているのだが、それでも女の扱いは流石のラテン男の一言に尽きる。

父親である桐生総一郎は、海外のタブロイド誌で『抱かれない男性』に日本人でありながら堂々ランクインした筋金入りのフェロモン野郎。その父親のフェロモンの血を濃く引いてしまった秀人は、生まれ育ったイタリアから日本に来た時からそのフェミニストぶりを發揮、瞬く間に遊び人と言う揶揄まじりのあだ名を進呈された。

高校時代はモデルをしていたという別れた母親の影響の残る中性的な美貌と柔らかい物腰、思いのほか砕けた人柄に寄ってくる同級生、上級生、下級生は勿論、女子教師までをその歯牙に掛け、危ないところではその彼女達の母親ですらも喰ったと言われる男。そんな彼だったが、その性格ゆえにか全く女に執着せず、自ら彼女だと言う者は一人もおらず人類皆兄弟思考の持ち主であった。

早い話が、最低男なのである。

そんな彼だが、滅多にないと言ってもいい。懐に入れた女が三人い

る。

実妹の美奈と、義母の祥子。それに目に入れても痛くないほど可愛がっている義妹の唯である。

唯は当時まだ六歳。小学校に上がりたてのピカピカの一年生。赤いランドセルを背負うはずが逆に背負われているといった感じのまだまだあどけない子供で、そんな可愛い義妹を学校に迎えに来ていた時だった。

ちなみに、一人で帰らせると言った選択肢は桐生家には存在しない。義母の祥子はそこまで神経質にならなくても…と苦言を呈しているのだが、総一郎と秀人、美奈が揃って「誘拐されたら、事故にあつたらどうする！」と大反対して、結局は交代制で唯を送り迎えしているのだ。

集団登校という選択肢も無い。変な虫（男）がつかないように見張っている、それも裏で三人で結託された事情である。

さて、話は戻るが。

大好きな義兄と一緒に下校中、いきなり出てきた女の人にほっぺをばちーンと叩かれたのを目撃した唯は完全に固まっていた。というよりも、怖くて身が竦んでいたのである。

何故義兄が叩かれたのだろう。それに、なんだか目の前の義兄の雰囲気怖い。ふるふるすると震える手で秀人の袖を引っ張ると、気付いた秀人が先程までしていた氷点下の表情を一蹴させて、いつものように微笑んだ。

「ああ、ごめんね唯。びつくりさせちゃったね。さ、早く帰ろうか。帰ったらおやつあるからね。祥子さんが今日はプリンだって言うて

たよ。」

「プリン…ほんとう？」

「うん、本当。さ、行こうか。」

完全に女を無視した秀人は、遊ぶだけの女には向ける事の無い笑顔で可愛い唯に笑い掛けると、その軽い身体ごと抱き上げてさっさとその場を後にしようとしたのだが、そうは問屋が卸さない。

「ちょ…ちよつと待ってよ！！ねえ、秀人！！」

びくつと身をちぢ込ませた唯が秀人にしがみ付いた。その華奢な背中をぽんぽんと叩いてやると、秀人は自分を叩いた女に向き直った。折角無視してその存在価値をわからせようとしているのにも関わらず、なおも必死に食い下がろうとしている女に向かって秀人が一言。

「君、誰。」

「…え…？」

「その他大勢のうちの一人なのに、自分だけが特別だとも思っただけ？僕はそんなに特別扱いした記憶ないんだけど。それに、こういう事する女って僕、生理的に受け付けられない。だから、もう君に連絡しないから。さあ唯、行こうか。」

啞然とする女を残し、秀人はその場を後にした。後ろから彼女が泣き崩れる声がしたが、当然無視。

彼女面されるのは好きでは無いし、それを望んでもいない。と言っても、自分が選ぶ女はそういうタイプしかいない。基本的に、遊びなれた女でなければ秀人は誘わない。そこで本気になられようが、秀人は全く意に介さない。秀人の親友の零曰く「そういう付き合い方をしていると、本当に苦労するのはお前が本気になった女だぞ」といつも言われるが、自分にそういう類の付き合いをする女が現われるとは思わない。

後に聞いた話だが、あの女は随分と秀人の事を悪く言って回ったらしい。と言っても、結局は持ちつ持たれつ。よくある話と判断され、皆の記憶からは消えるのも早かった。

てくてくと帰る。

軽い唯を抱いたまま秀人はぼんやりと可愛い妹の顔を見て、萌えていた。

すると、そつと叩かれた頬に小さな手を置かれた。

「お兄ちゃん、いたくなーい？」

「ん？なに？どうしたの？」

「ほっぺ、赤くなってるよう…いたそう…」

「ああ、大丈夫だよ。ごめんねー、びつくりさせちゃったね。唯は全然気にしないで良いよ。まあ、帰ったら冷やすから、ね？」

むうっとむくれている唯の背中を再びぼんぼんと叩いてやると、唯が頬を撫でた。

「いたいの、いたいの、とんでけー。お山のむこうにとんでけー！」

「……」

「とんでけー！」

きやつきやと自分の頬を撫でて遊んでいる唯を見て、たまにはこんな事あってもいいかも…と再び萌えた秀人。二十歳の温かい日の出来事であった。

いたいのいたいのとんでけー（後書き）

秀人、最低だな！というわけで、シスコン秀人の萌え萌え記憶。
これでご飯三杯はいけます（秀人談）

劇的びふぉーあふたー（前書き）

そのタイトル通り、遠藤家の激動の日。

劇的びふおーあふたー

「父さん、早く帰って来て！！」

「家が大変なんだ！！」

思わず眉間に皺が寄った遠藤蒼偉、四十歳。

出張中の彼の身は今、中国の上海にある。今日で一週間目、そろそろ愛妻である雅が恋しくなっているし、子供達にも会いたい。とは言っても、双子の男の子なのであまりベタベタと出来ないのが少し寂しい、初老の男である。

しかし、珍しく子供達から電話があったと思っ出てみれば何やら不穏な言葉が並んでいた。

確か…家が大変だとかなんとか…。

火事になったという報告はされていないし、地震で崩壊したという事も聞いていない。

となると、一体どうした事なのか。

生憎父、愁清も同じく上海に出張しているのでどうしたものかと訝しんだ。仕方がないので父に連絡を取って見ると、なんと子供達は祖父にも電話をかけていたらしい。あまりない二人の動転した様子を心配に思った二人は目線を合わせた。

「二人とも家がどうとかって言っていましたね。お父さん、お母さん

「から何か連絡がありましたか？」

「いや、珠緒はいつもと変わらない様子だったが…雅からは何か？」

「雅さんも特に…あ、そう言えば…。」

「どうした？」

「いつもより声がウキウキして弾んでいたような…。」

「…蒼偉、何か嫌な予感が…。」

「…偶然ですね、私ですよ。」

ぶるりと得体のしれない『何か』に身震いした二人は、予定を切り上げて早く帰路に着こうと無言で頷きあつた。

「渡瀬が風邪で休んでいる時に。確信犯ですね。」

「あれがいれば何とかなつたのかもしれないが、それでも…。」

遠藤家執事、渡瀬は現在風邪をこじらせて休んでいる。その為、留守を任されたのは渡瀬より経験の浅い執事見習い。まだまだ若芽であるため、至らぬ所が多々あるのだが、それでも熱心に仕えている態度は賞賛する。しかし、それでもあの珠緒と雅の暴走は抑えられないだろう。

恐々とする親子二人であった。

翼と亨が電話で助けを求めてから、早いもので二週間。もっと早く帰国したかったのだが、仕事の都合が付かず結局今の今まで伸びてしまった。

帰国してすぐにでも自宅に行きたかったのだが、如何せん役職があるため一端会社に行ってから、ようやく帰路に着けた。

「こんなに遅くなってしまいましたね。」

「今日の電話はどうだった。」

「凄く明るかったです。」

「珠緒もだ。……どうなっているのか怖いな……。」

「私の本能は逃げると言っているのですが、そもいきませんから……。」

車内に暗い雰囲気立ち込めたのだが、それには気付かないふりをして車窓を見ても無しに眺めた。

ようやく自宅が見えてきたのだが、外観は特に変わりはない。

ほっとしたのも束の間、車止めの所に子供達だけではなく、渡瀬の姿までもが見えた事で不安が募った。

車が停まるやいなや、ドアを開けた子供達によって惨劇の幕は開いた。

「助けて、父さん、おじい様!!」

「母さんとおばあ様が家中、ピンクにしちゃったんだ!!」

「「…ピンク……。」「」

「俺やだよ、あんな家!!」

「僕もだよ!!父さん何とかしてよ!!」

尋常ではない子供達の絶叫ぶりに思わず渡瀬を仰ぎ見たが、彼自身も何とも言えない悲哀に染まった表情をしていた。

「渡瀬、どうなってる。」

「大胆那樣、旦那様、お帰りなさいませ。あの……非常に言い難いのですが……。」

「まあ、蒼偉さん、お帰りなさい!!寂しかったわー!!」

「ああ、ただ今。ところで、この子達が言ってる……家の……。」

「「父さん!!」」

「…雅さん、家の中をどうしたのかな…?」

聞いた瞬間、しまったと完璧に思った。
愛妻、雅が満面の笑みで答えたのである。

「あのねえ、ピンクにしたの！前々から寂しいと思っていたんだけど、帰って来た時に蒼偉さんとお義父さんを驚かそうと思ってね！お義母さんにも協力してもらったんですよ！！」

「…雅さん、ピンクって…。」

「入ってみればわかるわ！さあ、お義父さんも！！お義母さんが待ってますよ！！」

「雅…、珠緒も協力したのか…。」

「そうですねー！！あ、翼も亨も中に入りなさい！！」

「「いやだっ！！」」

断固として拒否した二人を、仕方ないなと思いつつ中に入った。

一歩玄関を入った瞬間、聞こえるはずの無い声が聞こえた。

『なんといつことでしょう』

まだ放映もされていない時代、多分声だけトリップしてきたのだろ

うと後に蒼偉と愁清は語っている。

「……………」

「素敵でしょう？イメージはロココなの！！お姫様が住んでそうでしょう！？」

「あら、二人ともお帰りなさい。うふふふ、凄いでしょう、これ。ようやく今日仕上がったの。間に合って良かったわね、雅さん。」

「そうですね。ギリギリで間に合いましたものね！」

出張前、確かにあったはずの家の様相はたった三週間で激変した。落ち着きのあった洋館のようだった家は、まさに雅の言う通りお姫様の住んでいそうな雰囲気になっていた。

カーテンはフリル、照明は豪華なシャンデリア、調度品は可愛らしいものばかり。

極めつけ、壁紙がピンク。

全面ピンク。

「…父さん…。」

「…おじい様…。」

「…大旦那様…旦那様…。」

啞然とした二人が我に返ったのはたつぷり五分後。

その後、蒼偉は出張の疲れが抜け切らない身体に鞭打って、愛妻、雅のリフォームと言う名の暴走を全力で阻止した。

結果、雅の劇的ビフォーアフターはたった一日で元に戻され、そして拗ねてしまった雅の機嫌を取るために洋室の一つを献上した。その一室は瞬く間にピンク一色へと様変わりし、姫系家具が揃い、雅の趣味であるコスプレ用衣装が揃った。後に、亨曰く『魔のピンクの間』と呼ばれることになるのである。

「あれは今でも思い出したくないな…。」

「確かにね。父さん、最後には泣いてたでしょ。」

「おじい様もな。」

「あの二人を敵に回したくないよねえ…。」

「全くだな。」

当時の事を思い出して、翼と亨の二人は懐かしくも、あまり思い出したくは無い思い出を振り返った。

劇的びふぉーあふたー（後書き）

なんということでしょう。

きつと、あの音楽も流れていたんだと思います。

匠は遠藤雅ですよ、もちろん…（笑）

この後、遠藤家の男どもは数日間ピンクにつながれたという裏話も…。

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

パラレルですので、なんとなーくで読んで下さっても結構です。
ちなみに、この話の主役は翼です。

ゆい、ちいさくなる？

「翼、今すぐ俺の部屋に来てくれ。何も言わずに今すぐに。」

返答する間もなく切られた弟からの電話。ちなみに現在時刻は時計を見ると、午前五時。

いくら何でも早すぎると思いながらも、電話口での弟の声は今までに聞いた事のない程焦っていた事を思うと、頼み通り行ってやらなといけないだろう。眠い目を擦りながら顔を洗って下に行くと、あまりに早い起床に驚いた渡瀬が足早に寄って来たが、亨の所に行ってくると言うと少々お待ち下さいと言われ、持ってきた袋を渡された。

朝食が入っていますので、亨坊ちゃんとお召し上がり下さい。と持たされたのだが、自分と弟以外の分も入っている事は言わずもがなでわかった。事情が良くわかつている渡瀬ににやりと笑って、行ってくると言い、自分のジャガーに乗って弟の住むマンションまで走らせた。

こんな早朝に呼び出されるなんてどうしたものか。いくら休日とは言え、あの焦り様は尋常じゃなかった事を考えると、彼女に何かあったのかとしか思えない。

「…何したんだか…。」

ポツリと呟いた自分の声は、ジャガーのエンジン音にかき消された。

祖父が所有しているマンションのペントハウスに住んでいる弟は、今の本命の彼女が出来るまでは女を連れ込むなという祖父との約束を律儀に守っていたのだが、出来てからはその約束を反故にしてしまった。何か言われるのだろうかと思っただのだが、祖母と母を完全に味方に付けてしまった事で、あいつは堂々と自分の部屋に連れ込んでいる。

一応彼女は未成年なので、その辺の事は抜かり無くやっているだろうと思うが、それでもたまに心配になる。

小さい頃から知っているせいか、妹のような存在のあの子は無邪気に自分を慕ってくれるのはいいのだが、如何せん弟の視線が怖い。というか、痛い。双子だからこそわかるその感情を恐ろしいと感じた事は、一度や二度じゃない。

駐車場に車を停めて、ペントハウスのインターホンを鳴らす。直後に反応した弟に、並々ならぬ何かを感じて、渡瀬に持たされた朝食一式を持って部屋へと急いだ。

ピンポーン…ガチャ

鳴り終わる前に開かれたドアから覗く双子の弟、亨が待つてましたとばかりに顔を輝かせた。

「どっした、こんな朝から呼び出して…。」

「…まあちょっとな…とりあえず入れ…。」

「何かあったのか？あ、これ渡瀬から。朝食だつて渡されたけど、お前と僕と唯の分も入ってるって。まだ寝てるんだろ？」

亨に袋を渡しながらリビングに入って行くと、桐生家で飼っているという犬『ナイト』が大人しくこつちを見ていた。ここにいるってことは、昨日寝室から追い出されたな……。ひそかにそう思い、ナイトの頭を撫でていると、亨が言い難そうに口を開いた。

「翼、ちよつと来てくれ。」

「何…って、寝室！？いやだよ、唯寝てるんだろ？だったら、尚更断るし！つーか、お前「いいから。」……あー…嫌だー。何で弟と唯の夜の残骸を見せられ……………」

亨によつて開け放たれた寝室のドアを静かに閉めた。

いや、見間違えた。きつとそう。そう言えば、最近忙しくて全然休み取ってなかったし。ハニーにも会えてない。ヤバイんだよなー。会えない期間が長くなればなるほど、いじけるからなー。ま、そこが可愛いんだけどさ。

「おい、現実逃避するな。やっぱりお前にもそう見えたよな。俺の目がおかしくなったんじゃないよな？」

「……………確認したいんだけど、あれ…お前の隠し子じゃないよな？」

「バカ言つなよ。あれはれっきとした唯だ。」

「ちよつと待てよ！何で小さくなってんの！？お前なんか変な事でもしたんじゃないか！？あ、それとも変な物食べたとか！」

「知らねーよ！朝変な感じがして起きたら、隣で寝てたはずの唯が小さくなってたんだよ！」

喧々轟々。

とは言え、ここで言い争いをしても埒があかない。しょうがないので、そろーりとドアを開けて中に入ると、ベッドの中にはやけに小さい人影が見える。ほとんど布団に埋もれてしまっているような状態の中、頭だけは辛うじて枕の上に乗っている。

記憶にある彼女の顔は、確かに童顔である。しかし、目の前ですやすやと気持ち良さそうに寝ている子供：いや、幼児は間違いなく、唯だ。

恐る恐る亨の顔を見ると、心底困ったような顔をしている。当然だ、こんな自然界にあるまじき超常現象を目の前にして、困らない方がおかしい。多分自分も同じような顔をしているのだと思うが、どうしたものかと考える余裕すらない。

大の男が雁首並べて困っている中、唯が大好きなナイトが主人を起こそうとやって来た。多分いつもこうやって起こしているのだろうが、今起こされると非常にマズイ。急いで部屋から追い出そうと思つたが、敵もさるもので、ワン！と明朗に鳴いてしまった。二人ともしまった！！と思つたその瞬間を狙つて、ナイトが僕の拘束をあっさり通り抜け、唯を起こそうと器用に前脚を使って掛かっている布団をずりずりと引き降ろしてしまった。

幸いだつたのは、唯が服を着ていた事だ。とは言え、身体が小さく

なってしまったので着ている服がブカブカだが…。

「ん……んう……ないとー……？」

「ワンー！」

「んーう……ちよっ……と、まっつてよう……。」

……なんか、エロくないか？

そう思つて亨を見ると、手で顔を覆っている。

わかる。わかるぞ。大事な彼女の起き抜けを見られたくなかつたのは、僕もよおくわかるぞ！

とは言え、寝ぼけているのかまだ眠いのか、ぎゅうつと身体をちぢ込ませた唯は、いつもは隣にいるだろう亨の方へポスポスと小さい手を彷徨わせて、いないとわかるとようやくその身を起こした。

最初は視線の定まらなかつた唯は、僕がいるのに驚いたのだろう。それで一気に覚醒したのか、亨を見つけるとパクパクと口を開けて何で？と言つてるのがわかつた。

「おはよう、唯。」

「お……おはようございませゆ……？なんでここにたしゅくしゃんがいりゅんで……ん？」

「「……………」」

「ちたがまわりやない……なんでー？」

想像以上の光景に僕も亨も、ただただ言葉を失うばかりで、二人し
てきよとんとしている唯を呆然と見ていると、存在を無視するなど
ばかりにナイトがベッドに跳び乗った。それを見た唯がベッドから
降るそうとして逆にナイトに襲われた。いや、構って構ってーとい
う彼^{ナイト}なりのコミュニケーションなのだろうが…。

「きゃー！だめだよ、ないとー！！おりてー！！」

「ナイト、降りろ。それにベッドに乗るなって何度言ったらわかる
んだ。」

「そうだよ、だめだよー！！」

唯と亨、二人がかりでナイトを降ろしたはいいものの、唯がしんみ
りと「ないとつてば、ふとつたね」と言った事に端を発した、面倒
くさい事極まりない説明が幕を開けた。

唯が自分の身体を確認するなり、「なにこれー！！！！！！！！！！」
と叫び、それをわからないなりに説明しなければならぬ亨の押し
問答が小一時間続き、これ以上説明してもしようがないので、渡瀬
が持たせた朝食を取る事にした。

保温瓶に入っていたスープを鍋に空けてもう一度暖めなおし、袋に
入っていたサンドイッチを皿に盛る。亨が簡単なサラダを作り、コ
ーヒーを入れて三人とも一息つくくと、ひとまずは落ち着いて食べ始
めた。

ナイトのご飯は唯が用意したものの、握力が無くなってパツカンが開けられないと至極困った風だった。仕方なく亨が空けてやると、今度は小さくなった唯に構わず突っ込んできたナイトによって押し倒され、缶に入っていたドッグフードを半分以上こぼし、それが顔にかかってしまい、顔を洗ってこなくてはならないという一騒動もあつた。

また、席に着いたのはいいが、唯が小さすぎるためにテーブルから顔しか見えない。そのため、行儀は悪いがリビングのテーブルの上に皿を並べて食べる事になった。

「なんでいきなりこうなったのかなあ…。私たち、もともどりゅよね？」

「…わからん…。」

「唯、心当たりはないの？変な物拾って食べたとか…。」

「そんなにいじきたくないもん!!」

ぶんと怒った唯は、本当に子供にしか見えない。実際、僕達にも少し大きめのサンドイッチを半分に切ってやったそれを、両手に持つて口いっぱい頬張っているのを見ると、昔の唯を見ているようで不思議な感じがしてしまう。あの頃は離乳食で、こんなに固形物を食べられたわけではないけれど、それでも懐かしさは感じる。

懐かしさからふっと笑み唯を見ると、コーヒーを一口飲んで盛大に顔を顰めていた。

「とりあえず、服は何かなるんじゃない？あの二人デザイナーだから、さっさと作れそうじゃない？」

「…だな。ていうか、翼、コイツ何歳に見える？」

「……………一、三歳ってとこかな…。」

「俺、あの二人の反応が手に取るようにわかるんだが…なあ、唯…。」

「う……………」

は…と朝っぱらから三人で盛大なため息を吐いてのスタートになってしまった。

さてさて、どうなる事やら…。

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

次回は小さくなった唯が桐生家の男二人に遭遇の巻。
秀人を主役でお送りします。お楽しみに。

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

ミニマムになった唯が総一郎と秀人の目に晒されます。
視点は秀人。

ゆい、ちいさくなる？

「やーっと着いたー…。」

ドサリとトランクを置いて、濃いコーヒーで一服。

甘いものは嫌いだけど、こんなに疲れきっていると流石に糖分が必要らしい。帰ってくる道中に無糖のチョコレートを買ったのを一つ摘み、ココアの甘さを感じる前にコーヒーで流し込む。

「秀人、まだ唯が帰ってないが、美奈はどうした。」

「あ、お帰り。美奈はー…仕事じゃない？…あー駄目だ、カフェイン取っても時差ボケで頭働かない。」

「今回は長かったからな。」

「そう言う父さんこそ、さっき帰って来たばかりなんだろう？そろそろ自分の年も考えなよ。」

しかめっ面でうるせーぞと言いながら、リビングを出て行った父の背中を見ながら、ふーっと息を付いた。

疲れた。

今回はパリ、ローマ、ロンドン、アテネを経由した強行軍だった。父から少しずつ仕事を任されるようになったのはいいとしても、たった二週間の間に殺人的スケジュールを詰められた。詰めたのは言

わずもがなの零だが…。

父も父とて、昨日まではドライブにいたはず。全く、そろそろ年を考えて欲しいものだが、顔と体にそれが出ないのが厄介だと思う。

ああ、唯にお土産買ってくるの忘れたな…。ヤバイ。桜のも忘れた。て言うか、忙しすぎてそれどころじゃなかったし。まあ、零は拘束が緩い分ちやつかり買ってたな…。

その唯もまた亨の部屋にお泊まりか…。仕方が無いとは言え、ム力つくな…。

ピンポーン

玄関でインターホンが鳴った。目を開けて時間を確認すると、どうやら唯が帰ってきたらしい。とは言え、唯はインターホンを鳴らさずに入ってくるのだし、宅配か何かだろうと思いつながら電話を取った。

「はい。」

『どうもです、桐生さん。すみません、開けてもらいませんか？』

「亨、お前だけか？唯はどうした？」

『いるにはいるんですが………とにかく開けて下さい。』

「?わかった、入ってきていいぞ。」

何となく歯切れの悪い亨を訝しげに思いながら、二週間ぶりに会える愛しの妹に思いを馳せる。

こんな事をすっかり漏らせば、桜にシスコンと罵倒されるのは非を見るより明らかなので、最近ではかなり自制しているのだが。

「お帰りなさい、桐生さん。あ、ナイトのリード持ってもらえませんか?」

「よ、久しぶり。おいで、ナイト。ただいまー!」

わしわしと愛犬の頭を撫でていると、奥から父が耳聴く聞きつけたのか玄関にやって来た。ナイトは一家の長である父に絶対服従なので、僕の脇をすり抜けて父の方へ行き、手荒い歓迎を受けていた。そんな光景を見ながら亨に視線を移すが、愛しい妹がない。時差ボケも相まって不機嫌気味に「唯は?」と聞くと、微妙な顔をした。

「...あの、何があっても驚かないって約束出来ます?」

「はあ?僕はお前と唯が付き合ってるって言うのが人生最大の驚きなんだけど。ねえ、父さん。」

「おい、バンビ。俺はできちゃった結婚は許さないからな。」

「ま、自分がそうだったからね。って、父さん痛いよ!」

「口の減らないガキのくせに何ぬかす！おい、バンビ、唯は？」

僕と父さんが言い争いをしている最中にも、亨は一言も発しないまま、微妙な表情を張り付けていた。

珍しい。あまりこんな顔をするような男じゃないんだが……。

「いますよ。」

「は？どどこ？」

「……どこどこ。」

ここにと言われて視線を落とすと、二歳、三歳ぐらいの子供がちよこんと立っていた。

まさか亨の隠し子かと思った矢先に、それが間違いである事が判明する。

「おにーちゃん、おかえりい……あ、ぱぱもおかえりー。」

「……………」

「よつと……はい、唯です。小さくなりましたが、間違いなく、桐生家のアイドルの唯です。」

「あいどるじゃないもん！もー、せんせいおろちてよー！」

亨の腕に抱かれて、じたばたと動き回っている幼児。もとい、唯。

自分はどうかやら、時差ボケで頭がイカれたらしい。ヤバい。これはヤバい。白昼夢なんて可愛い物ではないのかもしれない。

僕が混乱しているのにも関わらず、流石に父は冷静だった。亨に抱かれて暴れていた唯に手を差し伸べると、気付いた亨が父さんの腕に渡した。

「随分縮んだな、唯。」

「ちがうの、ぱぱ。あのね、あさにね、おきたらちっちゃくなつたの。」

「俺が祥子と再婚しようとしてる時ぐらいの背格好だな…。何でまたこんな事に…。おい、バンビ。唯に何かしたか？」

「まさか。気付いた時にはこうなつてたんです。…って、桐生さん？大丈夫ですか？ちよっ！！桐生さん！！」

やけに遠くに感じる亨の声を聞きながら、僕の意識はフェードアウトしていった。

意識…というか目が覚めたのは、自分のベッドの中だった。時計で時間を確認すると二時間ほど眠ってしまったらしい。おかげで、頭が冴えた。

意識を失う前唯が小さくなっていたような気がするのだが、自分の

目の錯覚ではないかと思う。なにせ、唯はれっきとした十七歳。二、三歳児ではなかった。そうだ、時差ボケが引き起こした目の錯覚だ。そうに決まってる。

「おにーちゃん、おちたの？」

「あれ、僕まだ夢見てるらしいな。おかしいな、起きた気がするんだけど。」

小さい唯がよっせよっせとベッドによじ登ってくるのを、可愛いなーと思いつつ見ていると、小さい手で頬を抓られた。

痛い。

「ゆめじゃないでちよー？」

「…………マジでか…………」

がつくりと頂垂れた僕の頭をぽんぽんと撫でてくれたのは、相変わらずの小さい手の持ち主である唯で。

あー、もういいか。ごちゃごちゃ考えるのは面倒くさいし、小さくなったとは言え唯は可愛いし。

小さい体をよいしょと目の前に抱き上げてやれば、軽い軽い。そう言えば、ただいまと言っていないかった。

「ただいま、唯。それと、おはよう。」

「おかえり。それとおはよー。もうだいじょうぶ？いきなりたおれたから、びっくりした。」

「ん、大丈夫だよ。と言うか、唯、舌つ足らずだね。」

「しょうなの。ちたがまわりゃないのー。」

…なにこれ。

ヤバイ。

めっちゃめっちゃ可愛い！！

持ち前のくりつとした黒目がちの目が子供特有の愛らしさを助長、さらにぶくぶくしたほっぺが堪らなく愛らしい。んでもって、やっぱり子供らしいさらさらの髪は、今時の子供みたいに少し光を通すと茶色い。

只でさえ可愛いのに、これはもう犯罪級に可愛い。更に小首なんか傾げられた日には、僕は死ねる。

「おにーちゃん？どうかちた？」

「…っ！唯！……！！……！！……！！……！！」

「きゃー……！！おにーちゃん、はなちてー！！」

ぎゅっつと抱き締めてやれば、子供みたいに…と言うか、子供なので小さい。じたばたと暴れているけど、それがまた可愛すぎる。

ぐりぐりと愛でてしていると、呆れたような声が割って入った。

「何してんですか。」

「あれ、亨、まだいたの？」

「まだいたの？じゃないですよ、唯が潰れます。離してやって下さい。」

「あ、ごめんごめん。大丈夫？」

「ぶはっ。おにーちゃんのおかげか！くるちい！！」

ぺっと僕の手を払うと、唯はよいちょと言いながらベッドを降りようとしたが、すかさず亨に抱きかかえられていた。

唯は気に食わないのか、むーとむくれているが亨はお構いなしだ。

「…おにーちゃん、ひげいたい。」

「あ。ここ、赤くなってるぞ。俺達リビングに居ますから、ヒゲ剃って来てくださいね。じゃなきゃ、唯が嫌がりますよ。」

「何でお前に指図されなきゃいけない…！ごめんねー、唯。痛かったね。すぐにシャワー浴びて来るから、いい子にして待ってるんだよ。」

亨に抱き抱えられている唯の頭を撫でながら、亨を睨むと、父さんが唯を探している声がした。

「ぱぱがよんでる。せんせい、ぱぱが。」

「はいはい。じゃ、桐生さん、後で。」

「ああ。じゃあね、唯。」

唯と亨を見送り、一人、シャワーを浴びようとコックを捻ろうとした時、ふと、唯が着ていた服は何とかならないものかと考えた。

多分既製品であるのだろうが、唯に似合っていない。と言うか、如何にも大量生産です的感觉が癢に触る。

僕の可愛い唯に、大量生産の既製品を着せるなんてことはあってはならない。唯が着るべき服は、一点物の完全オーダーメイド!!これに尽きる!!

熱いシャワーを浴びながら、シャワーの水に負けないぐらいの熱い熱意でシャワーを浴び終え、ヒゲまで剃ってリビングに向かう頃には、僕の頭の中では唯に着せる服のイメージが、まさに源泉から湧き出るような勢いであふれ出ていた。

しかしながら、流石親子。

考える事は同じらしい。

「よし、唯まだ動くなよ。」

「あい。」

「バンビ、そこからピンクの布取ってくれ。」

「これですか？」

「違う、もっと淡いやつだ。そう、それ。」

リビングで繰り広げていたのは、まさに父さんが唯に一点物を仕上げている最中で。父のあまりに素早い行動に感嘆すると共に、若干の嫉妬心が湧き上がった。

たった一人の日本人デザイナーが、イタリアの無名に近かったブランドを世界的に広めたその圧倒的なデザインセンスと、天性の才能。父である『桐生総一郎』は僕にとっては、父であると同時に師匠でもありライバルでもある。

身内にこんな才能がいるのは、目の上のたんこぶだと言う奴もいるけれど、それは目の前の才能についての見方を知らない奴だ。

自分の目の前で出来上がっている服を、誰よりも近くで感じる事が出来る事の興奮と感動。これを超える麻薬は無いと思う。

とは言え、自分が考えていた印象と若干違うイメージになっている父の作る服を見ると、僕の手もうずうずと疼いた。

唯にはもっと可愛さを取り入れた感じでないと。父さんが仕上げているピンクのお姫様仕様は可愛いんだけど、色合いをもう少し抑え目にして、布地を若干上げ気味にすればどうだろうか。

「秀人、起きたのか。」

「うん。父さん、このライン、もう少しシャープにした方がいいんじゃない？」

「いや、ここは背中から腰にかけてのラインだからな。このままだ。」

なるほど。そういう見方もあるか…。

「じゃあさ、袖は？季節を考えればまだ半袖でもいいんじゃないの？…あー、駄目か。全体のバランスが崩れるな…。」

「半袖に出来ない事もないが…。そうなると…。」

「あー、なるほどね。」

デザイナー同士の白熱した話し合いの結果、一時間ずっとトルソーのように立たされた唯が、お腹空いたとブチ切れるまでその議論は続いた。

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

次回、桐生家に帰ってくる爆弾娘、美奈の視点。
とりあえずは、唯至上主義者。

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

ミニマム唯の珍騒動。今回は美奈視点でお送りします。

ゆい、ちいさくなる？

「お疲れ様でしたー！」

「お疲れ美奈。あ、そうだ！ちょっと待ってて。」

泊りがけの撮影終わりでスタジオを後にしようとしたら、マネージャーのマチさんに声をかけられた。なんだと思って待っていると、その手には小さな箱があった。どうやらケーキみたいだ。マチさんめ、あたしに少し太ったんじゃないかって言うくせにケーキだなんて嫌がらせ？しかも、箱にはいつも行列の出来る有名店のマークが印字されてるし。

「マチさん、嫌味なの？あたし、何かしたかなー？」

「してないわよ。これ、貰ったから唯ちゃんのお土産にどうぞ、持ってって。」

「きゃー！いいのー？唯喜ぶわー。ここのイチゴタルト好きなのよね。入ってる？」

「入ってるわよ。殿と王子は甘いもの嫌いだったわよね。だから、はい、これ。チーズなんだけど、食べるわよね？」

「押えるねー、マチさん。さすが敏腕マネージャー」

ふふんと胸を張ったマチさんに感謝して、待機していた車に乗り込んだ。

ちなみに、マチさんの言う殿と王子って言うのは、パパとお兄ちゃんのことだ。パパは殿って感じではなくてどちらかと言えば帝王っぽいんだけど、お兄ちゃんに関しては王子で合っていると思うので訂正しないけどね。

家に着いたのはそうかからなかった。道が空いていたという事もあったけど、やはりマイラブ唯に会いたいと言う気持ちが強かったのだろうと思う。事務所の運転手さんに少し無茶してもらって、ようやく家が見えてきたのだが、図らずも自分の眉間に皺が寄ったのがわかった。

あの、派手な黒のBMWは。

あのロリコン野郎が来てやがる。ていう事は、昨日唯はお泊りだったのだろうか…？そりゃあ、あたしは昨日泊まりで撮影だったけど。パパもお兄ちゃんも国内にいなかったけど！でもでもでも、あいつうろうろ！！！！！！

未だにあの野郎と付き合っている事実には納得出来ていないけど、反対すると唯が悲しげにうつるんとあたしを見てくるので強く言えない。我ながら甘いと思うけど、それが実態なのだからしょうがない。何といっても、唯はあたしのミスウィートハートだから。

もし、あたしが男だったら間違いなく唯を自分のものにしてはいたはず。それこそ、並み居るライバル達を押しつけ押しのけ、グレイシ―柔術で張り倒してでも。あんな細っこいもやしな男に負けるわけがない。

細マツチヨだ？

世はマツチヨだ、筋肉だ。ホイス、ホイスだ！！ホイス最高！！

そのくせ、自分の彼氏が細いとかは言いつこ無しだ。
惚れた者負けだよ、こんちくしょう。

「美奈さん、着きましたよ。」

「あ、ありがとうございますー。じゃあ、気を付けて帰ってくださいね。あと、無茶言っつすみませんでした。」

「いえいえー。じゃ、お疲れ様でした。」

「お疲れ様でしたー！」

一応泊まりだと言っても、ホテルに一泊だったので荷物は少ない。持っている物は、カバンとケーキの箱とチーズが入っている袋だけなので片手で事足りる。

家の来客用スペースに停まっているBMWを忌々しく一瞥し（車庫にはパパのベントレーとお兄ちゃんのマセラティがあるっという事は帰って来ているらしい）、玄関のドアを開けた。

チャカチャカと走ってくるナイトに出迎えられてその頭を撫でくり撫でくりしていると、リビングの方から「お腹空いた！」と子供の声が届いた。他所の子供でも来ているのか、もしくはお兄ちゃんの友達の零君せろのこの子供かなと思って、ケーキを近くにあってテーブルの上に置いて、ちらっと覗くと男三人に囲まれた小さな女の子が、可愛いピンクのワンピースの着せ替え人形になっていた。

うっわ、パパもお兄ちゃんも、あの男も全員が幼児性愛者ペドフィリア？

やっぱい…と思ってそのシュールな光景にドン引きしていると、その女の子があたしに気づいた。

「あ、おねーちゃん。おかえりー！」

「…え？」

「おねーちゃん、きいてよう、ばばもおねーちゃんもね、おかちくれないのー！」

「こら、唯、動くなって言っただろ。」

「あとちよつとだから。そしたらお菓子あげるから。な？」

「もうあちたあー！」

エクセレント！！

ミラクルだわ。

さすが、あたしの唯。不可能は無いのね。

見るからに二、三歳児。となると、あの男は彼女だなんだと連れて歩けないわ。むしろ、父親と娘って感じだわ。ま、高校生と教師なんてベタな恋愛小説の王道禁断設定だから、簡単にデートなんて出来ないだろっけどね。

しかし、可愛い。

さすが、あたしのマイラブ。それに、パパとお兄ちゃんのコラボである服もあたしの好みのご真ん中。いい仕事してるわ、二人とも。むしろ心無しか、いつもの時より生き生きしているような気がする。のは気のせいではないはずだわ。

ああ、もうあの淡いピンクの半そでのワンピースが…。それにリボ

ンだなんて、やるわね、パパにお兄ちゃん。
結いたい。あの細くて柔らかそうな髪をツインテールに…。

脳内まっピンクでうずうずとしているあたしに気付いたのか、あの男が声をかけてきやがった。

「おい、美奈…」

「あ？」

「……………ご挨拶だな。」

「おねーちゃん、めっ！！」

「ごめんねー、唯、怒らないでー。やーん！ぶにぶにしてるー！か
ーわーいーいーいーいーいー！……！……！……！……！」

「美奈、まだ動かすなって言っただろ。唯に針が刺さる。」

「うっ…！仕方ないわね…。あ、そうだ。唯、マチさんに唯の好き
なお店のケーキ貰ったから後で一緒に食べようね。」

「ほんとにー？いちごたりゆとある？」

「あるわよーーー」

もうキョン死するんじゃないかしら、あたし。

舌つたらずの可愛い唯に悶絶しながらパパとお兄ちゃんの工程を見

ていると、視線を感じた。今あたしに視線を寄越すのは一人しかない。正直そつちを向きたいけど、なんでまた唯がこんなちっさくなつたのか原因を探らなければならぬ。なにせ可愛い可愛いといくらあたし達が愛でようが、唯は高校生だという現実問題が存在しているのだ。面倒な事この上ない。ずっとこのままでもいいのに…と内心残念に思いながら、今までの経緯を隣の男に聞いた。話がずれるようだが、ソファーにどかりと座ったコイツが邪魔でいちいち一人がけの方に座らなければいけないくなつた。客のくせに態度がデカすぎるぞ、この野郎。

「なんでまたこんな背格好に？」

「わからん。朝起きたらこうなつてた。」

「朝…昨日寝る前は何ともなかつたのよね？」

「ああ。俺が朝、目が覚めた時にはもう小さくなつてた。唯にも何にも思い当たる事は無いって言うし、寝てる時もなんら異常はなかつたときさ。」

「ふーん…。世の中科学だけでは解明出来ないことってあるのね。不思議だわ。」

全く不思議な事もあるものだと思つしながらも、やっぱり可愛いあたしのマイラブ。

戻るかしら？いつそのことこのまま…。

「不吉な事考えてんじゃねーよ。」

「人の考え読むんじゃないわよ！」

キーッと楯突くと、呆れた表情の男が癩に触る。ギリギリと睨みつけていると、パパがようやく腰を上げた。

「よし、唯、少し回ってみる。はい、くるくるー…秀人、どうだ？」

「うん、いいんじゃないかな。欲を言えば小物も作りたいたいけど、流石にね。」

「あとは、普段着用に何着か…。」

「えー！？もうあちた！！おなかもすいたー。」

とてとてとこつちに歩いて来たあたしのマイラブ。やっぱりパパとお兄ちゃんの力作は凄いの一言に尽きるわ。

ワンピースはひらひらで、靡^{なび}くりボンが可愛い。この短時間にベストまで作った辺りに執念すら感じる。さて、そのあたしの（以下略）は、あたしのところに来ると思いきや…

「唯、どうしてその男のところに行行なの？」

「だって、あちたんだもん。せんせい、おなかしゅいた。」

「昼食つてないもんな、お前。おい、美奈、ケーキあるんだろ？」

「わかった、一緒に食べようね！。おいで〜唯。だから、あんたは唯を放しなさいよ。」

しれっと膝に乗せてんじやないわよ！！

見なさい、パパもお兄ちゃんもあんたを睨んでるのに気付かないわけ！？勝手に二人の世界作り上げてんじやないわよ！！

ていうか、この時点であんたの唯に対する認識は確実にロリコン認定決定だけどね。幼児であろうがお構い無しだ、こいつ…！！

あたし達の氷点下の視線をわかっているであろう男の携帯が鳴ったので、一端小休止。

唯をパパに渡して、一人廊下に出て電話をしているのをこれ幸いと、さっさとケーキを食べようとキッチンに行き、貰った箱を開けた。

「たりゆと…。いちじ…。」

「あれ、イチゴタルトじゃないね、これ。ベリータルトだ。マチさんがイチゴって言ってただけど、唯これでもいい？」

「うん、いちごのってるからいい。」

「あ、パパとお兄ちゃんにコレ。チーズだつて。」

「ああ、このチーズ美味しいんだよね。ワインに合つて。」

「後で貰う。ほら、唯食わせてやるからおいで。」

パパがちゃっかりカウンターのスツールに座り、唯を膝に抱っこしてタルトを食べさせようとしている。あたしだってしたいのに！と思っているのはあたしだけでは無いらしい。お兄ちゃんも卑怯だと言っ風になんかパパを見ているから。

「ずるーい！！あたしだって唯に食べさせたいのに！！」

「そうだよ。ていうか、父さんが今それやると、完璧孫におやつあげてるおじいちゃんの図だよね…って痛い！！」

「誰がじいちゃんだ！じゃあ何か、バンビが父親か！」

「えー、じゃあママは誰よ。唯を産むんだから祥子ママじゃないと駄目でしょー？」

「祥子がバンビなんかに見向きするか！」

「いやー、わかんないよー。案外若い方に…。祥子さん凄まじく童顔だったからね。」

ぎゃーぎゃーと騒いでいたので、三人とも気付くのが遅れた。既に唯がキッチンにいないこと。そしてタルトだけではなく、ケーキが入った箱ごと無いことに。

「美味しいか？」

「うん！せんせいもたべりゆ？」

「いや、いい。ほら、口開ける。」

「あーん。」

「あの子、さつき母さんから電話があつて。夜あつちに呼ばれたんだ。お前が。」

「私たち？なんで？」

「ほら、あーん。多分、翼から聞いたんだろつな。ついでだから実家に泊まるか？」

「いいのー？」

「ま、いいんじゃないか？」

「よくないわよ！！！！！！」

あたしの絶叫が家中に轟いたのはしょうがないだろつ。

しかも、人ん家でラブラブしてんじゃないわよ、このロリコン教師
！！！！！！

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

さて、次回は。

ミニマム唯が遠藤邸に招かれました。当然待ち構えているのは彼女です。

ていう事で、次は雅視点で！

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

ミニマム唯の珍騒動。

今回は遠藤家へお邪魔します。彼女がいますよ、彼女が…。
と言う事で、視点は雅。

ゆい、ちいさくなる？

「ただ今。おや、ご機嫌だね、雅さん。なにかあったのかい？」

「お帰りなさい、蒼偉さん！あのねえ、唯ちゃんが来るのよー。一緒に夕食をどう？って誘ったの。うふふふ、実は翼から面白い事聞いちゃってね。」

「唯さんが来るのか。それでご機嫌なんだね。…ねえ、雅さん。翼から面白い事を聞いたって何？そう言えば朝早くに出かけて行ったけど、あれは亨のマンションに行ったんじゃないのかい？」

「うふふふっ！唯ちゃんが来てからの楽しみよ！！」

蒼偉さんが怪訝そうな顔をしたまま着替えに自室へと戻ったのを見送って、私は唯ちゃんが早く来ないかと待ちわびている。だって、あの可愛い可愛い唯ちゃんが小さくなっただって言うんですもの、見ておかなければ損でしょう！？

翼が早朝に出かけて行ったのは、朝食を取る為に全員がダイニングに集まったよりも前で、どうしたの？と渡瀬に聞いて見ると、亨の所に行ったって言うし。こんな朝早くから呼び出すなんて亨に何かあったのかと思って心配していたのに、帰って来た翼に話を聞いてみると全く予想に反したもので…。

まさか、唯ちゃん二、三歳にしか見えないうような背格好になっただって言うんですもの。驚くより先に、二人の頭は大丈夫かと疑いなくなっただわ。こんなに突飛な発想をする子達じゃなかったはずなのに…と内心哀れんでいたら、翼が携帯電話で撮った写真を見せて

くれた。

…まあ…本当だわ。

あの元々小さな唯ちゃんが、もつと小さくなっている。しかも、心無しか亨の表情がおかしい。まあ、しょうがないわね。親の私から見ても溺愛傾向にある亨が、あの対象である唯ちゃんが小さくなるなんてシヨックだったでしょうし。

それにしても、この小さくなった唯ちゃんは可愛いわ。こんなに小さな携帯電話の画面でもその愛らしさがわかるんだもの、早く来なにかしら。

翼は二人とも桐生の家へ行ってしまったって言ってたけど、さつき電話したら大丈夫だって言うてくれたし。うふふふ、亨、早く連れて来なさい！！

夕食と言っても、今日は生憎お義父さんとお義母さんがいらっしやらない。せつかくの連休だからと言って、温泉旅行に行ってしまったから。確か、湯布院だったわよね。いいわねー、のどかな温泉街私も唯ちゃんを連れて一緒に行きたいわー。あの子は細くて小さいのに、何気に胸はあるのよね…。きつと脱いだら綺麗な肌してると思うのよ。まあ、あの小さな身体を我が息子が蹂躪してるのかと思うと、何だか暗澹たる気持ちになってしまっただけれど…。

あの堪え性がない亨が、美味しそうな唯ちゃんを目の前にして何もしてないなんてあるわけがないし。私も蒼偉さんも、後日桐生のお義父様の所へ菓子折りでも持って行った方がいいのかしら。

まあ！そうになると、桐生総一郎に会えるじゃないの！

あの歩くフェロモン帝王、桐生総一郎に！！

本当に素敵だと思うの、あの方は。間違えないように言っておくけれど、私は蒼偉さんが大好きよ。だけど、桐生総一郎は何て言うのかしら…。精悍な顔立ちに大人の持つ余裕の色気、匂い立つフェロモン！全く、あの方が唯ちゃんのお義父様だなんて凄いわ！！よくあの父親に惹かれないで、うちの亨なんかを好きになったものだわ。

あら…？そう言えば翼も亨も『唯は美形音痴だから』って言ってた気がする。

となると、顔で亨を選んだ訳じゃないのね。となると…一体どうしてあの子を選んだのかしら…。

「ただいま。」

「！亨！お帰りなさい！唯ちゃんは…って…寝てる…？」

「ああ、あつちの家でいいだけいじくり回されて疲れたんだろ。車に乗ってる時に寝た。」

亨の腕に抱かれた小さな子供、もとい唯ちゃん。

落ちないようにしっかりと抱きかかえている我が息子は、見る人が見たら眠ってしまった娘を抱く父親の様に見える。こんなにも亨が子供の扱いが上手いだなんて。と意外に思うものの、それが少しだけ嬉しいなんてこの子には言わない方がいいのかもしれないわね。

すやすやと眠っている唯ちゃんの顔を覗きこもつただけけれど、唯ちゃんは、小さな子供がむずがる様にその顔を亨の胸にグリグリと押し付け、首に手を回して再び夢の中に落ちて行ってしまったよ

うだ。

思わず、柔らかな髪がツインテールに結われた頭を撫でると、亨が視線を超越した。

「起きないな。仕方ない、寝せてくる。」

「亨、亨！！待ちなさい！貴方の部屋じゃなくて、私の部屋に連れていきましょ！！さ、早く！！」

「は…」

「ほら、早く！！」

私の趣味の部屋は、絶対に今の唯ちゃんにピッタリだと思うの！！だって、唯ちゃんの着ている服！まさに可愛くて仕方がない唯ちゃんの魅力を余すことなく表現しているし！！

ひらひらのピンクのワンピースに、首にリボン。その上にベストを着用。一見シンプルに見えるそれらだけけれど、細かいところにごい気の使いようだとか興味してしまうわ。ボタン一つにしても、リボン一本にしても。

髪型もまた可愛い…。毛先をくるくる巻いたツインテールだなんて…。垂涎ものだわ！！

亨の嫌そうな顔は全面無視を決め込んで、姫のベッドにその小さな身体を横たわらせる。

亨が唯ちゃんの着ているベストを脱がせた辺りは、本当に父親っぽかったのだけど、どうしてか『子供にイタズラしようとしている我

が息子』というフレーズが頭に浮かんで、それを慌てて振り払った。ピンクのベッドでスヤスヤと寝息をたてているのを、もうこのためにこの部屋を揃えたと言っても過言ではなかったという達成感のよくなものが私の中に込みあげてきた。

自分の子供が男の子だったせいで、女の子に着せ替えさせてあげられなかった。

ベビー服や、幼児用の服を何着か買って、こっそりと翼と亨に着せようとした事がある。翼は抵抗しなかったのだけれど、亨は何をしてでも嫌がった。今思えば、その頃から融通が利かない子供だったのだろうと思うけど。

「あれ、唯来たんだ。…って、母さん…」

「今、感慨中だから行こうぜ。暫くしたら来るだろ。」

「唯、まだ戻ってないのか…。あっちの皆の反応はどうだった？」

「予想通りかな…。それはまあ、あっちで話すから………」

翼と亨がいなくなった、私の部屋。

好きなだけ居ていいのよー唯ちゃん…うふふふ。

「雅さん、ご飯だよ…ってその子はどこの子供？」

「亨がね、連れてきたの。可愛いと思わない？」

「亨が…?」

「二、三歳ってところかしらねー。もう、本当に可愛い!..!ね、そう思わない?蒼偉さん!」

「……………」

「蒼偉さん?ねえ、どうしたのー?」

蒼偉さんが怖い顔でどっかに行っちゃったわ。どうしたのかしら。そう言えば、唯ちゃんご飯どうするのかしら…。このまま眠ってたらご飯食べ損ねちゃうわね。
可哀想だけど、起こしてあげた方がいいかも。

「唯ちゃん、起きて。ゆいちゃん…!」

「…ん…ゃー……………」

「ごめんね、起きないとご飯食べ損ねちゃうよ…!」

「ごめん…う……………」

「……………可哀想になってきちゃったわ…。仕方ないわね、このまま寝かせておきましょうか…!」

うつぶと笑って、抱き枕代わりにウサギのぬいぐるみをベッドのお

伴にさせ、私はリビングへと向かった。

「あら？」

「亨、どういふ事が説明しなさい。」

「だから、俺の子供じゃないって。」

「だったら、誰の子供なんだ。私はお前を誘拐犯になんか育てた覚えは無いぞ！」

「父さん、違ってます。あれは……」

「翼は黙ってなさい！私は亨に聞いてるんだ！」

「蒼偉さん、どうしたの？」

本当に珍しく蒼偉さんが声を荒げている。この人がこんな風になるのも珍しい。と言うか、滅多にない。

「あの部屋で寝ている子だよ。亨が連れて来たんだろう？」

「ああ。」

「可愛いわよねー。」

「だから……誰の子供なんだとさっきから聞いてるじゃないか……！」

「誰って…千歳先生と祥子さんの子供。」

「なんだと?」

「ああ、蒼偉さん。勘違いしてるのね!あの子は唯ちゃんよ。さっき来るって言ってたでしょう?亨の隠し子なんかじゃないわよ、蒼偉さん!」

私の言葉にきよとんとした蒼偉さん。
こんな顔も珍しいわ。可愛い

「唯さん…?」

「そうだ、唯だ。朝起きたら縮んでたんだ。母さんが連れて来いて言わなかったら連れてこなかったし。」

「そうよ蒼偉さん。あの子は唯ちゃんよ。小さくなくても可愛いわよね、そう思うでしょう?」

「……………」

「あら、大丈夫?」

絶句しているわ。こんな風になったのは、私が素敵過ぎるリフォームした家を見た時以来でしょうね。

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

怒らない蒼偉が初めて怒った、記念すべき日。寂しいのは、それが
見当違いだったっていう事だけ（笑）

次回、ようやく当事者達の視点となります。
ということ、次は亨！お楽しみに。

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

ミニマム唯の珍騒動。今回と次回は当事者達の視点からお送りします。

視点は亨！

ゆい、ちいさくなる？

「ふう。」

渡瀬の淹れてくれた濃い目の緑茶を一口飲んで、ほっと息をついたのも束の間、何があったか聞きたくてうずうずしている母と兄・翼が目端に写っているのに気付いた。先程初めて俺を叱責した父は何故か少しだけ影が薄くなっているような気がするのだが、放っておけば元に戻るだろう。

しかしながら、何がどうなってこんな超常現象が起きたのかこっちが知りたいぐらいだ。

まず一緒に寝ていたら、隣で寝ていたはずの唯の感触がしなくてふと目が覚めた。結構朝方タイプのあいつは、目覚ましが鳴らなくてもいつも起きている時間になると目が覚めるようで、それでいつも朝食を作って待っているのだが、時計を確認するとまだ四時半。いくらなんでも起きるには早すぎるだろうと、隣に寝ているはずの唯がいるかどうかを布団をめくって確認した。

その時の衝撃を想像して欲しい。
正直今でもゾツとする。

何故、昨夜までは何とも無かったのに、俺が起きたら隣で寝ていたはずの唯が小さくなっているんだ。

寝起きで、しかも早朝四時半。我が目を疑うという言葉の意味を、

身を持って証明してしまった瞬間だった。

それからこれは寝ぼけているために起こった所詮夢の中の出来事なのだとはとまず現実逃避をし、とりあえずは唯を揺さぶってみたものの、うんでもすんでもない。ただひたすら、すーすーと寝息をたてて安心しきって眠っている、俺の彼女。

ただでさえ周りからはロリコン認定を受けている身、こんな小さくなった唯が自分のモノだと言った暁には、真面目に性犯罪者の烙印を押される。というか、俺が父親で、唯が俺の子供にしか見えない…。
隠し子だと言われる可能性が大だ。

これは現実ではないという俺の淡い希望が儂く打ち碎かれる前に、翼に助けを求めた。

しかし、翼も翼で小さくなった唯に絶句し、結局何の解決にもならなかった。挙句、何らかの解決策を見つかるまで寝かせておこうと思っていたらナイトにあっさり起こされるし。あの犬、俺の事を絶対に下に見ているような気がしてならない。一応主人である唯がいる時は大人しく従順な態度を取っているが、いなくなった瞬間俺にそっぽを向くなんて日常茶飯事だ。

起きてしまったのは仕方ないので覚悟を決めてかかると、またしても唯の舌がまわらないと言う問題に直面、これでは本気で俺の子供の様に思われてしまうだろう。

実際、桐生家へ行く前に子供服専門店へ赴き、店員にこの子の全身コーデイネイトしてくれと頼んだ。その時に

「可愛いお嬢ちゃんですわー。お嬢ちゃんもパパがかっこよくて羨

ましいわー。」

という言葉は何回もかけられてうんざりしていると、唯も唯で何も言えずにむっとりとした表情をしていた。

車に乗って店に行く際も見た目が二、三歳のためにチャイルドシートに乗らなければならず、「とんだちゅーち（羞恥）ぷれいだ！」とぷりぷり憤慨していた。

桐生家に行っても受難は続く。

まず時差ぼけと疲労とパニックにより、桐生さんがダウン。オヤジはオヤジで、小さくなった娘を目に入れても痛くないほどの可愛がりよう。多分昔の自分に戻っていたのかもしれないが、暫くすると「唯が着ている服が気に入らない。なんでこんな服買ってきたんだ」と叱られた。そう言えば、唯が小さい頃から着ていた服は全部このオヤジのハンドメイドだったらしいという事を思い出した。世界的デザイナーが惜しげも無くその才を奮う服をそんなに小さな頃から着せていたのかと呆れていると、参観日などの勝負服に限っては。という事だという事が後にわかる。なんでも昔、祥子さんに「唯に服作ってる暇あったらちゃんと自分の仕事しなさい！」とこっ酷く叱られたらしい。

そんな事をつらつらと考えていると、いつの間にか唯に着せる服をデザインし始め、あつという間に型紙が出来上がった。かと思うと自らミシンで縫い始め、細かい仕上がりにはたってはようやく目が覚めた桐生さんと一緒になって喧々諤々（けんけんごうごう）。そうこうしているうちに美奈が帰宅。めでたく服は完成したものの、そんな義妹を見た美奈が放っておくはずも無く、折角俺がケーキを食べさせているのにキャンキャンと煩く言うので仕方なく唯を渡すと、キラキラと目を輝かせて颯爽と自分の部屋に連れ込んで髪をい

じくり始めた。

戻って来たのは、毛先をくるくると巻いたツインテールをした俺の彼女。…というか子供？

可愛いと率直に思うのだが、それを素直には喜べない。複雑な心境のまましていると、桐生さんが写真を撮ろうと言いだして、あれよあれよという間に撮影会が始まってしまった。

それから解放されたのはたっぷり二時間後。

ぐったりと疲れきったであろう唯は車に乗り込むなり眠りの世界へと引きずり込まれた。それをしようがないと思うものの、少しだけ寂しい。そんな気持ちを唯の柔らかな髪を撫でる事で払拭いし、現在に至る。

予想はしていたものの、まさか『魔ピンクの間』に寝かされるとは。母もうつとりとした目で寝ている唯を見ているし、父は小さくなつた唯が俺の隠し子なのではないかという珍しく間違つた指摘で、俺は初めて父に叱責された。なにやら波乱ぶくみの一日だったなと嘆息するしかない。

今もようやくメイドに連れられて起きて来たものの、手にはでっかい身の丈サイズのウサギの人形が握られており、それを見た母がやはり頬を赤く染めた。きつとろくでもない事を考えているんだろうなと内心思っただけでも、あえて何も言わなかった。

「唯、腹減ってないか？夕飯結局食いつばくれたらろう？」

「う…うん。ただどお…」

「ほら、こつちこい。渡瀬、軽いものでも良いから何かすぐに食べられるものを出してくれるか？」

「はい、わかりました。唯様…唯お嬢様ですね。何かお食べになりたいものはございますか？」

「ぶよっこりーいが良かったらなんでも！」

ニコニコと笑う唯につられたか、渡瀬も満面の笑みを零していそいそとキッチンへと急いで行った。渡瀬が出て行ったのを確認して、唯をそのまま抱き上げて膝に乗せると周りから視線を感じた。

「なに。」

「…いや、唯可愛いなーと思ってさ。」

「唯ちゃん可愛いわよー!」

「ありがとっございませしゅ…?あー、このごじゃね…」

「気にしないで!なんだったらあげるわ!是非とも抱いて寝てもいいのよ、唯ちゃん!」

ふざけんな。

なんでこんな得体も知れないぬいぐるみを唯と同衾させないといけないんだ。

考えている事がわかったのだらう、ようやくどっかの世界から戻って来た父が俺を不審な目で見ていた。

渡瀬が用意した飯を食って満腹になったのか、きゃっきゃと翼と遊んでいる唯を見ながら父と向かい合って話をする。

「…超常現象って存在するんだねえ。こんな年になって経験するとは。」

「こんな経験しなくなかったけどな。」

「うーん、原因がわからない以上どうなるものか…。とりあえず様子見だね。」

ふと見ると翼に高い高いされて喜んでいる。
あれでも一応高校生。なのに見た目は幼稚園児…。なんかこんなフリーズのアニメがなかっただろうか。

「あ、そういえば…唯がうちの会社のチャイルドシートがあんまり乗り心地が良くないってばやいてた。」

「ん？チャイルドシート？」

「ベルトが思ったよりも食い込んで痛いんだってさ。改善の余地があれば考えて置いてくれないかな。」

「なるほど、ベルトがキツイのか。…ふーむ…。子供目線の乗り心地か。なかなか興味深いね。わかった、言ってみるよ。」

意外にいい意見だったのか、なにやら微笑んだ父に対して、俺はやっぱり微妙な心境なのは変わらない。

そして、母が風呂と一緒に入ろうと言い出した事で更に面倒くさいことになった。

別にいいんだが、そうすると今夜は泊まらなければいけないことになる。一応着替えはあるのだが（もちろんオヤジと桐生さんのお手製部屋着。ぶりぶりモコモコ仕様）、母がなにやら隠し持っていた服を引っ張り出してきた。うん、もちろんピンクのフリルなパジャマ。

「これねー、翼が着たやつなのよー。」

「……え。」「」

「本当は亨にも着せたかったのに、亨ったら凄い嫌がって泣くの。拳句の果てには寝ている間に着せちゃおうと思ったのに、何を感じ取ったのかパチツと目を覚まして号泣よー。全く融通が利かない子だったのね。」

信じられずに翼を見ると、がっくり項垂れている姿が目に入った。不憫な奴…こんな事を今になってバラされるなんて。

そんな翼を憐憫の目で見ている俺と父を置いて、母と唯は風呂へ行

った。

「翼…まあ…気にするなよ。」

「うん、あれはね。しょうがなかったんだよ。私が目を離れた隙に着替えさせられてたから…。」

「…下手な慰めはいらないよ…。」

心無しか、さっきの父の姿とシンクロしている。仕方ないので暫く放って置くかと、俺も部屋に戻って部屋に備え付いているシャワーを浴びた。

浴び終わって、濡れた髪をタオルで拭いているとカチャリと部屋のドアが開いた。

「せんせい、どらいヤーかしてください。」

「乾かしてやるから、こつちこい。」

てててーと歩いて来た唯を抱き上げてベッドの上にあげる。ふわりと香ったのはうちの家で使っているシャンプーの匂い。

「母さんに洗われたのか。」

「なんかね、しゅっごいてんしょんたかかったよ。」

「…ま、気にすんな。熱くないか？」

「だいじょーぶー。」

ふわふわと温風で舞う細い髪を梳きながら乾かしていると、ふわあーっと大きな口を開けてあくびをした。さっき寝たあれだけだったら不十分だったらしい。今日に限っては色々大変な一日だったのだし、眠気は仕方が無いだろう。

乾いた髪を綺麗に整えて頭を撫でてやると、ふにやりと笑った。それが堪らなく愛おしいと思う俺は、末期なのかもしれない。

「私たち、もどりゆのかなー…。」

「案外寝たら元に戻ってるかもしれないぞ。」

「むー……。」

こしこしと目を擦っている唯にベッドの布団を一枚捲つて中に滑りこませる。ふかふかの布団に包まれた唯の頭が枕に沈んだのを見て少しだけ吹き出して、俺は喉が乾いていたので水を一杯飲んでくると言っつて、部屋を一端後にした。部屋に戻ってみると、既に眠りに引きこまれたのか寝息をたてて眠っているようだった。それにつられて俺もあくびをし、ベッドの中に入った。

電気を消して、唯の身体を引き寄せる。随分と小さくなってしまっ

た身体だが、それでもいつものように抱き寄せると擦り寄ってくる。ふっと笑って頬に軽くキスをして俺も眠りに付いた。

「…んせい…先生、起きて！」

「ん…？…今何時だ…？」

「えつとね…三時半。」

「…早すぎるぞ。もう少し寝てろ…。」

「もー！先生つたら！！私、戻った！戻ったよー！！」

その言葉に、バチツと目を開けた俺が目にしたもの。それは…

「服ちっさい！！」

細いのに、ちゃんと出ているところは出ている、元の体型に戻った唯だった。

超展開過ぎて、頭まわんねえよ。

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

亨の言う通り、超展開過ぎて頭が働きません。

唯が戻りましたー。という事で次は唯視点！次で『ちいさくなる』の回は終了です。

ゆい、ちいさくなる？（前書き）

ミニマム唯の珍騒動、最後の回です。いろいろありましたが、小さくなつた原因が今回判明！？
視点は唯です。

最後に少しだけR - 15の表現がありますのでご注意ください。

ゆい、ちいさくなる？

も…戻った…。

よかった、戻ったー！ー！！！！

ふと隣で寝ていた先生を見ると、心底驚いたような表情で私を見ていた。ま、当然だけれども。

なんでかわからないけれど、朝に目が覚めたら小さくなっていた。それだけでも驚きなのに、まさか舌が回らなく、完全に滑舌悪い芸人みたいな喋り方になっていた。あかしやかしやかしゆ。

最悪なのがパパ達の反応。まあ…なんとなく予想はしていたけれど、まさかあんなにテンションが上がるとは思ってもいなかった。特にお兄ちゃんとお姉ちゃんの反響は凄かった。パパはあの時期の私の背格好を知っているから多少なりとも大人しかったけれど、知らない二人は終始テンションが上がりっぱなしだった。

写真撮影と称した、完全に盗撮まがいの撮影会は疲れたの一言に尽きる。まあ、あの頃の姿を見た事が無かったと言われればそれまでなのだが…。

それに、先生の家にお呼ばれたのはいいのだけれど、呼ばれたのにも関わらず、着いたら私は実家で行われたハイテンションからくる疲労から爆睡していたし。失礼すぎる…。

起きた時、一瞬ここがどこだかわからなかった。

周りはピンクの壁紙が貼られ、寝ていたベッドは姫系お姫さんピンクだし、家具も全部が姫系で揃えられていて、ふと視線を隣にやると何故かウサギのぬいぐるみがどーんとその大きい存在感を醸し出していた。動揺した私が部屋のドアを開けると、たまたまそこにいたメイドさんが満面の笑みでリビングまで手を引いてくれた。そしてまたしても何故かウサギのぬいぐるみを手に持たされた。大きい分、今の私には重いんですが、メイドさん…。あ、置いてっっちゃ駄目なんですか…。ううむ…重い。

半ば引きずりながら連れていかれたのは、珠緒さん夫妻がいない遠藤家の面々が集いしリビング。大分慣れたとは言え、この雰囲気ってやっぱり凄い。

薄々気付いていたものの、メイドさん達の表情が明るかったのは雅ちゃんに関わっていたのだとわかったのはお風呂の時。やはりテンションが上がってしまったっていた雅ちゃんに、優しい手つきで髪を洗ってもらっているときだった。

「唯ちゃん、痒いところはなーい？」

「ないでしゅ。ごめんなしゃい、みやびちゃんにかみありやってもりゃって…」

「気にしないでいいのよ！もー、本当に可愛いわね。髪なんて細くてサラサラだわ！」

「…え、えへへー…」

「うちのメイド達も喜んでいたわよ。こんなに可愛い唯ちゃんと遊べ…いいえ、お世話出来るなんて！って言って喜んでたわ。」

…今間違いないで『遊べて』って言いましてよね、雅ちゃん。
まあ確かに、渡瀬さんの反応もどこかウキウキしたものだっだし、
夕食もお子様ランチだったのには啞然としたけれど、皆がキラキラ
と私を見ているものだから当然何も言えなかった。先生の家で出さ
れるご飯は文句無しに美味しいし、出されたものに文句付けられる
立場でもないの、黙ってその旗がたなびくお子様ランチをもくも
くと食べた。まあ、その間も事あるごとに構ってくるメイドさん達
御一行との攻防もあつただけれども…。

広い湯船に使って、ぷあーっと気持ちの良いため息をつく。同時に
入ってきた雅ちゃんに抱きかかえられるように向かい合わせになっ
ているのが、堪らなく気恥ずかしい。

だってね、雅ちゃんの裸体ってムツチムチですんごいエロイんだも
ん！普段は着物で隠されてるからわからないけど、まさに脱いだら
凄いですなおカラダでした…。お姉ちゃんも世間一般では理想的
なカラダと言われているけれど、雅ちゃんの場合は年齢を経たお色
気が…先生、お母さんがムンムンだよ！！

少してれてれしていると、何を勘違いしたのか雅ちゃんが微笑した。
「唯ちゃん、こんなに小さくなっちゃって…折角私唯ちゃんのため
にお洋服揃えてたのに。」

「え。」

「本当はね、着物にしようかと思ったんだけど、どの反物がいいの
かすっごい迷っちゃって。あ、なんだったら今からでも最良の呉服
屋呼ぼうかしら。」

「いえいえいえ！いいでしゅよ！！わたちにきものって！」

「遠慮しなくてもいいのよ。あ、亨と結婚する時に西陣か友禅で一式揃えてあげるわね！」

にっこりと笑んだ雅ちゃんに結局何も言えずに、啞然としたままお湯に浸かっていると少し逆上してしまった。お風呂から上がって水を一杯貰って、翼さんが着たという曰く付きのフリフリネグリジエを着せてもらった。「髪は亨に乾かしてもらいなさいな」と言う雅ちゃんの言葉通り、先生の部屋の前までポカポカとしたまま来ていた。

む、ドアの取っ手が届かない…。むーん！！と唸って精一杯背伸びをしていると、どこからともなく現われた渡瀬さんがそつと開けてくれた。さすが、遠藤家執事！！ロマンスグレーが眩しいです、渡瀬さん！と感動しながらお礼を言うと、やっぱり笑んだまま中に入るように促された。

さり気ない優しさに感謝しつつ先生に髪を乾かして貰っていると、先生の優しい手つきに段々と眠くなってきた。先生は髪を乾かすの上手い。と言うか、いつもやってもらっているけれど、毎回眠くなるんだよね。イツアマジック！

乾いた髪を撫でられるとなんだか嬉しくて、ふにやつと笑った。その後少し話をしたのだけれど、やっぱり眠くて。そんな私を見兼ねたのか、先生がベッドの布団を捲くって私を入れてくれた。そうしてフカフカの布団に包まれた私はあっさりと眠りに落ちただけけれど、寝入りばな、先生が抱き寄せてくれた気がして、やっぱりいつものようにくっ付いた。

先生の胸に顔を埋めながら、見た夢。それは…。

「どうだったー？小さくなった感想はー。」

「…お…おか…おか…っ！」

「丘？」

「お母さん…！」

「やつほー、元気してた、唯。」

まさかのお母さん登場。

えー！？

「あらやだ、そんなに驚かないでよー。傷付いちゃうでしょっ？」

「驚くよー！あれ、これ夢？夢だよね？」

「そうよ、ここは夢の中。だから私と話ができるんでしょうっ？あ、こら、泣かないの。」

「しゅっ…ひっ…おがーぎん…！」

タツクル紛いの突進で、ぐえっ！とお母さんが苦しそうな声を出したのはスルーして。どうして、一体全体どうしてお母さんが私の夢に出てきたんだろう。こんな事は今までに無かったのに。

懐かしいお母さん身体に抱きついたままでいると、頭を撫でてくれる感触がしたので咄嗟に上を見上げた。そこにあっしたのは、やっぱり見間違えなんかじゃなくお母さんだった。…私の記憶にある時よりも若い。なんでそんなにやーっと笑って、わっるい顔してるのよ。

「あのね、秀人君も美奈ちゃんも亨君も。みーんな唯の二歳から四歳くらいの頃って知らないでしょう？」

「え？あー…うん。そうだね。」

「パパが唯一知ってるけど、あの人じゃ唯の可愛さを伝えきれなかったでしょう？案の定、秀人君達第絶賛だったじゃない。やっぱり百聞は一見にしかずってよく言ったものよねえ。」

「…うん？」

「だからー、お母さんが頑張りました！唯の二歳から四歳くらいの背格好にして、皆にお披露目しようの巻！！あ、ちなみに唯が目覚めたら身体は元に戻ってるから。」

「はあ！？何それ！！じゃあ今日一日、全部お母さんの差し金だったの！？」

「うん！」

えー！？お母さん死んでるのに、何その現世への影響力！！て言うか、お母さんそっち系の力あったっけ！？」

「ないけどー。まあ、頑張ったのよ。誉めて誉めて！」

「そんなの頑張らなくていいよ！何やってるのよー！」

「だってねー。亨君だって小さかった唯を置いて日本に帰るのは忍びなかったはずだし。だったら、その頃の唯にしてあげたら亨君も喜ぶんじやないかなーって思ったの。喜んでたでしょ？」

「…微妙に…」

「ほーら見なさい！やっぱり私のした事は皆の琴線に触れたはずだわ！」

嬉しそう。ものすっごい嬉しそうだよ、お母さん…。あれ、起きたら戻ってるって…。

「うん。一日だけの特別デーだったから。まあ、唯も小さいままじや学校にも行けなくなるでしょ？だから休みの日、つまりは昨日一日だけって事よ。安心しなさい。」

「……力の使いどころ間違ってる？」

「間違ってるわいよ。それにほら、小さくなくても唯は唯だったで

しよっ？皆から愛されてるって言う事を再確認出来たかしら？」

「うっ…うん。出来たよ。」

「そう。良かったわね。」

にっこりと笑ったお母さんにふわっと抱き締められて、そこで目が覚めた。

起きたらまだ全然暗くて、時計を確認すると三時半。いくらカーテンを閉めているとはいえ、道理で暗いわけだ。

隣を見ると先生が寝ていて、相変わらず綺麗な顔をしているのが見えた。先生を起こさないようにそっと身体を起こしてライトの光量を加減して点けた。今見た夢の内容を思い出そうとしたのだけれど、霧がかかったように何も思い出せない。何だかすごく嬉しいような、それでいてどこか物悲しいような感じの夢だった感じがする。

なおもその夢を思い出そうとしていて、ふと胸元が窮屈に感じてそこを見ると、そこにはいつも見慣れた胸があった。ぎよっとして、胸元以外に目をやるとやっぱり見慣れた身体がそこにはあった。

そして、現在に至る。

「……なんでいきなりそうなった…」

「わかんない。起きたら戻ってた…。ね、先生。服小さいんだけど

…なんか変わりになるものってないかなあ…」

「あー…子供用だもんな、それ…。…とりあえず脱げ。」

「やだっ！」

「やだじゃねーだろ…。どっからどう見ても小さいし、お前も窮屈だろう。…それに俺まだ眠いんだよ…。でかい声だすな。皆もまだ寝てるだろうし。」

「ぬうう…脱いでも良いけど、見ないって約束する？」

「見ない。触るけど。」

「っ！ばかー！！」

「はいはい、さっさと脱げ。んで、もう一度寝るぞ。」

「ちょ…っ！先生！脱がさないでよ！」

「んー…小さい唯も可愛かったけど、やっぱこっちの方がいいな。触り応えがあるし。」

「せんっ…！ちょっ…！…ふあ…んっ！」

「声、出すなよ。」

結局。

元に戻った私だけど、朝から着る服が無く雅ちゃんの渾身の一品であるメイド服で帰る事になった。
機嫌？そんなもの、勿論悪かったに決まってる。

これって結局なんだったのか。
相変わらず謎のままだ。

二カ月後。

「…遠藤グループのチャイルドシートがグッドデザイン賞…」

「さすが父さん…転んでもタダじゃ起きないな。」

結局得したのは蒼偉。パパだけだったって事？
いやいや…。

「やっぱり唯は小さくなっても可愛い〜！もう一回小さくならな
いかしら！」

「美奈、これも可愛いぞ！でも急ごしらえだったとは言え、本当に
よく似合ってるよねー。僕、子供服のブランド立ちあげようかなー。」

「お、なかなかいいアイデアだな。秀人、高橋の子供の服作ってみるか？それで反応が良かったらーブランド好きにしていいいやつ譲

るぞ。」

お兄ちゃんのお立ちあげた子供服ブランドが世界的に有名になるのは、
また別の話…。

ちゃんちゃん

ゆい、ちいさくなる？（後書き）

これにてちいさくなるの巻は終了です。ありがとうございました。

次回のパラレル編はどうしようかなーと考えている最中です。シンデレラにしようかなと思っていてるところでもあります。

ずっとあなたが好きでした ? (前書き)

せつかくの平行線なので、こんなのもどうかなと思って。完全平行線ですのでご了承くださいませ。

ずっとあなたが好きでした？

今日義兄が結婚する。

華やかに、そして幸せそうに。

愛おしく見つめる先にいるのは、私じゃない。

義兄が好きだった。

でも、私の恋が叶う日はもう来ない。

* * * * *

「…ゆい…唯、どうかしたの？」

はっと意識を浮上させる。私の隣では、顔を覗きこむようにして屈んでいるお姉ちゃんが反応が鈍い私に訝しげな表情をしていたので、急いで笑顔を作って取り繕う。

「う、ううん、なんでもないけど…どうして？」

「唯ったら、最近なんだか頻繁にぼーっとしてるわよ？」

「そ、そう？あ、きつと緊張してるのかな。お兄ちゃんがちゃんと

新郎っぽくなってるのかなって。」

「あはは、確かにね。でもまあ、大丈夫じゃないかしら。お兄ちゃんもとうとうネングノオサメドキってやつなんじゃない？」

「年貢の納め時ね。うん、そう、そうなのかもね。」

多少動揺してしまったのは、多分お姉ちゃんに気付かれていないと思う。

そう、あれだけ女の人をとつかえひつかえして遊んでいたお兄ちゃんが、今日いよいよ結婚する。

相手は昔から付き合いのある桜さん。

あれだけがみ合っていた二人でも、元を正せばお互いに気持ちがあるのは明白で、結局すったもんだの末に今日の祝いの日を迎えたというわけだ。

お兄ちゃんと桜さんの結婚は、広く皆から祝福された。特に、自分に似た下半身を持ってしまったと散々嘆いていたパパが。数年前に亡くなった私のお母さんと結婚するまでは、お世辞にも節操がいいとは言えなかったパパだ。そんな悪い血を継いってしまった義兄への親心は如何ほどだったのか、それは当の本人のみ知る事だと思っている。

皆が諸手を挙げて祝福して入る中、私は複雑すぎる心境でいっぱいだった。

と言うのも、私の好きな人はお兄ちゃんだから。

お母さんとパパが再婚した当時、既に大学生だった義兄が私を構ってくれたのは単に父親の再婚相手の連れ子だからと言う理由だったのだと思う。その行動を本当の兄のように感じていた私が、過剰すぎるコミュニケーションを恋心に変換させたのは、多分小学生の頃だったと記憶している。

お兄ちゃんは優しい。

きっと私がお兄ちゃんを異性として好きだと言うのは、自身の好意に聡い彼はきつと気付いていた。それを私に悟らせないように、あくまでも『兄』として接してくれたのは本当に感謝している。私の『好き』だと言うのが『異性』として、という意味合いで告白していたら、きつと一線を引かれていたに違いない。

辛い恋なのはわかっていた。

最初から。

小さい頃から実りはしないと、どことなく感じていたもの今まで無視していたが、とうとう現実を直視するときが来たのだろう。

今日、兄とその伴侶が神に誓いを述べる。

死が二人を別つまで。

私は、女として、『義兄』という男と決別する。

ずっとあなたが好きでした？

せめて、この恋を失くさないように。

願うのはそれだけ。

もし、次があるのなら、この恋を幼い時の恋だったのよと笑って話せる時が来ると願って。

そして、貴方の側に立つ。

* * * * *

「誓います。」

静寂に包まれた教会で、お兄ちゃんが誓いの言葉を復唱する。

あれだけ無神論者だった人が、当の神に向かって結婚の誓いを述べているなんて…とどこか面白さを感じている自分が何だかおかしい。

『日本人はさ、なんで仏教徒が多いくせに教会で式挙げるわけ？キリスト教徒じゃあるまいし、神に誓ってどうすんのっていつも思ってる。だからあんまり結婚式って好きじゃないんだよね。』

と、結婚式のお知らせが届くたびに漏らしていたのに、桜さんのウエディングドレスを自らデザインしてそれを着た妻となる人を皆に見せびらかしたくて、今までの信念をころつと変えた。

人間変われば変わるもんだと、内心皮肉気に考える。

ふつと懐かしい思い出に口許を綻ばせると、なんだか視線を感じた。なんだろうと不思議に思ったものの、式中なので大仰に視線の元を辿る事が出来ないので控えめに首を動かしてみる。

新郎の親族席は最前列で、どうやら視線は後ろから感じる。と言う事は、お兄ちゃんのお友関係なんだろうな。でも誰？

私知ってるお兄ちゃんのお友達って言うてもそう多く無いし、その中でも高橋さんは新郎付き添い（ベストマン）だし…。ん…誰だろう？

結局それを深く追求する間もなく、式は粛々と進んで行った。

「おめでとー！ー！」

「このやろー！幸せそうに笑うなー！」

「桜ー、綺麗だよ！おめでとー！」

「くそー、なんでお前が先に結婚してやがるんだ！イケメンのくせに！ー！」

規定量より若干大目のライスシャワーを存分に浴びた本日の主役は、痛い痛いと言いつつ、友人達の手荒い歓迎を笑顔で受けていた。それを離れた場所でパパと二人で笑いながら見ていた私は、ちよつと顔を冷やしてくるねと言ってその場を離れた。何か言いたそうに心配気に私を見ていたパパだったけれど、仕事で付き合いのある人に声をかけたので仕方なく「あまり遠くに行くなよ」と言ってくれたので、私は祝福の声の輪から一人外れる事に成功した。

会場は有名ホテルに最近出来たチャペルで、この後軽いパーティがある。このままホテルに上がれば良かった。ホテルの広いガーデンをほてほてと一人で歩いていると、思うのはやはり暗い事ではない。

わかっていた事だけれど、いざ誓いのキスの場面。あれは本当に辛かった。

もう完全に、私が入る隙は無いのだと思われられたような気がして。

いや、違う。

私はちゃんとお兄ちゃんの中に入っている。妹として。だけど。

なんだかなあ…と自嘲の笑みが零れる。と言つか、もう笑うしかないって感じた。

お兄ちゃんが結婚すると家族に言った時、遂に来たかと言う嫉妬する気持ちと共に、安堵の気持ちも湧きあがったのは本当に本心から。私の思いは成就しない。そう確信を持っていたからこそ、そこに立つ桜さんへの嫉妬と共に嬉しいと言う、相反する気持ちがあったのだと思う。

確かにその夜から一人で泣いた。本当に悲しいときは声が出ないものなんだと、どこか第三者的な感想も持ちつつ、枕を濡らした。朝起きて、腫れた目元を見られ無かったのはひとえに一人暮らしをしていたからだと思う。そうでなかったら、確実にシスコンの二人が何があっただと騒ぐに決まっているから。

なんとなくパパは気付いていたのではないかなと思う。だからこそ何も言わずに側にいてくれたのだと思うから。私を送り出す時に見せていた、あの心配そうな顔もそうと考えれば合点がいく。

よく晴れた空を見上げて、はぁ…と深いため息を付いた。もう涙は出ないものの、やはり辛いものは辛い。

この辛かった恋が将来、私の糧になる日は来るのだろうか。

恋をするのは今はもう、いいやって思う。

若干十七にして枯れてるなあと思うけど、しばらくは感傷に浸るとするに限る。

青空を見てぼんやりしていると、ふわりと煙が漂ってきた。

タバコの匂い…？ここって禁煙じゃなかったっけ？あれ、でも屋外だから…いいのかな？

家では誰もタバコを吸わないので私にとっては馴染みのない香りだったけれど、妙にそのタバコの煙が気になって、つつい煙を辿ってみることにした。

ずっとあなたが好きでした？

タバコの匂いは好きじゃない。

髪の毛に匂いが付くし、服にも漏れなく付いてくる。正直厄介な物だという認識しか持っていない。

それでも。

あなたが纏うタバコの香りは、嫌いじゃない。

それどころか

* * * * *

さわさわと風が木々を揺らす音と、心地のよい噴水の音が辺りには満ちている。今日はお兄ちゃんの晴れの日に相応しく、狙い定めたように快晴だった。前日までの雨が嘘の様に、澄み渡った青が大空を染め上げている。

さくさくとホテルの庭園を歩く私は、先程からふわふわと漂って行く白い煙の元を探していた。

外なのでタバコを吸う人は珍しくも無いし、ましてやお兄ちゃんの友人やら桜さんのお友達やらが招かれている。大人な彼等が自由に

喫煙するのは構わないし、私ももとよりタバコ嫌いなのでこうして匂いの元を辿ろうとは思わない。それなのにこうして足が進んだのは、何かに導かれたのかもしれない。

その後から思っようになった。

「あ…あれ…？…遠藤先生？」

私の声に気付いた人影が、それまで下げていた視線を私の方へと移す。若干色素の薄い茶色い双眸が私を捕らえると、彼は啞えていたタバコを口から離して携帯灰皿へともみ消した。

「よう。もうすぐパーティが始まるぞ。桐生さんの身内なのに、こんな所にいていいのか？」

「先生、来てたんですね。」

「招待状来たからな。大学で世話になった先輩の結婚式だ、そりゃ来るだろ」

「そういえばそうですね。……おあ…先生いつにも増してイケメンオーラが…」

「だろ？」

ふふつと笑って見上げる。

いつものラフだけど決まっている髪型ではなく、撫で付けられて大人っぽい、少し癖のある髪が今は少しだけ崩れている。それがまた何とも……。勿論、結婚式用のスーツだし。しっかし……。いいスーツ着ているなあ。それをさらつと着こなしているのが、嫌味な位にかっこいい。

先生：遠藤亨は私の高校の先生でありながら、お兄ちゃんの大学時代の後輩で、しかも今もなお交流があるという人で、私ととても縁のある人でもある。

私が高校に入学した時、まさかいつも家に遊びに来ていた亨お兄ちゃんがこの学校の教師を勤めているだなんて知らなかったのも、本当に驚いた。それは彼も同じだったらしく、お互い数秒見合った後、「すごい偶然」だと苦笑したのは懐かしい思い出だったりする。私は小さい頃、すでに大きかった翼お兄ちゃんと亨お兄ちゃんの後ろをカルガモの子供のようにいつも付いて回り、彼等二人に相当甘えて構ってもらっていたのだが、今は生徒と教師と言うこともあり、ちゃんと『先生』と呼ぶようにしている。勿論敬語でも話すようにしているし、極力校内では二人で話さないようにしているが、それでも顔馴染み以上の関係であることには変わりはない。

元々アメリカに住んでいた時、私の実父である『神崎千歳』と交流のあった亨お兄ちゃん達は、父が亡くなるなりすぐさまアメリカにまで尋ねてきてくれた。当時まだ中学生だったであろうに、双子の兄である翼お兄ちゃんとも一緒になってシカゴの家で行われた葬儀に参列してくれたのだ。

私と言えば、まだまだ二歳かそこの幼子だった為に詳しい事はよく覚えていないが、お母さんが再婚するまで相当二人に気遣ってもらっていたと聞いている。

勿論、数年前に亡くなったお母さんの葬儀も参列してくれた。その時は有難いことに彼等のご両親までもが一緒に来てくれるということもあった。

うちの両親と、遠藤家の皆様との間に何があつたのかさっぱりわからないけど、私はあの遠藤グループ総帥である愁清おじい様と珠緒おばあ様、現CEOの蒼偉パパと雅ちゃんにも相当可愛がってもらっている。

パパとお母さんが再婚し、そしてお兄ちゃんが亨お兄ちゃん先輩だと言う偶然に次ぐ偶然もまた重なり、はたまた学校まで同じだと言う縁の強さ。その不思議なまでの縁を珠緒おばあ様に言わせると私と亨お兄ちゃんの縁と言うのは『運命』なのだそう。まあそう言う人間関係にも『運命』つてのもありかもしれない。とただ漠然と私は思っている。

一つ困っているのは、超ロマン派少女趣味の雅ちゃんです…。

「あ、そうだ。母さんからお前のドレス姿撮って来いって言われているんだ。こっち向け。」

「え。」

「翼も来てるから後で翼にも見せてやれよ。ついでに写真も撮らせてやれ。母さんが喜ぶ。」

「きよ、拒否権は…」

「あるわけないだろ。」

「バカって言う方がバカなんだぞ。知ってるか？」

「知らないもん！もー、ホントにそれ嫌！」

153cmしかない私が180オーバーの巨人に勝とうなんて無理に決まってる。それをわかっていながら携帯を上にするお兄ちゃん、三十路も間際のくせに本大人気無いし！！

だから気が抜けてた。いつの間にか敬語が抜け、『先生』からいつものように『亨お兄ちゃん』と呼んでいる事に。

「もう！！そんな性格悪くちゃ、いつまで経っても結婚出来ないよ！オジサン！！」

「オジサン…俺まだ二十九だっつもの。」

「『もう』だよ！！アラサー男め、いい加減フラフラ遊ぶのやめたら？この前も雅ちゃんか怒ってたよ？また長続きもしないくせに新しい彼女が出来てっつて！！」

「……………」

「あー、お兄ちゃんも結婚したって言うのに、遠藤家の息子共は…全く！！早くお嫁さん見つけたら？」

「…大丈夫か？」

「何が？」

「桐生さんの結婚、お前大丈夫か？」

ひゅうつと息を飲んだのがわかった。

亨お兄ちゃんにとっては、それが返事みたいなものだったのだと思う。さっきまで小バカにしたような顔をしてたのが急に真面目な顔になって、私を心配そうに見てるから。

「…いいいい、つから…気付いてたの？」

「最初から。お前が桐生さんの事をただの義兄以上の目で見出した時から気付いてた。」

「た…翼お兄、ちゃんは……」

「大丈夫だ、俺しか気付いてない。だから安心しろ。」

いつだってそう。

亨お兄ちゃんはいつも私の些細な変化に気付く。お母さんが亡くなった時に、人にはわからない様に情緒不安定になっていた私の側にいてくれたのもこの人だった。

だから、私はこの人に勝てない。

弱い私を、何処までも許容してくれて、尚且つ甘やかしてくれるから。

「泣きたいんだったら今の内に泣いておけ。だけど、ここで泣いたらもう泣くな。区切りを付ける為にも、ここで泣け。」

「……………もう……………もう泣けないもん……………」

「だったら泣けるまで側にいてやるから。」

ほら。と言いながら腕を引かれ、ぽすつとぶつかった高そうなブラックスーツ。

こんないいスーツに涙の跡なんて残せない。そうは思いながらも、亨お兄ちゃんが緩く抱き締めてくれる温かさに、いつの間にか私の枯れ果てたと思っていた涙も滂沱となって流れ出した。

私が泣いている最中、スーツからふわふわと香っているタバコの香りが、私を落ち着かせてくれるようなそんな気がした。

ずっとあなたが好きでした？

些細なこと

どんな些細なことでも貴方は気付く

誰もが気付かないことでも

貴方だけは

* * * * *

暫く泣いていると、急に亨お兄ちゃんが近くにあったベンチへと私を座らせた。

ずっと亨お兄ちゃんの胸にしがみ付いて泣いていた私も、少しばかり落ち着きを取り戻して来たのかひつくひつくとしやくり上げはするものの、ようやく涙は止まったように思える。持っていたバッグからハンカチをのろのろと取り出して涙を拭おうとするものの、それは大きな手によって阻止された。

「そのまま拭いたら目腫れるぞ。待ってる、冷やしたタオル貰ってきてやるから。ついでだ、飲み物ももらってくるから大人しくここにいろよ。わかったか？」

うんと頷いてハンカチを握り締めていると、やっぱり大きな手で頭

を優しく撫でられた。

そう言えばこの大きな手が好きで、昔はこうして特に理由もなく頭を撫でて貰っていた事もある。さすがに高校生にもなって昔みたいに撫でてもらう機会はなくなっただけ、やっぱりこうして亨お兄ちゃんに撫でてもらうのが一番安心出来る。

生まれた時から…いや、お母さんのお腹の中にいた頃から知ってるらしい翼お兄ちゃんと亨お兄ちゃんは、機会があればこうして私の事を構ってくれるけど、二人ももうそろそろ彼女と身を固める年頃だ。事実、翼お兄ちゃんの結婚の話はそろそろ本格的になりそうだし。

いつまでも子供で、しかも彼等の実の妹でもないし、親類関係でもない、単なる『知り合いの子供』って言うだけの私は、いつまで経っても甘ったれのまま。

だからこそ、こうして慰めて貰うのが常になっている現状。

それでも、確実に取られている距離。

初めに距離を取ったのは、亨お兄ちゃんからだっただけ。

今まではくっついたりしてのが当たり前だったのに、いつからかそれを良しとしなくなった彼によって一緒に遊んで貰うことも少なくなかった。

まあ、一回りも年が離れているのだからそれも当然なのだろうけど、幼い頃の私にはそんな事情も理解できるはずもなく。

『たすくとおるとあそぶのー！』と泣きながらお母さんにしがみ付いたのは、懐かしい思い出だ。

距離を取ったと云えど、翼お兄ちゃんはやっぱり優しくて。私が泣く前に機嫌を取ってくれたりしたのだけれど、亨お兄ちゃんはそれをしなかった。私の駄々が本当にどうしようもなくなくて、お母さんがほとほと困り果てても亨お兄ちゃんは私を突き放したままだった。

そんな事が繰り返される内、私は幼いながらも悟った。

亨お兄ちゃんは私を鬱陶しく思ってるんだ。

だから私が嫌いなんだ。

と。

パパとお母さんが再婚してからも遠藤一家とは懇意にしてもらったけれど、そこに亨お兄ちゃんの名前はない。

何故なら、私にかまけているよりも他の綺麗な大人の人と付き合うようになったから。

たまたま街で見かけた時、亨お兄ちゃんの隣に居たのは綺麗なモデルさんのような人だった。まあ、お姉ちゃんの方が綺麗だしスタイルもいいし、かっこよかったって言うのは置いておいて。とにかくまあ、かっこいい亨お兄ちゃんとはお似合いすぎて、なんだかもう端から見ていてため息の出るような二人が腕を組んで歩いているのを見てしまったのだ。

それから私は、亨お兄ちゃんに取られている距離を自分で更に広げ

た。

その距離を埋めるように優しくしてくれたのが、秀人お兄ちゃんだ
ったって言うわけで…。

お兄ちゃんは本当に優しくかった。

再婚した当初こそ辛辣に当たられたけれども、それを乗り切ったお
兄ちゃんからの愛情は本物だった。

ま、まあ、周りからはシスコンが過ぎると言われている節があつた
けれど、本人はどこ吹く風で私を可愛がってくれた。

だから、私も思いつきり甘える事にした。

そこに亨お兄ちゃんの代わりだとか言う考えはあつたのかもしれない
いが、私からしたらその自覚は全く無く、単純に安心出来る優しい
兄だという思いからだった。

そんな義兄への愛情が、恋心に変わるなんて、本当に笑えない。

しかも、その恋は告白もさせてもらえずに終わった。

優しいお兄ちゃん。

残酷なお兄ちゃん。

でも、嫌いになれない私。

「ほんと…笑えないなあ…」

「何がだ？」

まさか独り言に返事があるとは思っていなかったので驚いて身体が跳ね上がらせると、私の様子を胡乱気な目をして見ていた亨お兄ちゃん、缶コーヒーを二つとタオルを持って立っていた。

「ほら、タオル。一応冷やしとけ。」

「あ、ありがとうございます…」

「それと。ほら、ミルクティーでいいか？」

「あー、ありがとうございますー。ふわ、あったかい…」

「もうパーティー始まつてるみたいだぞ。」

「ん、そうなんですか。」

甘くてあったかいミルクティーを一口飲んで、答える。

隣ではコーヒーを飲みながらタバコを取り出している亨お兄ちゃん。

むう、タバコ嫌いなのに。

「…タバコ嫌い。」

「お前、おばあ様と同じこと言ってるな。」

「せめて一言断ってくださいよ。」

「タバコ吸うぞ。」

「…それ断ってるって言わないんですけど…」

はっと鼻で笑われ、ムカついたけど私はそのままタバコに火を着けるのを見ていた。

私は別になんとも思わないけど、友達の綾乃や愛理ちゃんなんかは亨お兄ちゃんをカツコイイ、カツコイイと騒いでいる。まあ、確かに顔はいいと思うけど…。性格が…。

「なんだ？人の顔をじろじろと。」

「性格がなあ……………」

「あ？」

「亨お兄ちゃん、性格が悪いからなあ……………」

「…おい……………」

「せめてパパみたいなの…いや、パパは駄目か。…お兄ちゃん…あ、駄目だ。フェミニストじゃないもんな……………」

「おい…！」

「早乙女先生…あーもつと駄目だ、ヘタレだもん。翼お兄ちゃん…あーそつか。翼お兄ちゃん！！双子だし！！」

「おい！」

あれ？何かすつごい睨まれてるんだけど…。もしかして今の考え口に出た？

すつごい不機嫌そうだと亨お兄ちゃんに睨まれつつ、私はへらっと笑ってみる。

あ、あは…？フォロー出来るかな…？

「き、聞こえてました…？」

「ああ。ばつちりな。」

「…え、えへ？」

「はははは」

笑ってない！！目が笑ってない！！

亨お兄ちゃんは私を睨んだまま、タバコを一口吸い込んだ。

だってさあ。同じ顔で同じ体格してるのに、性格が真逆だし。そりゃあ翼お兄ちゃんの方を好ましいと思うっちゃう。

実際、お兄ちゃんみたいに優しいし。反対に亨お兄ちゃんは優しく無いし。

…まあ。なんでか今日みたいに泣きたい時に限って翼お兄ちゃんじゃなく、亨お兄ちゃんが来るんだよね。
何でだろう。

「知りたいか？」

「え？そりゃあ…昔はエスパーかと思ってましたし。」

「生憎、俺は超能力者じゃない。」

「じゃあ、なん」

その先は続けられなかった。

亨お兄ちゃんにキスされてるから。

ずっとあなたが好きでした？

熱に飲み込まれるように翻弄される。

それまではずっと穏やかな岸にいたはずなのに、沖へ沖へと引きずり込まれる。

足が付かないことへの恐怖と、その事にどこか解放感を感じざるを得ない興奮と。

わからないのは、それを私自身がどこかで望んでいるって言うことだ。

* * * * *

色素の薄い茶色い瞳が、私の瞳をのぞき込むように近付いて来たかと思ったら、そのまま私の唇に何かに触れた。

驚いて目を見張るとほぼ同時に、少し離れたと思ったソレが私の呼吸を奪った。

「んう…ふあっ…うん…」

何がなんだかわからない状態でされるがままになっていたら、いつ

の間にかがっちりと後頭部を押さえ込まれて身動き取れなくなっていた。

しかも息が出来なくて苦しいくて、少し唇離れた時にこれ幸いと私が口開いた瞬間狙って舌入れてくるしー！！

ああもう何がなんだかわからない。

最中、鼻にかかった私のうめき声ももう耳を塞ぎたい位恥ずかしいし！

気持ちがいいんだかなんだかわからないまま、半分酸欠状態で頭がぼーっとしてくるのに音だけはやけにリアルすぎて。それがすごい恥ずかしい。

そのうちとうとう息苦しくなった私は、力の入らない手でどんどんと固い胸を叩いた。実際はどんどんじゃなく、ぺしぺし程度だったんだろうけど、どうせひ弱な私が叩いた所で痛くもかゆくもないと思う。でも、それでようやくお互いの唇が離れた。

離れた時にキラリと光った糸を私の唇ごとべろりと舐められた。その時の顔が、もうこれでもか！って位エロかったので、ものすごい恥ずかしくなって急いで俯いた。

長い、しかもいきなりのキスのせいでも若干の酸素不足になった私が俯きながらはふはふ喘いでいると、いつの間にか膝に座っている状態になって、背中に回された手でゆるゆると撫でられているのに気づいた。

い…いつの間に膝に…！

あまりの素早さに驚くのと同時に、半分呆然としてしまう。

何のために私とキスしたのかわからない。
失恋を慰めるためだったら、わざわざキスする必要はない。

だったらこのキスは嫌がらせ？

ああ、そうか。

嫌がらせか…。

それがすんなりと私の頭の中に抵抗なく、浸透する。急に泣きたくなっただけ、それが何故かはわからない。

反射的に、私は抱えるようにして乗っていた膝から急いで降りようとしたのだけれど、当の本人がそれを許してくれなかった。

「おりる。はなして。」

「嫌だっついたら？」

「おりる！はなしてよお！！」

「駄目だっつってんだろ。」

「なん…何で！？嫌がらせならもうやめてよ！…そ…そんなに私が鬱陶しいならもう構わなくていいし！私が嫌いならそう言えばいいじゃない！嫌いなんでしょ！？だったらっ！」

「何だよ、それ。」

一向に放してくれない腕から躍起になって暴れていた身体を、低い声が押さえつけた。

びくりと口を閉ざして驚いて声のした方を見ると、目の前の整った顔がやけに怖かった。それは今までに見た事の無いほどの、怒った顔で。

何で怒っているのかわからない。むしろ怒りたいのはいきなりキスされたこっちの方なのに、その私の怒りもこの人の怒り具合には勝てないらしい。

「誰が鬱陶しいって言った。」

「……だって……」

「俺は鬱陶しいとも、お前が嫌いだとも言った覚えはねえぞ。」

「…………だって、言ってたもん。」

「誰が。」

「……亨お兄ちゃんと付き合ってた女の友達。私みたいな子供が付きまとってたらお兄ちゃんにとって邪魔なだけだって。」

「……誰がそんな事お前に吹き込んだ。」

な、何かさつきより気温が下がったんですけど。明らかに機嫌が悪くなってませんか、先生。

「…それに、さ、さ…さっきの………アレだって……義理のお兄ちゃんを勝手に好きになって勝手に失恋した私を馬鹿にし……んう！」

急に顎を上げられたと思ったら、また急にキスしてきたし！

逃げようにもがっちり押えられてるから逃げられないし、そもそも力が入らない。さっきよりは短い時間で唇が離されたとは言え、既に息も絶え絶えな私はもう何か投げやりな気持ちになって、力が入らない身体を亨お兄ちゃんにもたれさせた。

「誰がお前に何を吹き込んだのかは知らないが、俺がお前を嫌ってるって事は無いぞ」

「…で、でも…」

「馬鹿にもしてない。それに、キスの事も謝る気はないからな」

な…なんて俺様野郎…！！

あまりの俺様発言にカチンと来た私が顔を上げると、タバコを啜えながら私を見ている亨お兄ちゃんがいた。

「お前鈍いから気付いてないと思うけど。」

「にぶっ…！何が…！」

「俺がお前に惚れてるってこと。」

……

え？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7686s/>

あみものべいびー ばんがいへん

2011年11月22日23時47分発行